
MYTH

クローネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MYTH

【Nコード】

N6740J

【作者名】

クローネ

【あらすじ】

北の大地、シンオウ地方。この舞台で、地方全体を巻き込む騒動が起こる。予期なく攫われた少女と、残された彼女のポケモンたち。残された彼らはトレーナーとシンオウ地方を救う為に立ち上がったのであった。

1話 始まり (前書き)

これは他のサイトに投稿したのをリメイク(というより手直し)したものです。

処女作で、よく分からない部分もあると思いますが、極力そういつた部分は作らないよう努めたいと思います。

1話 始まり

世の中、どこの世界にも神話というものが存在する。人により受け取り方は様々であり事実無根、荒唐無稽だと笑い飛ばす者もいる。方や信じてやまない者もいる。大抵は前者であろう。

神話というものは前者の言う通り、常識を逸脱した仰仰しいものが殆ど。しかしそれ故にもしそれらが実際起きたとしたら……人々が否定するのは、このことを恐れているのかも知れない。

これから始まる話は神話に憑かれた男と一人の少女トレーナーと、そのポケモン達の戦いとも言える話。

どちらが勝つか……まだ分かるのは先の方である。

餓鬼の頃から不思議だった。

何故海ができたのか。

何故陸が隆起したのか。

何故風が吹くのか。花が咲くのか。星が瞬くのか。時間が、空間が、宇宙ができたのか。

大人に片っ端から聞いたが誰一人満足に答えられる奴はいなかった。

この飢えを満たしたのが神話。そうするしか自分を欺けなかった。

だが俺は次第に神話に惹かれていく。成長するにつれて実現させたいと思つていく。
とうとう抑えきれなかった。

俺は時間と空間に目を付けた。万物もこれには背けない。因みにこの二つを弄れば俗に言うワープが可能となるが、俺にとってはどうでもいい。

俺は この二つを支配する。
そのため俺はここまで来た。同士を集め、日夜研究。ようやくそれが報われる時が来たのだ。

そして、ずっと秘めていた俺の計画を必ずや成功させる。

まずは
“空間”だ。

2話 とある少女の好奇心

「むっ……サルコ、暇だね……」

「暇だからって、人の尻尾掴むなよ！ 鬱陶しい」

ここはフタバタウン。これといった名所はないが、のどかな町である。

そこに住んでいる藍色の髪をした1人の少女は彼女のポケモン、サルコと呼ばれたゴウカザルの尻尾を引っ掴みながら暇を持て余していた。

「そんなこと言わなくてもいいじゃん。ここまで育てていったのは誰だと思ってるの？」

「育てたからって尻尾を掴んで良い権利なんて聞いたことねえ……よ！」

彼はそう反論して自慢の頭に宿す炎を揺らしながら、彼女の腕の檻から尻尾を逃がした。

「お前さ、その奇行どうにか……って、おいヒツキ、聞いてんのか！」

ヒツキと呼ばれた少女はサルコに突っ込まれた途端に布団に顔を埋め、わざとらしく目を潤ませて目から上だけ顔を覗かせた。

「私、サルコの言ってることが分からない……ねえ、何て言ってるの……？」

「誤魔化すなあっ！ 何シリアス調に訴えてんだ！」

彼女は生まれつきポケモンの言葉を解する能力を持っている。この能力は、彼女のトレーナー事業に大いに貢献している。言い忘れたが、彼女は最早金の為にトレーナーをやっていると云っても過言では……いや、少々の語弊があるがそれもひっくるめてお金が大好きなのだ。

トリック・オア・トリート、菓子より山吹色の菓子 である。だが、彼女は金の為に彼らを虐げたりは決してしない。只彼女は彼の活躍で得た物を素直に享受しているだけで、まあしかし、少し限度を超えてしまう時もあるが……

今はお小遣いの域を超えた‘資産’とも言える程金があり、使い道もないのでこうしてグダグダしている訳だ。

「そだ、サルコ。テレビ付けて。」

「……Wiiが付いてるけど」

「それ切って、長押しね。中途半端だとスリープ状態になっちゃうから」

「はいはい……これでいいか？」

「ナイス サルコ愛してるっ！」

この行為がこれから始まる話の引き金になることになる。

付けると丁度正午のニュースが流れていた。

『先日ハクタイシティにある像が忽然と無くなっているのを近所の住民が』

キャスターはいつもの淡々とした口調でこの不可解な事件を告げている。何気なくそれを見ていたヒヅキはこれまた何気なく、隣りにいたサルコにあることを訊いた。

「サルコ」。像ってあのパル何とかっていうポケモンだよな？」

「パルキアだ。あと二文字位覚えておけよ……」

それで会話は終わったのだが、時間が経つにつれてヒヅキはそわそわしていた。更に少し時間が経つと、今度はサルコに向き合った。

「ね、見に行く？」

野次馬根性丸出しである。彼女の藍の瞳はより輝いていた。好奇心に火がついた証拠だ。

こうなることは良くあるらしい。サルコは『またかよ』と呟いた。

「何でだよ、面倒くさい」

「サルコはボールに入っていればいいからさ、ね？ どうせ暇だし」

「……まあお前が行きたいのなら別にいいけど」

食い下がる彼女に、彼は折れる。彼も少し気になってはいたみた

いだ。

「そーこなくつちゃ！ じゃ、戻れサルコ！ 任せた、スताल！」

ヒヅキはサルコをボールに戻し、別のボールを投げた。彼と入れ替わり出てきたのは目付きが鋭く、前方に突き出たトサカが特徴的な鳥ポケモンであった。

「なんでい、俺様に何か用か？ こんな狭え部屋に出してよ」

スतालと呼ばれたムクホークは歯切れの良い口調でヒヅキに問い掛けた。

「あなたを出したんなら目的は一つ、でしょ？ ハクタイまで飛んで！」

「だから何で部屋ん中「オトコは細かいこと言わない！ さ、はや・くう！」

彼に疑問を吐き出させる暇も与えず、彼女は早速彼の背に乗って急かした。既に彼女の中のブレーキは利かなくなっていた。

「わあつた、わあつた、飛べばお前さんは満足するんだろ！」

「そーそー！ 話分かるじゃない！ よっ、オトコ前！」

「調子いいこと言いやがって……」

そう言うものの、男前と言われ満更でもなかった彼は、彼女を乗せ例よりハイスピードでハクタイまで飛び立った。

3話 ハクタイで悪態

ハクタイに着くとそこには黒山の人集りができていた。ビデオカメラ片手の人もいれば、この現場を見るために急ぎすぎたのか、着の身着のままの人もいる。中にはギンガ団のアジトによじ登ってまで見物しようとする人も。

ヒヅキは人集りの最後尾で、その光景に圧倒されていた。

「つつわ〜人・人・人・猿……何だ、サルコも見たいんじゃない」

「まあな。こんな光景見られないから、見ておこうと思ったんだよ……けど、何だよこの人ごみは」

いつの間にかヒヅキの背後にいたサルコ。からかって頬をつつく彼女の手を振りほどいて引かない人の潮に辟易していた。

「みんなヒマなんだねえ……ところでさ、私気が付いたんだけど」

「何を？」

ヒヅキの言ったことに、サルコはかぶりを傾げた。どうせしようもないことだと思いつつも、前を見れば人の壁。こんなのを延々と眺めているよりも、彼女の戯言に付き合っていた方が幾分かマシと、彼は彼女の話を耳を傾けた。

「無くなったのってパルキアの像だよな？」

「ああ、そうだけど、何か問題があるのか？」

「私達のヴァージョン設定はダイヤモンドじゃない？だったらこの像は本来……」

「つつ！！ それ以上言うな！ 話が進まなくなる！」

「ええ？」

やはり戯言。この場合は『たわごと』と読めば、しっくりくる。彼らは一体何のことを話しているのか。

「只のアホな作者の勘違いだ、気にすんな！ ……あーもう、行き成りメタに目覚めるなよ！」

「サルコだつて話とか何とか言つてたじゃんつ。作者の裏事情まで知ってるしさあ」

「あ いえばこ いう。すぐにお前は……」

「何さ、いいもん。サルコの寝てる間に頭の火始末してあげるんだから！」

「ニアイコール殺すんじゃねえか！ 止めるよ、そんなことすんなつ！！」

1人と1匹は奇妙な口喧嘩で肝心なものをまだ見ていなかった……

取り敢えず1人と1匹は喧嘩を収束させ、人を掻き分けて注目の

的となつていているものを見た。そこにはまるでクレーターのようだがぼつかりと空いている。

「どうやって盗んだんだろうな？」

「盗んだって？」

自分のポケモンの言ったことに要領を得ず、ヒツキはサルコに答えを与えない代わりに逆に質問した。

「像が勝手にとことこ動く訳ないだろ！ きっと人為的な仕業だ。

……あんな馬鹿でかいものを盗むなんて、よっぽど欲しかったんだな。偶像崇拜者か？」

「ナゾだよねえ……」

「考える気ないくせに、よく言っぜ」

彼は、仰々しく考えるフリをしている彼女を軽くあしらう。見透かされた本人はぶくりと頬を膨らませた。

「考えてもしょーがないじゃん。もう見たことだし帰」

「そうだ、ヒツキ。外出たついでにズイに寄ってくれないか？ ソフィーの様子が心配で」

「ヨツキュウフマンなの？」

「ばっ……！！ 馬鹿違うわ！ どこで覚えたそんな言葉?!」

真顔でそんなことを言う少女、ヒツキ。意味は分かかっていないと信じた。彼女の思いもよらない語彙に、サルコは赤みかかった顔を更に赤らめた。

因みにソフィーとはサルコの妻のアブソルである。子を一匹産んだ後、体調がいまいち優れず、ずっと育て屋に預かって貰っている。

「そーだなあ。よし、アルバイトもしたいし、行こか！」

ヒツキは再びスタイルを召喚、ズイへと旅立った。

3話 ハクタイで悪態 (後書き)

ヒヅキとサルコの言うていたことは本当です^^^ ;
どうして四足と二足を間違えるかなあ……orz
そしてタイトルがふざけ過ぎだぞ、私。

4話 始動

「カイドウ様」

何処かの、誰にも知られていない地下室に一人の男の名が響く。コートを身に付け、長髪を後ろに束ねている男はその声の方向に振り向いた。

「何だ、パーセク」

大量のモニターを凝視していた不機嫌そうな目がこちらに平行移動し、パーセクという、頭に鉢巻をつけ、ツナギ姿に上着を羽織っている男は少したじろきながらも自分の伝えるべき旨を伝えた。

「例の物を探している最中に興味深い少女を見つけまして…」

「お前の趣味に付き合っている程、そんなに俺が暇に見えるのか…?」

漫画チックな青筋を浮かべるカイドウ。無理もない。生涯を捧げてでも打ち込んでいるこの研究、水を差されては誰だって腹は立つ。

「ち……違います！ 私にはそんな趣味はありませんし、そういう意味ではありません！」

「だったら何なんだっ！！」

ドンツと勢いよくデスクを叩く彼。例の物がなかなか見つからないことも相俟って苛立ちは最高潮のようだ。逆鱗に触れてしまった

パーセクはこれ以上竜を刺激せずに宥めにかかった。

「カイドウ様の懸念されていた問題が解決しそうですね……」

「問題　とは、どの？」

「あれの言語問題ですよ」

パーセクが指差した先には無くなった筈のパールキア像だった。すると、さっきの不機嫌さが嘘のよう、眉間の皺も消えた。

「ハクタイの像の前を巡回していた私の部下がその問題を解くカギになる少女を見つけたそうなんです！」

彼はその様子を見て味をしめたらしく、興奮気味に話した。どうやら宥めることに成功したらしい。

「それで、少女とはどんな……」

「ここに送られた記録があります」

パーセクが取り出したのは一本の映像。

「……撮影させたのか？やはり趣味」

「違いますって！　この方が信憑性があると思って……！」

くすりと笑うカイドウと、半ら笑いのパーセク。先刻とは違い、同じようなやりとりでも雰囲気が違う。それほど彼の報告は大きなものだった。

「ではその映像を見せる」

「はっ！ ただいまお見せします！」

パーセクはそそくさと映像機をセットし、カイドウに見せた。見ている目の先には ヒツキが映っていた。

「見た目普通の少女だが」

「いえ、この後彼女に引っ付いているゴウカザルと彼女が口喧嘩をします」

「そんな事が……あ……」

思わずカイドウは言葉を失った。

彼女が独り言のように、何かに話し掛けているように何かを話し始める。端から見れば電波だが、傍らのゴウカザルはそれに応えて鳴いていた。

彼女が質問しては鳴き、怒っては一緒に怒り、脅しには焦る。かといって人間が一方的に話してポケモンが反応しているのではない。

彼女もまた、ゴウカザルに答えているように話している。

証拠に彼女はゴウカザルの質問の答えをきちんと理解していた。

紛れもないキャッチボールが成立していたのである。

「もしかして彼女の正体はメタモンでしょうか？」

「ならば人語を言う筈ないだろう」

「ですよね……」

カイドウは無意識的に武者震いをしていた。

これは逸材だ 得てしがない

「しかし、カイドウ様。この像の実体化にあたって何故ポケモンの言語を解する者が必要なんですか」

恍惚状態であつた彼は手下の一言で現実に戻され、その張本人を軽く睨んだ。

「ひっ…な、何か私が不適切な発言でも……？」

「……いい。こちらの話だ。まず、この像を実体化させたと仮定しよう。しかし、相手は神だ。こちらの無礼に怒るだろう。宥めるにも言語が分からずしては一方的で益々言う事を聞かなくなる。神の手に掛かれば、こんな所など一発だ。そうとなつては元も子も無い力を使わせて貰うにしても何か条件を課すことも有り得る」

カイドウの口から実体化という言葉が出てきた。彼は何をしようとしているのか、この時点では明らかになっていない。しかし、随分と背伸びをした計画であることは確かである。

「成る程。しかし、翻訳は機械でも……」

「パーセク、ピカチュウの鳴き声はどんな風だ」

部下の発言を遮って総帥は急にピカチュウの鳴き真似をするように促す。

「えっ?! ぴ、ピカピカ……」

「ならば、マリル」

「リルリル……」

「ミカルゲ」

「お、おんみょくん……?」

「トリトドン」

「うっ……」

「と、このように種族によって鳴き声が違う。一種類ずつ作っているのは金も時間もかかる。そもそもサンプルの彼らの鳴き声がないだろう」

「は、はぁ……」

実際種族が違っててもポケモン同士での会話は成立する。一種類の適当なサンプルをとって研究すれば十分全種類の言語を翻訳できる。人の耳に聞こえる鳴き声が異なっているだけなのだ。

どうやらカイドウはそのテの研究には通曉していないようであった。

「カイドウ様ーっ!」

また1人、部屋に誰か入ってきた。青みかかったウェーブヘアに、白衣を纏った研究員風の女性であった。

「スペクトル、今はパーセクと」

「装置が反応したんです！」

「何だかつ……何処に向かって?!」

「それが……」

スペクトルというその女性はモニターに視線を移した。

「この少女に向かって顕著に。しかも3匹共」

「馬鹿なつ……既に捕まえられていたのかっ」

彼は驚愕した。道理で湖を探してもいないわけである。よもや人の手に渡っていようとは。

「流石にパソコンにいる分は分かりませんでしたわ」

「どうします?」

パーセクはカイドウに指示を仰いだが、彼は口端を上げて彼らに背を向けた。

「愚問だな。奪うほかないだろう」

「只今彼女はズイへ向かっていて、それに先立ちセフアイドが部下を派遣し、ある作戦を遂行。奪った頃合いを見て我々も……」

「承知した。でかしたぞ、パーセク、スペクトル」

彼は平静を装っているものの、野望が実現しそうなのだ、手下がいなかったらその場で踊り出していただろう。

「待っているよ」

4話 始動 (後書き)

セファイドという名前はまだ無視して下さい。
その内出しますので^^^;

サル「計画性ねえなあ」

5話 夫婦再会

「こんにちはーっ」

「あれまあ、キクちゃんいらっしやい」

穏やかな風が草原を気持ち良く撫でる。牧歌が聞こえてきそう、そんなズイタウンに育て屋を構えている老夫婦は、歓迎の意を持ってヒツキを出迎えた。

「ソフィーの様子、どうですか？」

「薬の効果もあつて、今は大分落ち着いているようじゃよ」

「良かったー！ あのね、サルコが会いたがっていたの！」

彼女はそれを聞いて胸を撫で下ろし、満面の笑みでサルコの入っているボールを取り出した。

「今なら会わせてやっても大丈夫じゃ。折角だから全員出して休ませてやったらどうかのう？」

「そうじゃ。いつも窮屈なボールの中では、すとれす、も溜まるじやろうて。ポケモンも人間も自然が一番じゃ」

「え、本当？ ありがとうございますっ！」

嬉しそうにぴよんと小さくジャンプ。いちいち喜びを表に出すヒツキに、老夫婦は微笑んだ。

「ほっほ。いいんじゃない、常連さんだからの」

ポケモンを預けることはあまりないが、ちよくちよく顔を出しているヒツキを、彼らは孫のように可愛がっていた。

早速ヒツキは6つのボールを一斉に投げる。出てきた各々は彼女の前に集まった。

「みんな暫くここで自由にしてて」

「あ、ヒツキさん。来てくださったんですね」

やや離れたところから、あるポケモンがゆっくりと歩いてきた。

勾玉を模した頭に、そこから伸びた黒光る鎌。そして銀色の混ざる綺麗な白毛。アブソルである。

「、ソフィー！　こんなに痩せちゃって……大丈夫？」

「ええ、大分良くなってきました」

「具合悪いのにこんなに出しちゃってごめんね」

「いいんです。おじいさまとおばあさまのお許しもあるし、賑やかな方が私にとっても嬉しいですから」

少し心許無い笑顔でソフィーは答えた。体調への懸念はあったが、彼女のその表情に、またヒツキはホッと息を吐いた。

「でもあまり無理するなよ」

もう1匹、彼女の心配をする者がいる。夫であるサルコは彼女を
気遣って座らせた。

「！ あなた会いたかった……！」

そんな夫の気遣いをよそに、ソフィーはサルコに抱きついた。会
えない時間がそうさせたのだろう、強い抱擁に彼は驚き身じろいだ。

「お、おいちよつと……！」

「ひゅ〜っ！ 見せつけてくれるでねえの！」

すかさずスタールが茶化す。サルコは耳まで赤く染まっていた。

「スタールっ……！」

「ま、この御両人はそつととして、俺様達は何処かここの別の場
所で休むとしようぜ」

ニヤニヤしながらスタールは羽ばたき、ある1匹を除く残りの仲間
も察してか否か、散らばった。

「つたく、スタールの奴……」

「ふふつ。やっぱり皆さんがいた方がいいですね」

サルコの隣に座ったソフィーは目を細め、賑やかさをかみ締めて
いた。対してサルコは苦笑した。

「そうか？ うるさくって仕方ないや」

「……ねえあなた」

彼女が急に彼を見つめ直した。その表情は真剣そのもの。

「ん、そんな思い詰めた表情で一体どうしたんだ？」

張り詰めたような目で一呼吸置き、ソフィーは切り出す。

「私、悪い夢を見ました。皆さんが……いえ、全国のポケモンが……深い溝に落ちる夢を……私、何か嫌な予感がするんです」

「体が弱っているからそんな夢を見るんだ。大丈夫、そんなこと絶対に起きないから」

「でも私の悪い予感は必ずっ……」

「ソフィー、もしあっても、俺が守ってやるから」

諭すように彼は彼女の背に手を置いた。それは彼女にとって頼もしく、とても安心できるものであった。

「あなた……」

ムードに押されて次第にお互いの顔の距離が近づく。
そして

「おかあちゃん！」

すんでの所で息子のジエクトが介入。
2匹は咄嗟に身を離した。

「あ、あらジエクト。大きくなったわね」

ジエクトはアブソルだがまだ子供の為、大きくなったといえども大きさはピカチュウサイズ。それでも、成長を褒められた彼は胸を張った。

「うん！ あのね、このあいだサイコ Cutter おぼえたの！ てきもいーっぱいたおしたよ！」

「ジエクトは強いから俺を追い越すかもな！ ……はあー……」

子がかすがいと世は言うが、これ如何に。
作者にとっては都合の良い登場となったがそれはまあいいとして。

「でもね、10まんボルトはグランおにいちゃんには かなわないや……」

「あいつは1.5倍の威力だからな」

「あ、そういえばまたスタールおじちゃんとグランおにいちゃんがケンカしていたよ」

「何ッ?! またかよ……」

グランというニックネームのポケモンとスタールは仲が悪い。下らないことでいつも軋轢が生じる。

スタール曰く「ムックル時代に頭を食いつかれてからの因縁」だそ

うだ。

一度喧嘩が始まるとそれを止められるのはリーダーであるサルコだけである。

「ちょっと悪いな、ソフィー。行ってくるわ」

「ええ、分かったわ……」

夫に守ってやると言われ嬉しさもあったが、反面彼女の心には露が掛かっていた。

彼女はわざわざいポケモン。

強ち彼女の夢が起こらない保証はない。

後々分かってくるだろう。

5話 夫婦再会 (後書き)

育てやばーさんが言っていた『キクちゃん』というのは、ヒツキのことです。彼女、漢字に直すと『菊月』となるので。

サル「また何でそんな字……」

6話 仲間詰め合わせ

サルコが池を通ると巨体が飛び出した。

額には青く三又の部位があり、外巻きのヒゲとひらひらとした頬のヒレはご愛嬌。しかし、見たもの全てを竦ませてしまおうような紅い眼、口に入れたもの全てを噛み砕いてしまえば鋭利な牙。そして巻きついたもの全てを窒息させてしまえばもうそんな太くて長い胴を持っている。

「サルコ〜！ この2人を止めてよ〜！」

池に顔を出して情けない声を出しているこのポケモンはギャラドスのフェロツク。恐怖の対象となりうるポケモンが、何故かこの有様。

「……………で？ 今日の焦点は何なんだ？」

「なんか、スタールがいた場所にグランが割り込んできたんだって……………」

それを聞き、サルコは腹の底から息を吸い、盛大な溜息をついた。閉口していても仕方ない。サルコは当事者2匹の間に割って入った。当事者2匹とは前述の2匹。

「おい、やめろ！ 毎度毎度のことだけど、どうしてそんなに仲間同士喧嘩するんだよ」

「ケツ！ こんなケツの青いクソ餓鬼、仲間なもんか！」

「嘴の黄色い奴に言われたくない」

翼を腕組のように交差させて悪口を繰り返しているスタールとは対照的に、グランはボソリと一言冷淡にそう放った。

「な、んだとテメーツ?!」

「おらっ! 飛び掛かろうとすんな! スタールも大人だろ? いいトシのおっさんだろ? それ位許してやれよ? な?」

「おっさ……!」

おっさんの4文字は少なからずショックだったらしい。スタールは暫く何も言えなかった。

「グランもさ、スタールがこういう奴だって知ってるだろ? わざわざ同じ場所を陣取らなくてもいいじゃないか。ここは広いんだし」

「……………」

グランは黙ってどこか別の場所へ行ってしまった。これ以上の干渉は受けたくないのだろう。彼は極端にサルコ以外の他の者との関わりを拒絶する。なので、喧嘩と言っても罵り合いとかドンパチやるのではなく、グランがけしかけスタールが勝手に1羽で怒っているという具合。

「逃げんのかコラ!!」

「まあまあ、そんなこと言ったらまた一悶着あるからその辺にしておけ」

「……はンツ！ ま、これは俺様の不戦勝ってえことで勘弁してやらア」

事態が一先ず終わったところで、すぐにサルコはグランのところへ行った。

黒く立派なタテガミに、何でも見透かす黄色い眼。アースを思わせる長い尾の先端には手裏剣状のものがついている。そんなポケモン レントラーのグランは1人にして欲しいというオーラが滲み出ていたが、敢えて彼はそんな彼の元へ歩み寄る。

「何だ」

「別に。来ていけないか？」

サルコは密かに彼の性格を直したいと思っていた。パーティー内の一の問題児（？）で、時にはヒツキの命令に従わない、仲間をも攻撃する。これが直さずにいられようか。

グランが最も信頼している（ように見える）のはサルコであり、周りも彼に是正してくれと求めているようだった。

「勝手にしろ。ただ、俺からは何も喋らないからな」

自分に背を向けてお座りしているグランの側で、足を崩してサルコは腰を降ろした。

「分かってるって。……なあ、どうしてお前には協調性がないんだ？」

「他人ごときに振り回されるのが下らないから。そんなこと、まっぴらだ」

彼は周りの情勢に惑わされず、常に乱されない心の状態でいたいということである。しかしそれだけでは、仲間を攻撃することには到らない筈であるが……

「それに、以前言っただろう。俺は他人が嫌いだということを」

幼少時代、仲間に入る前にトラウマでもあったのか、彼は他人に對して嫌悪感を抱いていた。

「そうだけどさ、変わらなきゃって思いは無いのか？」

「あるものか」

そう吐き捨て、彼は立ち上がって新たな場所を探し歩き始めた。

「今日もダメか……」

その背中を見送り、サルコは本日3度目の溜息をついた。

彼はあまり良くない足取りで妻子の元へ戻る途中、どこかぼうつとした様子の1匹のポケモンが目に入った。全身は紺色。体の至る所に銀色のラインが張り巡らされ、顔を覆う装飾が機械的な印象を与える。更に、胸には宝石のダイヤモンドが埋め込まれていた。時の神と呼ばれるポケモン、ディアルガである。

彼もまた、ヒツキの手持ちである。何故時の神が少女の手持ちなのかは本人に聞かなければ分からない。

「ツアイト」

「?! …… ああ、サルコか」

このツアイトというディアルガは突然の声に少し体を浮かせて驚きながらも、こちらの呼ぶ声に反応した。

「ビクツとすることないだろ？」

「済まない、はつか一人眺めていたものだったから……」

照れたように、ツアイトは後ろに突き出た頭を曲げてサルコを見た。

「あんなにぼうつとしてどうしたんだ？ 調子でも悪いのか？」

「日向ぼっこだ」

間

「あ……つとその……あー、日向ぼっこか。それは結構」

何が結構なのか。

「今日は良い天気だな。陽射しもさほど強くない。ついこうしてしまっただ」

そう言うとツアイトは大きな欠伸をした。完全にリラックスして、時の神としての威圧を感じられない。

「……何か俺、神ってごう、もっと堅苦しくて孤高な感じがしてたよ」

サルコは大きな体の彼を見上げた。普通であれば神に対してこんなこと、恐れ多くてできないものである。だが、そんなことでツアイトの気には障らなかつた。

「私もそうは思っていた。誰とも交わることなく、力と威厳を維持することだけが私の悦びであると。だがごうして日の光を浴びてみると、如何に闇浮提エンブダイの世界が素晴らしいことか……そして今、日の光を享受できるのはヒヅキの御陰だ。彼女には何か懐かしく、惹かれるものがある。それに私はこれまで孤独だった。兄弟は行方不明、はつきりといって心細かった。それに比べるとこのパーティーは過剰な程賑やかだ……私を温めてくれた、このパーティーの仲間に入ることができて良かった」

ふつと柔らかな笑みを返した彼に、サルコは面食らった。

「そんなに私が笑うのがおかしいのか？」

怪訝な顔でツアイトはサルコの目の前まで顔を持っていった。むつとした表情だったが、本気ではない。これもコミュニケーションの一種だと、彼は既に心得ていた。

「あ、いや、滅多に笑わないから少し驚いたんだ。でも良かった。気になってたんだ、その事。あいつら神がいるつてのに、無礼ばかりだろ。ツアイトが内心怒っているんじゃないかと……」

「平気だ。寧ろそれで安心感が得られる。ここが私の居場所なんだ」

彼は静かに目を閉じた。

6話 仲間詰め合わせ (後書き)

仲間を一気に出しました；

また紹介ページを新規作成します。

そしてまた題をふざけてしまったorz

何気にギャラドスの描写が詳しいのは、愛あるが故(は?)

7話 虚偽のアルバイト

「お、キク。来たか！」

サングラスを掛けた大柄の男がそう言い彼女の肩を叩く。

ヒツキはポケモンを預けている間、新聞屋にアルバイトをしに来ていた。

特集の記事となるポケモンを捕まえるというアルバイト。報酬は現金ではないものの、各種ボールが貰えるので、ボール代を少しでも浮かすため来ていたが、今やすっかり顔馴染みなので当初の目的以外でも顔を覗かせるのであった。

「編集長！ 今日はどうな……あれ、一人増えてる？」

前まではいなかった長身の男性。見慣れない彼に、彼と目が合った彼女は軽く会釈をした。

「あ、ああ。こいつは今日入った新人だな。今日はこいつから頼みを聞いてくれ」

「こんにちは。ウワサは聞いてるよ。確かヒツキちゃん だったよね？」

「はいっ！ も、何でも頼んじゃってくださいー！」

優しい語調で、好青年な印象の彼に名を呼ばれ張り切るヒツキ。

いい人そう 彼女は盲信的にそう思い込んでいた。

「ははっ。じゃあ早速……君、3つの湖にいる3匹のポケモンを知

っているかい？」

「3つの湖……エイチ湖とか、そんな感じの？」

「そうそう。その湖の守り神を3匹全て見せて欲しいんだ。……ちよつと難しいかな？」

「全一然！ 3匹オールでパソコンにいるから、今連れてきます！」

疑いも無く二つ返事で、ヒヅキは彼の依頼を快諾した。

彼女はどんと胸を突いてそう残し、意気揚々と新聞屋を出た。

「ご協力ありがとうございます。ここはいい会社に発展するでしょう」

「……あの子をどうするつもりだ……」

「人聞きの悪い。我々はその子を只利用するだけで、進んで危害は加えない‘つもり’ですよ」

ヒヅキを見送ると、先刻の好青年の印象は霧散し、彼は今となつては雇い主に向かつて銃を構えている。

「あなたもお人が悪い。陳腐なポケモンばかり特集して、我々に何の情報も与えてくれないなんて」

「お前らと手を組んだ覚えはっ……ッ！！」

彼が思わず振り向くと直ぐそこに銃口があった。

「今撃たれると、そこで震えている青年が悲しみますよ……?」

彼が言ったのはヒツキが来た時でも一言も喋らなかった『本当』の従業員。編集長は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「……クソツ……! すまん……キク!」

ヒツキは隣のポケモンセンターへ急ぎ3匹を引き取った。

不運な少女はこのことが自分の首を絞めるための十三階段の1歩を踏み込んでいるとは露知らず、青年の為にその戸を開くのであった。

「持ってきたよ!」

「ああ、ありがとうヒツキちゃん。さ、見せてくれ」

「うん!」

すぐに横にいる男は願わくば彼女がそのポケモンを出さないでほしいと天に祈っていた。しかし、言葉にしない願いは叶わない。

「駄目だ! キク!」

「えっ
」

気が付けば彼は彼女を制止しようと押し倒していた。

しかし、無情にもボールは彼女の手を離れ新人の青年の元へ転がる。幸いヒツキの面前、手荒なことはされなかったがボールの場所がそ

の行動の失敗を物語っていた。

7話 虚偽のアルバイト (後書き)

ここから物語が動きます。

それよりも、あの3匹まで捕まえてるなんて、本当に彼女は何者なんだ……

サル「作者が言つなよそんなこと」

8話 男女襲来 (前書き)

はやくバトルが書きたい今日この頃……orz

8話 男女襲来

青年は3つのボールを手に取り、不気味に笑った。しかし、押し倒されたヒツキはそんなことも気づかず、打った肘を痛そうに擦っていた。

「いったあー……編集長どうしたん……編集長？」

彼は彼女の呼びかけにも応えず、ただ怯えた目で青年を見ていた。

「ほお、これは珍しい」

既に彼は3つのボールの中身を全て出していた。3匹それぞれ、頭部がクリーム色、ピンク色、青色に帯び、尚且つ1匹1匹が独特な形をしている。しかし、先端が紅葉のような形になっている2本の尾と、額に埋まっている真紅の宝石は、3匹共通の特徴。順にコクシー、エムリット、アゲノムである。
3匹は彼の周りをフワフワと浮遊していた。

「えへへ、すごいでしょー！」

珍しそうに目を見開く青年に、ヒツキは心得顔で彼を見上げた。

「はい、とっても。いい記事が書けそうです……よ」

青年は突如彼自身が持っていたボールでそのポケモン達を捕まえた。

「?! 何するの?! その子達は私のポケモンよ！」

「これは失敬。しかし今となつては僕のポケモンです」

抗議をする彼女に、中央にMとかかれたボールを彼女の前に突き出す彼。それは幻とも呼べるボールだった。

「マスターボールが3つも……?!」

中々手に入らないマスターボール。それが3つも揃っているのは全国で横行している違法コピーの賜物……否、禍物まがものである。

方法は様々だが、その方法の中にはその殖やす道具を持たせたポケモンまでコピーしてしまうこともあり、社会問題となっている。

それはそうとして、彼女の頭にはそんな事より奪われた3匹の事であった。

「人のポケモンを盗つたら泥棒なのよ！」

「仰ることは正論ですが、あなたはまだまだ若い。人の世を分かっ
ていらつしゃいませぬ……。人の世は誰かの夢の為ならこうい
くことをしても案外罷り通るものですよ」

「人のものを奪つて叶う夢なんて……そんなの夢なんかじゃないっ
!! あなた間違つてるよ!!」

詭弁を弄する青年をヒツキが真っ向から否定するも、青年はただ笑っているだけだった。

「何とでも仰つて、綺麗事などもう言われ慣れてますし」

取り付く島もなしに、青年は何処かと通信を始めた。

「そんなっ……編集長、これは一体どういうこと?!」

ヒヅキは必死で編集長にしがみついて説明を求めたが、彼は俯いたまま苦い表情を浮かべているだけであった。

罪を犯す者に、我が身可愛さの^{ムシナ}貉。

汚れなき少女が初めて大人の汚れを知った瞬間だった。

彼女が慚然として立ち尽くしていると、何やら外が騒がしい。

待っていましたという表情で青年は外へ出た。先述のようだった彼女も我に返り、こうしてはられないと彼の後を追った。

見れば2人組の男女が佇んでいた。側には立派な髭を蓄え、2つのスプーンを持ったポケモン　フーデインが。

「ご苦労様。よくやったわね」

青年は白衣の科学者風の女に3つのボールを渡した。

「しかし、カイドウ様は何で来なかったんだらうな」

女の隣の男が問う。女は軽蔑にも似た表情で男を一瞥^{イチベツ}した。

「上官にため口とは良い度胸ね、まあいいけど。カイドウ様はポケモン嫌いなもの。嫌いなものに研究されている意図は全く分からないけど……ポケモンに触るのも嫌みたいよ。あんた、身近にいながらそんなことも知らなくて?」

「ふーん……そういえばそうだったっけな」

「ちよっと! 私のポケモン返してよっ!」

いつまでも雑談を続けている2人に業を煮やしたのか、ヒツキが話の腰を折った。すると女はフーディンから身を離して彼女の頭に手を添えた。

「あら、ごめんなさいね。でも残念ながらこの子達は返せないの」

「どうしてよ！ 見せるだけじゃないの?!」

「煩い子だねっ!! …… そうだわ、少し実験しましょう…… ユクシーはこの子よね」

彼女、スペクトルは自分の手を乱暴に振りほどいたヒツキを一蹴しながら、何を思いついたのか1つのボールの中身を確認し、ボール越しに注射をした。

9話 ブロークン・メモリー

外の騒がしさはサルコ達にも十分伝わっていた。

怪しげな2人組がテレポルトで姿を現し、その後彼らの主が何かを返してと叫んでいる。この尋常ではない光景に皆は（グランは無理矢理連れられ）柵を越え（フェロックに至っては柵を破壊し）、ヒツキの元へ近寄った。

「どうしたんだ、ヒツキ?!」

「わ、分からないの! 急にポケモンを奪われて……」

サルコ達に気づいたヒツキは彼らの場に走った。彼女らしくなく、取り乱しているようだった。

「ポケモンを?!」

「うん……こいつらに……」

彼女はスペクトル達を指差す。もともと、注射をしている間に取り返せばいいのだが、その間だけはフーデインが強力な結界を張っているのか、奴らの場所までいけない。

「よし、注入完了。出てきなさい、ユクシー」

ボールの光と共に出てきたユクシー。一見、変わったところは見られない。

「その注射で何をしたの?!」

「別に何も、単なる栄養剤よ。最近のはね、ボール越しにするの」
スペクトルはユクシーをまたボールに戻し、乱暴にヒツキに投げつけた。

「ユクシー！ 大丈夫？ 何ともない？」

ヒツキは受け取るなりユクシーを出すと、ユクシーは彼女に向かってゆつくりと、閉じている筈の目を開く。

これが悲劇への第一歩であった。

彼女はユクシーと目が合った瞬間、目眩を起こし片膝をついた。何かが抜けていくような、消えていくような感じを受けながら。

「お、おいヒツキ?!」

突然体勢を崩した彼女に動揺したサルコはヒツキの目の前に立ち無事かどうかを確認した。

その間もスペクトルは実験成功と呟きながら他の2匹にも注射を施していた。

やがてヒツキは普段の平衡感覚を取り戻し、目線を上げた。その先にはずっと一緒に連れ立っていたポケモンがいる筈であったのだが急に彼女は飛び退きサルコと距離をとった。

「どうしたんだよ?」

「いやっ……来ないで！ 何なのあなたは……?」

彼女は明らかに恐怖を感じていた。まるでサルコのことを知らないかのように

「じ、冗談きついなー……無事なのはわかってるんだぜ？」

引きつった表情でサルコがヒツキに向かいなおす。

「やめてっ！ 来ないでっって言ってる……でしょ？」

しかし更に彼女は後退し、終いには頭を抱えてうずくまってしまった。体が小刻みに震えている。拒絶を越えて恐怖に変わってしまったみたいである。

「ヒツキ、もういいだろ！ もうバレてるんだから……」

「サルコ。いくらなんでも、これは冗談ではない……彼女は恐らく記憶を失っている」

まさかとは思っていたが今仲間から指摘され、彼は黙ってしまっ
た。

「神さん、そんなことがあるのかよ？！ 頭一つ打ってねえ奴がうちつけにコロリと今までの記憶を……」

「ユクシーは目が合った者の記憶を消すと、伝えられて、いる」

「でも、伝承でしょ？ 僕達と会ったときは目も閉じてたし、そんなことなかったよ?!」

皆が口々に『鳴いて』いる時も、突如無知の海に放り出されたヒツキはうずくまっていた。

「あら、可哀想に。怖いよね……大丈夫、この子に触れば怖いものなんて直ぐ消えるわよ」

そうしてスペクトルが出したのは エムリットだった。

「……いかんっ！」

ツアイトはヒツキがそれに触れるのを防ごうとしたが

「おっとお、そーはいかんぜ？」

「?! ぐあっ……！」

女の隣にいた男、パーセクは素速くボールから、伸びる足が特徴的なポケモン サウムラーを繰り出し、それにツアイトを蹴り飛ばすよう指示した。

彼はそれに応じてツアイトに飛び膝蹴りを食らわせる。急所は外れたものの、セオリーでは効果抜群×タイプ一致の3倍威力。可也のダメージを被った。

「ツアイト！」

飛ばされた彼をフェロックが受け止めた。しかしツアイトは礼も言わず、ヒツキだけを痛みに耐えた険しい目で追っていた。

「……ヒツキッ……そいつに……触るなッ……！」

ツアイトの哀願も虚しく、恐怖から解放されたい一心だった少女はエムリットに触った。

須臾^{シユユ}にして彼女の眼は虚ろになり、彼女は恐怖を感情ごと失くしてしまった。

10話 少女失踪

3本の柱の内の2本が失われた。ヒヅキは記憶と感情を抜かれ、抜け殻同然だった。

「やっぱり私って天才……そこにいるのは彼女のポケモン達よね。もし言葉が分かるなら聞いて頂戴。訳あって、今からこのあなた達のトレーナーを連れて行くわ。何処かは言わないけどね」

「こつちの言葉が通じないと思っていい気になって……もう許せない……」

フェロックは遂にいきり立ちスペクトルにアクアテールを仕掛けようとする。

「いいのかしら？」

スペクトルは直ぐさまアグノムを出し、そしてそれがヒヅキの意志をコントロール、彼女をフェロックの前に仁王立ちさせる。わざが大振りだったので、そうする時間は十分にあった。フェロックはスピードを緩めるも、一度出したわざは止められなかった。

しなる尾はそのままに、彼女の体を打つ。

彼女はすぐその木に体をぶつけると人事不省に陥った。

「やってしまったわね。自分の主を攻撃するなんて。というより、流石は意志の神。これくらいの芸当も朝飯前という訳ね」

フェロックは自分が主を傷つけてしまったという失態に呆然としているしかなかった。

「ぐっ……余計なことはするな！ 相手は……ヒツキの命を左右してるも同然だ！」

伏せていた首を擡^{もた}げ、ツアイトは叫んだ。ヒツキの意志が操られているのと、彼女の命と、どう関係があるのだろう。

「どういうことだよ！ ツアイト?!」

「アグノムは意志の神……自分の体を傷つけた者の意志を消す、すなわち物も言わず、動かない体にしてしまう……もしも奴がアグノムに彼女の意志を又コントロールさせて、彼女にアグノム自身を傷つけさせたらもう……！」

「クッ！ どうなっているんだ?! こんな事……第一バトルして捕まえるとき、俺達平気であいつにダメージ与えてたたる！」

「私にも分からない……が、唯一考えられるのは……あの注射だ……栄養剤だと偽っていたが恐らくそれ以外の効果も……あの注射は言い伝えを実現させる効果が……!!」

ツアイトはダメージのせいか、途切れ途切れに自分の推理を皆に伝えた。

「んな夢物語みてえなハナシがあるかよ？」

「単なるこれは私の推理だが、今はこれしか考えられない……」

再びポケモンが騒ぎ始めたので、スペクトルは力無くしているヒツキを人質みたいに自分の胸に引き寄せ、その近くにアグノムを呼

び寄せた。

「さっきのギャラドスみたく行動したらこの子、気絶だけではすまなくてよ」

何も出来ない彼ら。誰もが自身の非力さを呪った。

そして彼らに残された道は一つしかなかった。

その道とはヒツキを引き渡すという 辛すぎる道であった。

不可抗力だった。

足掻いて事態を悪化させるほど、彼らは愚かではない。

「襲ってこないということは 引き渡すのね？」

「まってよ！ ヒツキおねえちゃんをどこに……」

「ジエクト！」

それでも尚事態を受け止めきれない1匹の子アブソルの届かぬ抗議は父親であるサルコの声に掻き消された。

「だっておねえちゃんがいなくなっちゃうんだよ！ しってるんでしょ？ どうしてみんなとめないの?!」

「知っていたってどうにもならないんだ！ 黙ってじっとしている
!!」

理不尽さを感じたまま父親に怒鳴られ、彼は身を竦めた。恐らく父親もそれは痛烈に感じられているだろうが、ジエクトには手をこまぬいている彼らが不思議でならなかった。

嗚呼、この幼子の瞳にはどう映っているのだろう。

「タイムアップよ、いいのね」

男女はヒツキを抱えたままフリーデインに掴まり、再び時空の中へと姿を消した。

丁度外は彼らの心情を具象化するかのよう到大粒の雨が降ってきた。

彼女の名を呼ぶ彼らの声は雨粒に乗っては消えていった。

11話 総帥との接触 (前書き)

毎回タイトルで悩みます……

11話 総帥との接触

「只今戻りました、カイドウ様」

再び、ここはどこかの地下室。フーデインに乗ったパーセクとスペクトルは口を揃えた。

待ちわびたように、カイドウは椅子ごと振り返る。隠しきれない彼の、細めた紅い瞳がそれを象徴していた。

「して、どうだ」

彼は彼らの言葉を返さずに、ただ結果だけを訊いた。

「はっ。この通り3匹を捕まえ、少女も連れてきました」

スペクトルはカイドウにボールを渡した。彼は、慈しみとはまた違う笑みでそれらを矮小化させてコートポケットに入れた。

「そうか。……、その少女の状態は。額から血が出ているが」

パーセクに背負われてくたりとしているヒツキの様子に、カイドウは一抹の不安を感じた。無論、貴重な人材が死んでしまったのは意味がないからである。

「これは彼女のポケモンが錯乱し、襲った痕です」

「我々は何も危害を加えていませんし、少女の命に別状はありません」

口裏を合わせたのか、2人はそう言った。確かに直接的にはそうであるが、間接的には彼らが危害を加えたようなものである。彼らはそんな瑣末さまつに見向きもしなかった。

「それなら良い」

カイドウはやおら椅子から立ち上がりヒツキをまじまじと見た。彼の気配を察してかは分からないが、彼女の意識が戻った。しかしながら彼女の瞳は色も輝きも失い、焦点が合っていない。

「ここは……何処……？」

消え入りそうな声で、任意でなく彼女は今自分のいる場所を問うた。

「何処かは後に話す。兎に角俺達はお前が必要だ」

「ひつ……よう……？」

この調子では埒が明かないのでスペクトルに声を掛け注射を施させた。

先程のポケモン達に施したものはツアイトの推理通り 言い伝えを再現させる、その1匹1匹に眠っている能力を引き出す即効性の成分が入っていた。引き出すだけでなく、その能力を数倍に高める成分も入っている。故に通常なら数日して能力の本領が発揮されるのだが、注射なら一瞬で発揮される。

そして今し方施したのはその効果を消す注射である。万が一の為のものであろう。

これも即効性であり、彼女はさっきの姿とは同日の論でなく、その瞳は輝きを取り戻した。

彼女の瞳の明るさにカイドウは一瞬目が眩んだ。

洞窟に囚われた罪人が、鳥の存在を影でしか知らないように、彼もまた、瞳の輝きは言葉の綾だという認識でしか知らなかった。洞窟から行き成り外に出されては目が眩むのも無理はない。

「どうかなさいましたか」

生方蹠跟けたカイドウにスペクトルが訝しがる。

しかし別のことでもつと訝しがっていたのは少女、ヒヅキだった。寝起きと同様の頭の働きではこの状況を処理しきれない。旁以て通常起動でもオーバーフローするだろうが。

「あれ、私……痛っ……！ 何コレ、血？」

まずは自分の状態を確認した。まず迎えたのは頭の痛み。無論、自分のポケモンにやられたものとは夢にも思わない。

「気分はどうだ、小娘」

「こっつ小娘?! ……最悪だよ。何処なのここは……」

「ちょっとした研究施設よ。あなたに協力してもらいたいことがあるの」

「悪いことなら手は貸さないよ! ……あつ! おばさん、さっきの!」

「おばさん……？ 誰のことを言っているのかしら……？」

おばさん という女性にとって魔の4文字を気持ちいいくらいきっぱりあっさりと言われスペクトルは 子供の言うことだ と理性をフル稼働させていたがそれ以上に溢れるイドが握っている注射器のビビによく表れている。

「女の方はね、30過ぎればおばさんなんだよっ！」

「まだ28よ……っ」

とうとう注射器はバキバキになって崩れ去った。

この時男2人は思った。そして誓った。

この女だけは怒らせないでおこうと。

注射器が消滅したにも関わらず口撃を止めない彼女。彼女の怖い物は一体何なのだろうか。

「そつえば、ここ研究施設だね。おじさん何を研究してるの？」

「……おじさん……」

一通り言いたい事言っつてスッキリしたのか彼女はカイドウの研究に興味を持ち始めた。つくづく切替えの早い少女である。

「ついて来い。パーセク……スペクトル お前達も来い」

般若のように怒り狂った彼女も、それを死ぬ覚悟で止めていた彼も総帥の命令には逆らえず何事も無かったかのように大人しく従っ

た。
やはり大人って奇異な生き物だ。彼女はそう感じながら長い廊下を歩いていった。

長い廊下が終わると大きく頑丈そうな扉が堂々とそびえ立っていた。

「部外者は入れないんだがな。この際はお前はお前も組織の一員だ」

カイドウは扉のパスワードを入力し開けてから更に罫を解除し、ヒツキに入るように促した。

モニターの数に気圧されそうだったが、まず彼女の目に強く飛び込んだのは パルキア像。

「これって……」

「ハクタイのものだ。我々が盗んだ」

「盗んでばっか……ここは泥棒組織？」

泥棒と、ヒツキは齒に衣着せない。

だが、カイドウはそんな物の言い方に眉すら上げなかった。

「そんな幼稚な目的の組織ではない。我々の目的はもっと崇高なものだ」

「カイドウ様、早速……」

「待て。まずはズイ、ハクタイの住民に俺達のことに関する記憶を全て消せ。表沙汰になっては面倒だ」

逸る気持ちを抑え、カイドウはそう促すスペクトルを制止した。

「はっ……？ どうやって……」

「ユクシーを使え。この位、呼吸をすることより容易いだろう」

カイドウはスペクトルに、ユクシーのボールを投げ渡した。

「了解しました。ユクシー、できるかしら」

彼女の言葉を受け、ユクシーは額についているピジョン・ブラッドの宝石を光らせた。失明するかと思うほど明るく皆は目を伏せた
が、やがてその光は弱くなった。

「完了したみたいね。ありがとう」

目隠しをされているユクシーは感謝の言葉にコクリと頷いた。目隠しは、持ってくる途中でさせたのだろう。パーセクの鉢巻がなくなっている。

「よし、これで隔てるものはなにもない……」

カイドウはそう呟き3匹を像の手前の装置に繋げた。

12話 空間の神

「何の装置？」

「見ている」

カイドウは近くのスイッチのレバーを引いた。

すると3匹の額の宝石が一齐に光りだし辺りは眩い光に支配されていく。目を瞑っていても光の干渉を受け、収まった頃でも網膜には光が焼き付けられ離れなかった。

だいぶ暫くして一同の視力が回復した頃、皆は像を見た。

ところが、あれだけの派手な演出をしたくせに像はぴくりともこない。

「どういうことだ……?! 三要素を中に取り込んだのに……!」

「何とも……起こりませんね？」

失望感に体をうち震わせ、立っているのも辛い。カイドウは崩れるように床に座り込んだ。

「え？ もしかしてこれ動くの？」

「ただ動くだけで無い……! 色を以て命も宿る筈だったのに……
…だがこんな結果に終わるとは、俺の今までは何だったんだ!」

失望感のあとは苛立ちが彼の心を占め、後半彼は感情的になって拳を床に叩き付けた。

ヒヅキは大の大人が机上の空論上での失敗に悔しがる様を半ば呆

れた顔で見ながら像に触れた。

「おじさんってバカ？ どう見ても、ただの像じゃない。そんなことは流石に出来っこないよ？ 役に立たないって分かったらこの像もあの子達も返し……きゃっ?!」

ヒツキが触れたところから像が淡い桃色を帯びた光を発し始めた。淡い桃の光は像全身に回ったと同時に地響きがし、崩れ落ちるコンクリートの音がそれに伴って続いた。

「えっえっ?! どうしたの?! 何が起こったの?!」

「なっ
」

コンクリートの破片と轟音、一室はしばし大混乱の地と化した。

「この俺を起こしたのは……誰だ!」

「へっ?」

破片の嵐が晴れ、その先には部屋の色調とは不釣り合いの色をしたポケモンが2足の足で立っていた。

光沢のある薄桃色の巨大なボディに、そこから走る紫のライン。翼を思わせる鱗、そして肩には真珠がはめ込まれていた。

「パルキアッ……!!」

「ウソツ?! ホンモノ?!」

初めて見る空間の神に、ヒツキは興奮気味に彼を見上げた。

「何だ……？　こんな奇妙なもの俺の体に付けて……神を何だと思ってるんだ！！　俺はなア、寝起きは一つ番機嫌いなんだよ！」

カイドウの睨んだ通り、パルキアは束縛が癢に障ったのか、暴れだした。

こうなつてはこんな部屋、子供の玩具のブロック同様にいとも容易く破壊されてしまう。

「あわわっ！　ちょっと近くに人いるんだよ？！　寝起きは私も機嫌悪いから仲間！　ね？」

再び起こった地響きに少女は混乱し、訳の分からないカテゴリで自分を神と同胞扱いにした上、一文の前後が合っていない。しかし、パルキアはぴたりと動きを止めた。

「おい餓鬼娘。俺の言ってることが分かるのか？」

「（餓鬼娘……）うん、分かるよ。ごめんね。起こして……」

口端を上げ、パルキアはヒツキを見下げる。そして彼は豪快に笑った。何がそんなに面白いのだろう。

「面白い子供だ。復活早々そんな奴に出会えるとはな……で、何でこんな場違いなトコロにいるんだ？　そこんところが気になって仕方ねえ」

「えっと、それは……」

ヒツキはカイドウに目配せする。彼女は彼の目的を知らなかった。

「今なら大丈夫だよ。私に興味持ってる。それで、何で今私がここにいるのか……私、よく分からないから彼に説明して?」

「そうか。では向こうの通訳を頼む」

カイドウはパルキアの前に立った。

「お前え誰だ?」

パルキアは、急に視界に入った男に少し語勢を強めた。きつとこの束縛もこいつのせい　そう思ったのだろう。

「誰だつて訊いてるよ」

「俺はカイドウ。単刀直入に言うが、お前の力を貸して欲しい」

「神である俺に向かってお前だとオツ?!」

熱り立ってパルキアは右腕を上げた。束縛がなければカイドウを思い切り殴っているだろう。

「まあまあ抑えて!　この人達がいたおかげであなたが今ここにいるんだよ。少しの無礼は許してあげようよ」

「……ま、慇懃無礼よりはいいけどよ……　続きを話せ」

ヒツキに抑えられ、妙に彼女に逆らえなくなった彼は急に落ち着いて続きを促した。空間の神は感情の起伏が激しいらしい。

「怒っている素振りだが、大丈夫か」

「うん。今なだめたから。続きを話させて」

彼は咳払いを一つして再び口を開く。

「続きと言ってもそれだけだが」

「ううむ、俺の力を見せつけることが出来るってのは悪くねえ話だな。だがな、タダというわけにはいかねえ。それなりのことはしてもらっせ」

顎に手を当て考える仕草をして、パルキアは条件付きで了承した。

「条件付きでオツケーだったさ」

「ならばお前の望みは何だ。お前の為なら何でもしてやるっ」

「そうだな……俺一人だけじゃあ味気ねえから兄貴をここに連れてこい。力を貸すのはそれからだ」

「兄貴って お兄さんがいるの？」

「ああ。同じ親の卵から生まれた、時間を司る」

「！ ツアイトのこと?! 今まであなたを探して私達と旅してたのよ!」

時間を司る　そこまで聞いて、ヒツキはそのポケモンに心当た

りがあった。何せ自分の手持ちなのだから。

「旅イ？ 捕まったのか、アイツ？」

「決め手はルーパーのあくびでした」

「堕ちたものだな……我が兄貴ながら」

因みにルーパーとは又オーのニックネーム。只今パソコンの中である。物語とは関係ないので詳しくは割愛。

「何と言っている」

「私のディアルガを連れて来いって」

「『私の』？ 捕まえていたのか?!」

まさかの少女の所有宣言。カイドウは目を丸くした。目の前の少女が神を従えているのだから、驚くのも当然である。

「……うん。フツーにいたけど、ズイに」

「パーセク、スペクトル これは一体どういうことだ……現地に行つたにもかかわらず、見落としていたのか……?」

猛禽のような目で凄まれ二人は言い訳することは愚か、声すら発せなくなってしまった。

これは大失態である。ツアイトの存在を知っておくべきなのに、彼らは彼の姿を知らなかったのだ。パーセクに至れば、その時の神を蹴り飛ばすよう、自分のポケモンに指示もしている。

「……あ……たっ直ちに捕まえて参りますっ!!」

慌てて部屋を出ていく二人。

「ヒエラルキーっつーのも難儀なモンだよな」

かったるそうに首を回しながら、パルキアは腕を組んでそう呟いた。

「何ソレ？」

12話 空間の神 (後書き)

人物名の変換忘れが酷いな；
気をつけているんですが^^；

13話 離れた心

雨は依然として激しく、したたかに屋根を打っている。

育て屋で雨宿りをさせてもらっている5匹（1匹は池）だが、おかしいのだ。平和すぎる村で起こったあれだけの騒動、しかも直後だというのに、人々は普段通りの生活をしている。誰もそのことを話してはいないし、新聞屋も通常にアルバイトを募集している。彼らにとっては全てのことの意味不明である。

「もう訳分かんない……あいつら何なんだ……ヒツキを何処へやっ
たんだ……」

途方に暮れてサルコは頭を抱えた。あんな主人でも、いざいなくなる
と不安になる。ましてや記憶と感情を失くしたままである。

「サル公、そんなに落ち込むない。落ち込んでても仕方ねえだろ？」
すっかり萎れてしまったリーダーを励ますスタールだが、彼も不安
を感じざるをえなかった。

「しかし……この状況を明るくいけというのも無理があるのだが」
「そらアそうだけどよ、明るくては言わねえからせめて……」

「あっつ！ アイツらがまた来た！！」

突然、雨の音にも負けない張り上げられた大声。出所は池である。
一同は驚き、弾かれるように表を見た。すると、彼らはあの忌ま
うべき男女、パーセクとスペクトルが雨に濡れて辺りを見回してい

るところを見つけた。

「雨が降っていたのね。嫌だわ……ジメジメして」

「それより早くディアルガを探し……?!」

出てきていきなり彼らの目の前にあったのは 破壊光線。

「フーデイン！ 守りなさい！」

一髪の間、フーデインは守るを行使。光線はシールドで軌道が反れ、少ししたところにある池に激突、池は割れてしまった。

「……まだいるわね、ここに」

「あ、危なっ……て、どうして分かる?!」

理解の遅いパーセクに、スペクトルは気候も相俟って、アンニユイな視線を送った。

「鈍いのは昔と変わってないわね。今のはあの不躰なギャラドスよ」

そう言い光線が向かってきた方を見ると、怒りで据わった目をした凶悪ポケモンがこちらを睨んでいた。それに加えて民家からも5匹出てきた。

「手前ら性懲りもなくまた来やがったのか!!」

スタールが啖呵を切ったが如何せん言葉が通じないのでただ威嚇して鳴いているようにしか聞こえない。

「あら、外道には興味ないの。煩く鳴いても無駄よ」

「んだとっ……言うに事欠いて外道とはよく言えたもんだよなア？
！」

「スタール、これ以上言ってもどうせ伝わらない。聞き苦しいだけだ」

「畜生めがっ……外道はどっちなんでい……！」

ツアイトに咎められ、スタールは悔しそうに憎体口を叩いて嘴を
違わせた。まさに隔靴搔痒^{カッカソウヨウ}、一方的にしか言葉が通じずもどかしい
だろう。

「私達が欲しいのは唯一つ。そのディアルガよ」

「私 か？」

「そんなの僕達からお断りだよ！」

「もし抵抗するならこちらもとるべく手はとるわ」

全員が臨戦態勢をとってるのに気付いたスペクトルは、彼らはデ
イアルガを渡さない気だな と悟った。

「そう。そんなにあなたたちのトレーナーを犠牲にしたいのね？」

彼らの主は敵の手中にある。例えて言うなら相手国の王を捕虜に
しているといった感じだ。敵にとっての最大の強みである。

「さあ、犠牲にしたいの、したくないの？ 選びなさい」

「私は」

答えるか否か逡巡している彼に彼女は決定的な言の葉を思いだしたように囁く。

「そうそう。忘れていたけど、あなたの兄弟もあっちにいるのよ」

「……！！」

「ツアイトの……兄弟が？」

「ずっと探していたみたいね。彼、待ってるわよ」

「ツアイト！ そんなの罠に」

一瞬、ツアイトの体が奴等に向けられてことに気付いたサルコは、慌てて彼に近づこうとする。

「な近寄るそ（近寄るな）……！！」

足が竦む程の低く恐ろしい声でツアイトはそう怒鳴った。彼が初めて出したその声に彼らは目を丸くした。

「ど、どうしたんだよ急に？！」

「私は　これまで兄弟を捜す為だけに付いて旅してきた。この情報が真ならばもうここにいる必要もない」

「いる必要って……！！　正気か？！　楽しいって言ったのに何で」

掌返してそんなこと　　！

「楽しい　？　そんなの単なる口実に過ぎない。私は、仕方なしに、ここにいた。お前達を利用してただけだ。そんなことも見抜けぬとは……愚か者め！」

吐き捨てるように言いながら彼は彼女の元へ行つた。

「おいツアイト……！」

「黙れっ！！　もし我が同胞との再会を妨害するならば貴様らの和毛こげに血の烙印を押ししてくれるわ……！！」

ツアイトは彼らをプレッシャーで制してから4つめのマスターボールに入り、ヒツキ同様何処かへ連れていかれた。

信じられなかった。信じたくなかった。

夢か現か、前者であるなら早く覚める。後者であるなら……考えたくもない。

雨車軸の如し、容赦はない。未だに彼らの傷心の頬を濡らす。

「どうしてこんなことになったんだ……？　俺が、俺がズイに行こうなんて言ったからか……？」

「あなた……お気を確かにして下さい」

再び、育て屋の屋内。主人が消え、辛辣な言葉と共に仲間裏切られ　サルコは重なる悲運に更に意気消沈した。

その時、隅でじっとしていたグランはサルコとソフィーにのそりと接近し、そのまま夫婦を見下した。

「全くもってサルコ、お前の言う通りだ。女の為に軽率な行動をとった結果がこれだ。そうなるのであったらそんな女なぞいない方がいい。足手纏いだ」

「……！」

ソフィーは頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けた。もし、自分がここにいなかったらヒツキもツアイトも失わずに済んだ。当たり前だが、そんなことは全くない。どちらにせよ、こうなる危険を孕んでいたのである。しかし、この有様で考えられるのはグランの意見でしかなかった。

「もとはといえば私が体調なんか崩したから……っ本当に皆さんごめんなさい……！」

彼の氷のような冷たい言葉にソフィーは俯いてしまった。

「おい、ソフィーは関係ないだろ！！　なんで彼女のせいにするんだよ……！」

妻を疫病神扱いされ、先程とは打って変わり、サルコは立ち上がってグランの胸の毛を掴んだ。

「俺は真理をいったままでだ」

「二人共止めねえか！」

険悪な空気が漂い始める。その空気を、読んでいるのか読んでいないのか、はたまたそんなのは無視しているのかは分からないが、

グランは攻撃の矛先をヒツキに向けた。

「ヒツキも愚劣な女だ。他人の頼みを何であろうと無闇やたらと受けていい顔をして 報いがきたな」

「いい加減にしろよ!! お前、こんな時もそうなのか?！」

「ならば俺にどうしろと? 足掻けというのか? 地に塗れて這いつくばれというのか? お前が身勝手な行動をさせたせいなのに、何故俺が他人事に」

サルコは気付けばその言葉の返しに、口より先に手が出ていた。彼はグランを殴り付けていた。

「あなた……っ」

殴った拳を戦慄わななかせ、サルコはグランに向かって目に角を立てた。

「お前体の中に一体何が流れているんだ?! 何所を押せばそんな音が出る?! 仲間が誘拐されたんだぞ、分かってんのかよ! なのお前は下らない信条に固執して……!!」

「下らない……?」

造次ソウジテンバイ顛沛、彼も仕返しにといわんばかりに、サルコに電流を浴びせた。

「くっ……ああそうだよ! 外界のことには何も興味を持たない? ふざけんな!! そんなに他人を嫌うなら、もうお前1人で何処か彷徨つてろよ!!」

「……言われなくとも。最早こんなところ、真面な輩はいない」

グランは言われた通りに雨の中、育て屋を飛び出した。

「……サル公、いくら何でも言い過ぎでねえか？ 俺様でもあそこまでは言わねえぞ」

「いいんだよ。あいつにとって俺の言ったこと全部、取るに足らないものだと思ってるさ、どうせ」

「だけど仲間がまた減ってしまっっては……グランさんの身にもし何かあつたら……」

「仲間なもんか。ずっと我慢してきたけど、ここまでとは思わなかった……あいつの身に何が起ころうとも知ったことじゃない！」

いつの間にか蓄積された彼への苛立ちが爆発し、サルコは仲間や妻の言うことにも取り合わなかった。

「……おとうちゃん、グランおにいちゃんみたい……」

しかし、ジェクトの放った寸鉄がサルコの心に突き刺さった。確かにさっきの発言は自分と他人を切り離れた発言だった。

「……っ……悪い、頭冷やしてくる……」

「おい、サル公?!」

放牧場へ駆けるサルコ、追い掛けるスツール。

このままでは、パーティー崩壊も時間の問題である。まずは試練はどつちやら内輪に潜んでいたいらしい。

14話 兄弟再会

少女はここに来た時から嫌な予感に苛まれていた。第六感とはあまり縁のない方ではあるが、この時に限っては危険を全身に感じ取っていた。

彼は捕まっつてはいけないと。信じていた。

彼なら危険を察してくれる。逃げ切ってくれる。しかし、目の前の現実が彼女の希望と期待を打ち砕いた。

「ツアイト……捕まっっちゃったの？」

「ああ。……自主的にな。それはそうと無事だったか、ヒツキ」

ボールから解放されたツアイトはやや後ろめたげに、あんどぐりと口を開けて啞然としているトレーナー本人に安否を確認した。

「うんー応。血が少し出てるけどね。……それより何で来たの？危険な予感はあるなら十分感じていたはずだよ？」

トレーナーにそう言われ、痛い所を突かれたとツアイトは大きな体を竦めた。

「痛い位に感じていた……しかし皆を巻き込みたくなかったんだ。故に突き放す為、皆に少々きつく言い過ぎてしまった」

「いや、もう巻き込まれてるよ。自主的って言ったよね？脅されたの？行かなきゃお前のトレーナーをハードマウンテンの火口に落とすとか、生コンで固めてノモセの大湿原に沈めるとか、ナギサの脇の海に人柱として立てるとか？」

立て板に水の如く、穏やかでない単語がすらすらと出て来るヒツキ。覚えなくても良い語彙は頭に入っているらしい。全く、どこで覚えたのやら。

「……そこまで具体的には。しかし何だその少女のくせに妙に恐ろしい発想の羅列は……第一人柱は何の生け贄になるんだ」

「あなた達の」

「させて堪るか！ っ……済まない、私としたことが取り乱してしまった……と、兎に角、暫くここでじっとしていれば事の悪化は免れるだろう」

「あー、えつとそれはちよつと違うんだけど……」

ヒツキはツアイトから視線をそらして言葉を濁した。もじよもじよと彼女の指も忙しく動いている。

「どういうことだ、ヒツキ」

「おっ！ 兄貴じゃねえか！ 呼ぶかなんかしろよなー！ 復活したばっかで感覚がよく戻ってねーんだ！」

話を遮る野太い声。決して良い声とは言えないが、彼、ツアイトにとってはどんな美しい歌声よりも聞きたがっていた声だった。振り向くと彼の弟がひらひらと呑気に手を振っていた。

「パルキア！！ 本当だったのだな……本物なのだなっ……今まで何処に行っていたんだ！」

嗚咽にも似た声を上げるツアイト。ずっと捜してきた。幾度となく挫けかけたが、やっとその努力が実を結んだ。

だが、世の中には代償というものが存在していることを忘れてはならない。

その公式は例え神に対してでも代入することができるのだ。

「再会でできて嬉しいけどよ、早速お仕事だぜ」

「仕事……とは？」

「あん？ この餓鬼娘に聞いてねえのか？」

「あのね、ツアイト。実はね……」

「小娘、準備はできたか」

ツアイトに取り付けるであろう機械を設置していたカイドウはヒツキに問うた。

「ヒツキ、私はどうなるうとしてるんだ？」

1人と1匹に同時に問われ戸惑った彼女だが、まずは混乱しかけている自分のポケモンを諭すことにした。

「カイさんちよっと待ってね。ツアイトに説明するから」

「カツ……！ カイドウ様に向かって何て呼び方をするのよ！」

勝手に上司の渾名あだなを付けられ、スペクトルは声を大にしてヒツキに注意した。

「いい、スペクトル。好きに呼ばせておけ。」

「だってさ」

「フンッ……」

スペクトルは面白くないのか、さっさと出て行ってしまった。気を取り直して、ヒツキはツァイトにここに連れてこられた趣旨を説明し始めた。

「実はあなたの弟の力とあなたの力を貸して欲しいみたいなの」

「……と言うと空間を支配する力と時間を操る力か。何の為に」

「まあ、兄貴イ。理由なんてどうだっていいだろ。俺は今、力を使いたくてウズウズしてんだ！ 兄貴だって碌な力使ってないだろ？」

彼女と彼の会話にパルキアが割り入った。彼の声色は弾み、ツァイトを誘うようだった。

「……しかし、無闇に使う訳には……」

「そこが兄貴の悪いところだぜ？ グズグズしてないでさっさとその機械に繋がれる！ まずはウォーミングアップといこうぜ！」

「……お前がそう言うのなら……分かった。繋がれよう」

ツァイトは言われるがままに機械に繋がれた。

しかし繋がれた途端、彼は耐えがたい頭痛に襲われた。頭を擦じら

れるような痛みであり、それはどくどくと脈を打って強まっていく。

「なっ……んだ……これはっ……！」

「我慢してくれよ兄貴。俺だって兄貴を待っている間それに耐えていたんだからよ。なに、すぐ慣れるさ。俺と兄貴は一心同体、一緒になることを考えりゃ、痛みなんて吹っ飛ばすぜ」

「そ、そうか……」

ツアイトは今までの彼に対する想いを機械にぶつけた。すると柎^{コウ}となっていたさっきの痛みが嘘のように消えていった。

「機械が気持ちを取り戻すとは不思議なものだな。こんな機械が作れるほど人間もここまでできているとは……」

「同感だぜ。そう考えると楽なモンだよな。俺達は空間と時間を与えてればそれでいいんだからよ……っかしよ、少し人間はやり過ぎていると感じんだ」

「やり過ぎている？」

「いんや、これは俺の感想つつのかな……人間共は背伸びしすぎてんだ。少し今の世界の様子を伺ったが、海だの陸だのどっちかを拡張しようともめたり、折角広げてやった野原は妙な建物ばっかだったりする。なんつったら要するに俺は人間の身勝手さには閉口している。こりゃ罰を与えねえとまで思っている」

「それで、どうしたいんだ」

急に淡々と喋り始めた彼に、時の神は少し動揺しながら話の目を尋ねた。

「ウォーミングアップがてら消しちまおうと思って、人間を。時空の狭間に閉じ込めんだ。ま、安心しろ。ここにいる奴等は味方だから消さねえ。兄貴のトレーナーも無事ってワケよ」

「待てっ！ そんなこと　ぐうっ……！」

彼がパルキアに異議を申し立てようとすると、先刻の頭痛が蘇った。

空間の神はその逼迫ヒツパケした彼の様子を見てニヤリと笑う。

「反対しようとしても無駄だぜ、兄貴。この機械はな、2人の意思統制の為につけられているらしいんだ。どっちかが違う意思を持てば、意思の弱い方がそうなるんだ。今の俺を止められると思うなよ」

もう1人その考えを解し、反対できるヒツキは彼が機械に繋がれている間、今先刻の怪我が疼きだしたらしく手当てをされに部屋を離れている。

どのみち非力な少女が反対したところで状況が変わるわけでもなし、ツアイトは激痛で薄れ行きそうな意識の中、承諾せざるをえなかった。

15話 危機回避

ばんと勢い良く放牧場と家屋を繋ぐ扉を開け、サルコは雨に打たれながら暫く歩いた。

「あれ。サルコ、どうしたの？ グランもここから出て行くの見たし……何かあった？」

「……あいつと一緒に……か」

池から問い掛けるフェロック。しかし満足に答えられぬまま、サルコはその場で^{フッザ}跌坐した。

広く森閑とした^{シンカン}放牧場に瞑想をする猿が一匹。

彼は物事に行き詰まると瞑想を始める癖がある。聞こえるのは雨の音と木の葉が擦れ合う音のみ。

「コラ、急にいなくなるなや」

サルコはいきなり翼で背中を軽くはたかれた。野暮といえば野暮だが心配して来てくれたのだ、仲間の声に彼は素直に振り返った。

「スタール……」

「んな顔すんな。別にサル公のせいでヒヅキも神さんもいなくなつたわけじゃなし、そんなに自分を責めることねえ。ボウズがお前さんに言つたことあ言い得て妙だったが、餓鬼は餓鬼、サル公はサル公だ。そりゃ、誰だつてあんな奴見放したくなるわな。ボウズも言い過ぎたつて反省してるぜ……多分な」

「でもヒヅキとツアイトは……」

「だあーっ！ さっきからウジウジウジウジしやがって！ お前さんはリーダーだろが！ こんな時こそ一番しつかりしねえでどうすんでいー！ トレーナーがいねえ今、お前さん以外に誰がパーティーを纏めるんだ！ それじゃアお前さんの家族すら守れねえぞ！」

いつまでも塞ぎ込んでいる彼に、沸点の低いスタールは怒鳴った。

家族　その単語にサルコの肩がピクリと動いた。

「サルコってヒヅキとツアイトのこと、気にしてたの？ 僕だってヒヅキに攻撃しちゃって、落ち込んでたんだ。でもヒヅキもツアイトもさらわれたのは僕達が悪いんじゃないよ！ 悪いのは……悪いのはあいつら！ ね、サルコ。落ち込んでばかりもいられないよ。助けよう、僕達の『家族』を！」

サルコの真正面から叱咤したスタールに、フェロツクも、池から長い体を出してサルコの顔を覗き込んで彼を励ました。

「な？ 皆『リーダー』のご帰還を心待ちにしてるぜ。なあに、奪われたもんは力づくで奪い返せばいいってもんよ。前に進もうぜ、リーダーさんよ！」

スタールは最後にもう一つ、全てを包み込むようなその大翼で、少し伸びたサルコの背筋を軽く叩いた。

ここでやっとサルコにも笑顔が戻り、表情が和らいだ。

「……そうだよな。ありがとうスタール、フェロツク。俺吹っ切れたよ」

「へへ、よせやい。礼なんて言われるのはガラでもねえ……さ、戻
るぞ。こんな天気でじつとしていたらお前さんが風邪引いちゃう……
…ぶえっ……ぶえくしよいッ!! ……こんちきしょう!」

と言っておきながら豪快なくしゃみをしたスタール。

「大丈夫か?」

「っあゝ……その前に俺様がか……もうトシだもんなア」

そう交わし、お互い顔を見合わせ笑う。

取り敢えずパーティーはつなぎ止められた。

しかし、皆の所へ戻ろうとした時、ジエクトがこちらに駆けて来た。
出迎えに来てくれたのかと思いきや、様子が変だ。

「どうしたんだ? ジエクト」

「おとうちゃん、たいへんなんだ! ニンゲンがみんな……きえち
やっつた!」

16話 鳴る矢 (前書き)

重要な回に見えてつなぎ話なので、あまり真面目に見なくても大丈夫か

猿「んなこと言つなよ」

16話 鳴る矢

「っははは！ やったぜ兄貴イ！ 人間共一匹残らず谷間へオサラバだ！ 俺達もまだ力は衰えていねーな！」

「……………」

ツアイトは止められなかった自分が妬しくて仕方がなかった。不幸中の幸いか、狭間の中は時が止まっていて人々は苦痛を覚えることはない。

「何をしたんだ？」

事の成り行きを知らないカイドウはただただ2匹が吼えたということしか分からない。この人間は消えていないので当然といえば当然だが。

「鳴き声が聞こえたけど……………何かした？」

「……………ヒヅキ、私は取り返しのつかないことをしてしまった……………」

手当てを終え再び部屋に戻ってきたヒヅキに、ツアイトは気の毒な程弱々しい声で先程のことを逐一報告した。

「え……………ウソ……………それってみんなは戻ってこれるの？」

「自力ではまず無理だ。こちらが動かない限りこの世界へは戻って来れない……………」

「そんなっ……！ 酷いよ！」

「悪いな餓鬼娘！ 俺の気が済んだら戻してやっから！」

「餓鬼娘じゃないよ！ 私にはヒヅキっていう名前があるんだからね！」

「一体状況はどうなっているんだ」

一人で怒って（たように見えて）いるヒヅキに徒ならぬ気色を感じたカイドウは、思わず問う。

「この2匹が人間全てを時空の何処かに閉じ込めたの……」

少女は涙ながらに応じる。しかしそれを聞いた彼の表情は彼女とは対照的なものだった。

カイドウの顔は不敵な笑みを湛えていた。

「それは良かった。こちらとしても好都合だ」

普通ならば顔色の一つや二つ変わって驚くだろうのに、いけしゃあしゃあと好都合だと言う彼にも少女は驚かされた。

「好都合って……！ 人間がいないんだよ?!」

「だからこそ だ。ポケモンを守る物もない」

益々不可解な事を喋るカイドウに、手下からも疑問の声があがる。

「カイドウ様、そういえば貴方の目的を我々は明確に知りません。」

時空を操り、神話を実現させればいいんですか？」

「それだけではここまでしない。俺はポケモンを復讐対象にする」

「……はいつ？」

余計に話が拗れた。要領を得ていないパーセクにカイドウは説明を続ける。

「今から時空を歪め外界を混乱させる。その隙に俺の手下共を派遣して捕まえる。目標はシンオウ全域のポケモンの捕獲だ。捕獲後の奴は俺の好きにさせてもらう」

「ちよつと待つて！ 何の為にそんなことするの?!」

「何の為 ? ポケモンに恨みがあるからの他にないだろう。あいつらがいなければ俺は幸福であったのに……」

冷え切ったカイドウの言葉が、寒々とした部屋を巡った。そして彼は右手に拳を作り、じつとそれを見つめる。その何でもない動作が妙に恐ろしく、ヒツキはたじろいだ。

「ど、どんなに恨みがあるからって、そんなこと許されないよ!!」

吃^{ども}つても、得体の知れない恐ろしさを殺してヒツキは総帥を諫めた。

正気でない彼の考えに、二神も眉を曇らせる。

「こりゃ聞き捨てならねーな……流石にそこまでのことはしたくねえ。したくねえし」

「……ああ、私もだ。この力は誰かの恣意的な目的の為にあってはない。世を創り、秩序立たせる為にあるものを、この男は分かっているのか」

「2匹共反対してるよ？ 2匹がやる気ないなら無理だよな？」

スポンサーが臍を曲げれば当然計画はオジャンである。ヒツキは強張った表情を少し緩めた。

「尚早な意見だな」

カイドウはそう吐き2匹の繋がれている機械の別のボタンを押す。

すると忽に2匹の身体を怪しげな光が包み込んだ。一も二もなくそれは彼らの意識を支配しているようで、否、実際に支配しつづけた。

「う……お？！ 俺が俺じゃねえみてえ……だ……！ フワフワする……！」

「落ちてけッ！ 奴は 奴は私とお前を操る……つもりだ……！」

「虎落^{もが}っているようだが、そうできるのも今の内だ。もがくならもがけ」

意識が自分の色に染まっていく二神を、拱手^{キョウシュ}しながら彼は笑っていた。

「ねえもう止めてよっ！！ この世界を無茶苦茶にするつもりなのっ？！」

途轍もない不安に駆られ、ヒツキは声を裏返して叫んだ。

彼女は、カイドウが悪魔以外の何者でもない存在に見えてきていた。奴は危険　自分の中の何か警鐘をけたたましく鳴らしている。

「五月蠅い。もうこうしてしまえばお前は用済みだ。口は挟むな」

「どつするの、この子達どうなっちゃうのよ?!」

激昂ゲッコウの余り彼女はカイドウの右腕にしがみついた。

「……………！ 放せ！」

傷でもあるのか、彼は顔を顰めヒツキを突き飛ばした。彼女は突き飛ばされた拍子に機材で後頭部を打ち、再び気を失った。

「……………この小娘を見張り付きで何処かに閉じ込めておけ……………それと、今からあるものを支給する。直ちに出勤できるよう、それらを手下共に配っておけ。他の中核員にもだ」

「はっ……………はい！」

カイドウは暫く険しい表情ではあったが、やがて平静さを取り戻し、そしてそれは笑みへと変化を遂げた。

「さあ、楽しい狩りの始まりだ……………」

彼の言葉を合図に意識を完全に乗っ取られた2匹は短く咆哮した。

「カイドウ様、言われた通り少女は牢に閉じ込め、手渡された物も他の中核員にも伝えて全て手下達に配りました。しかし、この小玉とこの装置は何でしょうか？」

数十分して、パーセクは戻ってきた。

彼の手に残っているものは野球ボール位の大きさの透明な玉と、数個のボタンがついた文庫本位の大きさの装置。ウエストに取り付けるのか、ベルトも付いている。

「いずれ分かる。中核の6人にも渡したか」

「はいっ、勿論です」

カイドウはパーセクの自信のある返答に、『よし』と頷いた。

「出発する前に、6人はポケモンを持って行け。お前達は主にトレーナーのポケモンを捕まえる。主人がいるポケモン達は固まって移動し、強さにも一癖ある。そこをバトルで黙らせるんだ」

「トレーナーのポケモンも捕まえるのですか？」

「当たり前だ。飼い慣らされていても、奴らは奴らだ。人間がいなくなつては野生も同然、気にせず捕まえる」

「はあ……」

そこまで言うと、カイドウは一つ付け加える。

「手下共に、ここに入る鍵の石版石を没収しておけ。いちいち戻られて報告されては敵わんからな」

「全て捕まえるまで戻ってくるなど？　しかし入る手段なくしてどう戻ってくるのでしょうか？　それに、ボールの補充もありますし、捕まえたポケモンを持ちきれなくなってしまうですよ」

パーセクは戸惑うように自分の石版を見た。これを入り口で翳すところに入れる代物らしい。

「いちいち疑問の残る奴だな。6人の石版石の一つを六等分して6人に持たせる。そして全て捕まえたと手下共から連絡が入れば召集をかけてこの前に集結させ、6人の欠片を合わせて入れればいいだろう。全員で入った方が力が分散されなくて万が一の場合も対処が利く。ボールの補充及び回収はその装置のボタンを押せ。使い方は後で説明するから待て」

「そ………うですか」

パーセクは余り飲み込めていないような表情だった。所詮は脳筋である。そんな彼も気に掛けず、カイドウは満足げに彼を指差した。

「これで抜かりはないだろう。目下より出動を命ずる。伝えて来い」

「はっ！」

「そろそろいいぞ。お前達の御力、存分に見せてやるが良い」

カイドウは二神を見据えた。洗脳された彼らは力を解放する瞬間

に目を光らせて待っていた。

「「御意……」」

2匹の、先程より長く大きな咆哮はシンオウ全域に木霊した。

これより戦いの幕開けである。

17話 小玉の効果と戦闘の予感 (前書き)

次から戦闘に入れそうです。

17話 小玉の効果と戦闘の予感

サルコ達は起こった事象を理解出来なかった。何故ならば、外の様子を窺いに210番どろろに出た途端に地面が急に逆さまになったからである。

おまけに所々で物の速さが疎らになり、トリックルームなど比較対象にもならない。

音も立てずに襲いかかったこの変化に彼らは動揺するどころか、平衡感覚の齟齬ソコから生じる吐き気に耐えるのに必死だった。慣れたかと思うとまた景色が反転、90度逆になるので堪ったものでない。

「み……みんな、大丈夫かッ……？」

リーダーが皆の無事を確認するも、こんな状況下で良い反応なんか返ってこなかった。

「大丈夫な訳ないよ……！ 気持ち悪くて……」

「こわいよ、おとうちゃん……！」

「飛んでも関係ねえんだな……うえっ……やべ、喉元まで上がってきやがったい……」

「汚いこと言うな、スータル！」

「せめて……これが幻覚であってほしいんですが……」

幻覚 妻のその一言に、サルコの中で一閃が走った。

「（幻覚？ こうなったら賭けだ！）みんな、目を瞑るんだ！ そしてこれが幻覚だと暗示をかける！」

リーダーにそう命令され、半ば無理だろうと一瞬皆は思ったが、今は藁にでもすがりたい。溺れ死ぬよりはマシである。

嘘か誠か、皆は暗示、基思ひ込みに成功。全快とはいえないが、踏み締めている大地は変わらないという“思ひ込み”でようようと変化の耐性ができていった。

それでもまだ慣れていない為、慣らす為に暫くそこらをつろついていると、いなくなった筈の人間が一人視界に入った。

彼らはその人間が味方であるかを考える余裕なぞなかった。手にはボール。その人間の男は正に彼らを捕まえようとしていた。

「っ！ よけるっ！！」

リーダーの声に反応した皆は寸毫スシゴウの間にボールから体を逸らした。

「チツ……混乱しているからいいと思ったが、流石はトレーナーのポケモン。いい神経してるな」

生憎というか、彼らは状態異常としての混乱には慣れている。が、こんなことは前例にない。故に、避けたはいいものの彼らの殆どがバランスを崩した。

ところがだ。怪我の功名かとも言えようか、男の真横に避けたフェロツクも漏れなくバランスを崩し、幸いにも男のいる方向へ体が傾いた。ただ、男にとっては不幸であろう、ギャラドスは大体235kg。その上高さ6.5mときたもんだ。逃げようがなく押し返しもできない。男は自然の摂理に則り巨体の下敷きとなり気絶した。気絶で済んだだけでも奇跡だろう。

「あ、あれ？ 何か潰しちゃった？」

彼は目線が元々上なので勿論お約束ごとの犠牲となった哀れな男が見えていない。

「な、ナイス、フェロック」

「？ 何か知らないけどありがとう……」

ふとサルコは伸びている男を見た。すると、男の胸元にキラリと光る物が。足取りがふらつきながらも彼は男の元へ歩み寄りその光り物を手に取った。

「何だこれ、小さい玉か……っつて、え?!」

手に取った瞬間、懐かしき感覚が彼の中に宿った。

「景色が元に……戻った……?!」

これまで二転三転していた景色と時間がピタリと元に戻った。しかしこれは彼一匹だけの感覚であり、周囲の者はその発言を不思議がった。

「何言つてやがんだ！ とうとう頭がイカれちゃったのか？」

「私達には変わったようには見えませんが……」

「え、おかしいな」

そう言い小玉を地面に置くと再び地面が回った。今度は180度

ヴァージョン。

「うわっ!!!」

急に回され尻餅をつくサルコ。それと同時にこのことの絡線からくじが分かった。

「そうか、これが……!! ちよつと待ってる、皆にもあの感覚を味わわせてやるから!」

言い残して彼は小玉を首にかけ何処かへと走り去ってしまった。数分程して彼は頭数分の小玉を首から下げ帰ってきた。

「おとうちゃん、その たま どうしたの? キレイ……」

「ん、掛けてみるか?」

「うん!」

そう返事し、首に掛けた後のジェクトの目の輝き様といったらなかつた。

「わ、すごい! すごいよ! フツウのみちだ!」

「本当?! サルコ、僕にも頂戴!」

「海蛇はでけえ体してつから俺様が掛けてやらあ……うお、凄いなこりゃ!」

フェロックに掛けてやるつもりで小玉を銜えたスタールも、感嘆

の声を漏らした。そして彼は自分もとサルコの首から小玉をふんだくり、身に付け、もう一つ銜えた方をフェロックの第一胴（？）あたりに掛けた。

同様に感動するフェロック。涙すら浮かんでいるようだ。

「おいおい、泣くなよ」

「ひつく……だつてぐるぐる回るのが怖くて嫌だったもん……」

フェロックの顔の方が怖いと思ったが、こつ見えても彼はガラスのハートなのでそつとおこじう。

「あなた、私の分もありますか？」

「当たり前だろ、ほら」

ソフィーは彼から玉を受け取り首に掛けると、ぱつと花が咲いたように笑い、喜んだ。正に花が笑むとはこのことだなとサルコは色めき、スタールに鼻の下伸び過ぎだとすかさず突っ込まれたのはここだけの話。どうやらこの小玉を身に付けるとフィールドの変調の影響を受けないだろうという彼の思惑は当たったようだ。

「サルコ、1個余ってるけど、それって……グランの分？」

「……戻ってきたらやろうと思ったけど、あいつのことだ、要領良く手に入れてるだろ」

そうは言えども彼は2個の小玉を下げた。首に下げるなら邪魔にならないという。内心は”戦友”に戻ってきてほしい。そんな想いが垣間見られた。

「……さ、今この地方に何が起こっているのか調査しようぜ！何かしないと始まんないからさ！」

「お、やっとリーダーらしくなってきたな！　っしや行くか！」

「ええ行きましょう。私達からまず何とかしなければいけないものね」

「ぼくもがんばるよ！」

「頭使うのはニガテだけど、力なら任せてね！」

雨は何時しか止み、パーティーは今、一つに纏まった。

そこへ、タイミングの善し悪しは判断し兼ねるが、また一人の男が彼らの前に現われた。

おまけ

死屍累々。と言っても死んではいないが、人が数人倒れ、何やら呻き声で呟いた。

異口同音。「猿にやられた」と。

18話 vs パーセク（対峙編）

哀れな男のお仲間でもた小物かと思いきや、何処かで見た顔。

「！ お前……！」

「、どんな塊だと思ったらズイにいたポケモンじゃねえか。小玉奪つてディアルガ助けか、ご苦労なことだな……」

男の言葉に明らかに嫌悪の意思を向けた彼ら。大人しくボールに入ってくれる雰囲気ではなさそうだ。

「その抵抗が無駄だったこと、俺が教えてやるぜ！」

その男、パーセクは自身が持っていたボールを取り出した。

「力づくで俺達を捕まえる気か……いいぞ、受けて立ってやるっ！」

「6匹といちいち闘っていたら面倒臭いから、3匹ずつ一斉に1対1でどうだ？ どうせ俺は3匹しか持つてねえからよ、相手を好きなように選びな！」

余裕の表れか、彼はボールからポケモンを出し情報公開した。エビワラー、サウムラー、カポエラーといった格闘御三家である。

「あいつ……俺様達を舐めてやがんな！」

「いいさ、その分勝った優越感が大きいから……ところで、誰がどいつを相手する？」

「ぼく、あのツアイトおにちゃんをきずつけたやつをたおしたい！」

途端空気が凍る。相性では圧倒的不利であることは火を見るよりも明らかである。しかもサウムラーは純粹な高威力格闘技の宝庫だ。

「いけない、ジェクトは待ってる」

ここは反対するべきだろう。好き好んで子を危険に晒す親などいない。これは普通のバトルではなく、負けたらどうなるのか分からない。

「イヤだ、いく！」

まだ小さな子供が、弱点となる相手に立ち向かうなんて、蛮勇も甚しい。だがこの子供は一度言ったらきかないのだ。もたもたしてられない。サルコは溜息を一つして我が子を信じることにした。

「……分かったよ。どうせ反対しても言う事聞かないんだろ？ でも、危なくなったら逃げる。逃げて攻撃のチャンスを探うんだぞ」

「ダイジョウブだよ！ ありがと、おとうちゃん！」

「あなた、本当によろしいの？」

不安そうにして、ソフィーはサルコに問うた。ジェクトの戦闘面における性格を誰よりも知っている彼は、軽く笑って彼女の肩に手をやった。

「考えればあいつも戦い慣れしてるし、見るからにあの男はトレー

ナーとしての力量はないとみられるから多分大事にはならないだろ……なら俺はカポエラーを倒そうかな」

「は？ 格闘タイプなら俺様がどうにかしてやれるぜ？」

「相性とかの問題じゃない。俺、一度カポエラーと闘ってみたかったんだ！ あの変わった格闘スタイル、どんな技を繰り出すか楽しみなんだ！ だからお願いだ、俺に行かせてくれ！」

サルコは、目を少年のようにキラキラと輝かせている。主人公らしく、彼もまた好戦的であった。

「……つたく、餓鬼も餓鬼なら親も親か……好きにしるい。危なくなったら逃げんだぞ」

「するもんか！絶対勝てる！」

同じ格闘タイプの血が騒いだのか、いつになく気合いの入ったサルコ。残るはエビワラー。

「僕が行っていいかな？ ここのところあまり戦闘がなくて体鈍っちゃってるし」

体躯をくねらせてフェロックは首を上下させた。一応彼は分類上凶悪ポケモン。戦闘は生活の一部のようなものである。

「いんや、だってお前さん……エビワラーは」

「駄目だって言うの？」

彼は紅蓮の瞳を光らせ、大口を開けてスタールを飲み込もうとした。

「お、おいおいおい！ 思うようにならねえと、すぐこれかよー！」

「……スタール、フェロックにやらせてやれよ。この前だってこいつが駄々捏ねて凄いいことになっただろ？」

「チツ、どいつつもこいつも……俺様の出番をそんなに減らしてえか！」

「ふふつ。頼もしいじゃないですか」

くさくさとしているスタールを、ソフィーが宥めた。たおやかな笑みに、彼は少し困って『だといいんだけどよ』とぼやいた。

何はともあれ、これで決まった。各々戦うべき相手と対峙する。

「決まったようだな。これを試す時が来たってことか……」

律儀にも待つていたパーセクは発信機についていたボタンを押した。

すると、彼らの周りだけ闇に飲み込まれ、戦い組は相手と1匹ずつ、そうでない組は2匹とでそれぞれ分かれてしまった。戦い組は気付くと各自岩場にいた。

今までいた仲間はおらず、いるのは相手と……

「驚いているようだな」

3匹が別々の空間で辺りを見回しているとパーセクがが姿を現した。

「神の計らいで、こつちの得意なフィールドにさせてもらったぜ。あと、余計な邪魔が入らないように、正真正銘のタイムマンだ。やっぱフェアでなくちゃな。戦わない奴等は白の空間に入ってもらって、お前達の戦いを見ているぞ。ま、お前ら全員がやられた時点でそれすらも逃げる術なしで即ボールの中だけど！」

これまた律儀に彼は何が起きたのかを”全員”に説明してくれた。

「それとな、俺は今『3人』いることになる。分かるか？1空間に1人。このボタンを押すと、自分の意思を实体付きに3分割できるんだ。だから空間ごとに別々の指示が出来る。すげえだろ？」

そんな馬鹿なことがあるかと思っただが、天地がひっくり返るこの御時世、何が起こつても、何が出来てもおかしくない。この説明は同内容で皆に伝わった。

「……説明ばかりしても仕方ねーな。始めっぞ！」

19話 VS パーセク（ジェクトの場合）（前書き）

わーいわーい、やっとバトルだあー！（童心回帰）

大分かかりましたが；

19話 vs パーセク（ジェクトの場合）

Circumstance of Ject（ジェクトの場合）

「戦闘開始だ！ いけ、サウムラー！」

サウムラーは特に意気込んでいないといった感じでジェクトの前に佇立した。見縊りの表れか。

（こいつの あし には ちゅういしなきや……！）

そうジェクトが考えていると早速足が襲いかかってきた。奴の脚は際限なく伸びる。彼は小柄を活かしてそれを避け、素早く背後に回り辻斬りを打ち込んだ。ダメージこそあまりないが、父親譲りのこちらの素早さを誇示できた。しかし、油断すること勿れ、脚は180度方向を変えて彼を捉えた。

「わあっ！」

何とか避けたものの、脚の伸縮性、綿延性は決して侮れない。

「相手はすばしっこい。ビルドアップして一発で決めるぞ！」

サウムラーはビルドアップを始め、ジェクトはその隙にと、一人と一匹（？）に気付かれないよう岩陰に隠れた。

「うん？ 隠れたな……でもいいのか？ その間もサウムラーはパワーアップしている！ お前が瀕死になるのも時間の問題だぜ？」

やがてサウムラーの攻撃、防御が共にMAXに。こうなっては手が付けられない。食らったら一溜まりもないだろう。

「さあ出て来い！　そこか？！　やれ、サウムラー！」

サウムラーは手当たり　いや、足当たりと言った方がこの場合適切だろう、辺りの岩を破壊し始めた。その威力といたら凄まじいことこの上ない。岩が砂のレベルまで分解されてしまう位だ。そして彼が3つ目の岩を破壊した時、遂にジエクトは見つかってしまった。

「そこだあッ！！！」

(どっしりっ……っ！)

よけるか受けるか迷った挙句、ジエクトは下手に動こうとはせずジャンプでよけたが、足の衝撃波で軽い体は飛ばされてしまい、宙を舞った。

「チャンスだ！　空中なら避けられまい！　サウムラー、一気に行けえ！」

迫り来る伸びる脚。誰も^{シユヘイ}が輸贏を悟るであろうこの境地、見事に彼は覆した。　まだ終わってはいない　彼はそう訴えるかのよう
に伸びきった膝にしがみついて必死に抵抗していた。

「あの子振り落とされないかしら……あんな高さから落とされたりでもしたら……」

子は三界の首枷。ソフィーはハラハラと息をするのも忘れるくらいに白い空間から我が子を見守っていた。戦わない者はここに送られるらしい。空間内は3匹の戦い振りを俯瞰フカンして見た映像だけが存在している。

「大丈夫だつて、そんな落とされて泣いてはいお終えつて玉じゃあねえからよ」

「そつだといいのですが……」

「お前さんが信じてりゃ負けねえさ。腹痛めて産んだ大事な子だろ？ 信じてやるうぜ」

「……ええ、スタールさんありがとう」

「サウムラー！ そんなの振り落とせ！！」

サウムラーもまた必死に振り落とそうと試みたが、これがしつこいのだ。接着剤でくっつけられたように彼は脚から離れない。それだからサウムラーは脚をあちこちに振り回している内に伸びきっていた脚は見事に絡まった。ジェクトはそれを見計らってから脚が上に振られた時に勢いを利用して自分から高く跳躍した。

「何やってるんだ、来るぞ！ 早く解いて迎撃しろ！」

サウムラーは解けと言われて困ってしまった。脚は器用だが手はさほどそうでない。逆の脚で蹴ろうとも、絡まった脚は地面に付くのもままならず、彼はただ焦ることしか出来なかった。

ジェクトはサウムラーの脳天目掛けて頭の鎌を振り下ろし、鉛直に突進した。

瞬間、凄い音がしてもうもうと砂煙があがった。

「サ、サウムラー?! クソッ! 何の技を出した?!」

「あいつ、やるでねえの」

「あの子は無事なんですか?」

「その台詞は敵さんにかけてやった方がいいぜ。今した技はあいつの十八番あはじさ」

ジェクトの十八番とは、父親から与えられたタマゴ技の“おしおき”である。相手は自由を奪われていて、もろ当たりの急所だろう。この場合、威力の倍数は例え2分の1でも、掛ける2で1に戻り、タイプ一致の1.5倍で逆にプラスに。更に言うならおしおきの効果は相手が補助効果でパワーアップしているほど威力は加算していく。

攻撃・防御をビルドアップしていたサウムラーには効果覿面である。そして技が急所に当たった場合、防御・特防の補助効果は無視される為、サウムラーは鉄のようになった防御力に関わらずにおしおきを食らった。

理論でいうなら瀕死であろうが、そうもいかないのがポケモンバトル。相手の一手二手先を読んだ者の勝ちである。

「えっ……!?! 立ってる……!」

「ゲッ! こらえるを使いやがったか!」

「こらえる……?」

「瀕死級の技を食らっても必ず1残んだ……まずいな……あのコンボが来やがるぞ!」

サウムラーはジェクトがぶつかってくる直前に自らの判断でこらえるを使い、皮一枚で繋がった。

「いいぞサウムラー! 反撃だ! 起死回生!!」

サウムラーは絡まったままの脚をジェクトに渾身の力で叩き付けた。戦闘終了だと思っていた彼は避けきれず、瀕死直前状態からの起死回生を正面から食らい、真横に吹き飛んだ。

「ジェクト!? ……そんな……そんなっ……!!」

その時の母親の様子は“気の毒”の一言であった。叫んだ直後に顔は蒼白し、失神寸前でスタールに支えられた。そして、何度も我が子の名を蚊の鳴くような声で呼んでいた。

「……出端を挫かれるつつうのはこういうことか……自分の力を弁えねえからそんなことになるんだよ! んの餓鬼がつ!!」

暴言を吐きながらも、スタールは今後捕まったジェクトをどう助けるかを思索していた。

しかし、結局その思索はお蔵入りとなった。

先程言った通り、相手の一手二手先を読んだ者が勝つ。例え凶らずしもだ。

「もう動けないだろ……さて、そろそろ捕まえるとするか！」

パーセクは遠くまで飛ばされたジェクトに向けてボールを投げる。サウムラーもその様子を見ていた。

その刹那である。

巨大な紫の刃がボールを切り裂き、更にサウムラーを切り付けた。典型的無防備だったサウムラーは声もなく倒れた。

「?! まさか……そんな馬鹿なっ!!！」

「! 今のはサイコ……おい、嬢ちゃん起きろ! お前えの子供はまだ戦えたぞ!」

「……そんな気休め嬉しくも……」

「気休めなんか俺様が言うと思うか?! 目ん玉ひんむかせて見てみるい!」

「……!!」

ソフィーが見たのは胸に傷が付いて倒れているサウムラーに、真つ二つのボール、そしてその延長線上の愛しい息子の立つ姿だった。

「ジェクト! 倒された訳じゃなかったのね……!!」

「な、大丈夫だったろ? まあ、あんなにハラハラさせられるとは思わなかったけどよ」

「サウムラー！ 立て！ 立たなきや……あつ！ 畜生、消えていきやがる……！」

パーセクは下半身から徐々に消えていきつつあった。それは即ち試合終了である。サウムラーも同様に消えつつあった。

ジエクトは勝利を以て捕まるのを免れた。

「……まだ俺の分身が二つある……それまで勝ったと思うなよ！」

そう残しパーセクの分身の一つは完全に消えた。

「はあはあ……かった……ぼくかったんだ……ありがとう、ヒツキおねえちゃん」

長い胸の毛で隠れて見えないが、ジエクトの肩には気合いの襷が掛かっていた。本人は鬱陶しがってたが、予めヒツキがバトルタワー用に持たせていたものが巡り巡って役立った。

彼がダメージを受けないよう粘っていたのも、今となって有利に働いた。全く、桶屋も嬉しい悲鳴を上げていることだろう。

役目を終えた襷は彼に別れを告げるように解け、千切れた。

そしてその内フィールドが歪み、彼は母の待つ白い空間まで送られた。

19話 VSパーセク(ジェクトの場合) (後書き)

ダメージ倍率はでっちあげDEATH (埋まれ)
こんなダメージ与えられないと思いますが、そこらへんはご容赦を；

20話 vs パーセク（フェロックの場合）（前書き）

璃那さんのところのルナちゃんからモモンジャムを貰いましたv
うまうま^^

サル「何独り占めしてんだあ！　つか、お前が食うな！！」

ぐあっ！

ジェ「ジャムはみんなでたべたよ。ルナおねえちゃんありがとう！
おいしかったよ」

では、本編入ります　復活

20話 vs パーセク（フェロックの場合）

circumstance of Ferocious（フェロックの場合）

相手は手強いと戦う前からフェロックは感じていた。相手は構えに一分の隙もなく、握られた拳からは闘志が漲みなぎっている。彼も負けじとくねった体を持ち上げ、眼を爛々（ランラン）とさせて威嚇し、相手を睨み付けた。

「いいぜ、そつちから来いよ」

パーセクが余裕たつぷりにそう言った。それではお言葉に甘えてそれで上手くいくだろうか、いや、ない。

フェロックは知っていた。この余裕……奴はカウンターを覚えていた。過去に他のエビワラーを下手に仕掛けて痛い反撃を食らったことがあるからだ。物理と特殊のタイプ分類変更の恩恵を受けたかと思えば、このような事態も起こり得る。

だが膠着状態に彼は耐えられなかった。顔こそ貫禄はあるが、中身が伴わない。敵が何をしてくるか怖いのだ。

（物理が危ないなら……特殊だ！）

彼は口一杯に水を溜め一気に発射した。

「ハイドロポンプか……見切れ！」

エビワラーはフェロックに向かい走りながらも、水流の動きを目で捉え、避け、気付いたときには既にフェロックの背後をとって

た。

「速いつ……！」

咄嗟に彼は太い尾を振ったが、それもエビワラーにとっては止ま
って見える。相手は、今度はフェロツクの顎真下、彼の死角に潜り
こんだ。

「エビワラー、スカイアツパアアー！」

空をも飛べる勢いで、エビワラーはフェロツクの顎を拳で突き上
げた。

しかし、彼は少し舌を噛んだだけで、大したダメージには至らな
かった。

相性と特性のお陰だろう。

「ん、そうか相性が……なら、エビワラー！ そのデカイ図体に雷
パンチだ！」

エビワラーは跳び上がったままフェロツクの胴体に着地し、帯電
した己の武器をそこに叩き付けた。

フェロツクはとうとう、自身が最も苦手とする電気タイプの技を受
けてしまった。

幸い、硬い鱗が電流の体内への進入を防いでくれたが、4倍弱点と
いう爆弾を抱えている彼はこれ程恐ろしい敵はいないと痛感した…
…というより、既に恐怖を通り越しパニックを起こしてしまった。

（特殊攻撃しても見切られちゃうし物理だとカウンターされちゃう
し僕どうしたらいいの分からないよ電気怖いよ誰か助けてよ……っ
！…）

「フェロックさん、パニックに陥っているように見えますが……」

「見えるんじゃない、もうパニックになっちまってんだよ。あいつ一人で戦ったことねえしな……」

ヒツキのことが大好きなフェロックにとって、この戦いは他の者よりそれは孤独で、苦しく、悲しいものだった。

「ガキといい、海蛇といい、どうも思慮に欠けた奴らが多いよなあ……」

「あ、あの……ガキとはジェクトのことでしょうか……？」

思わず零れた『ガキ』というその単語。そうだと彼は言いかけ、彼女の顔が曇っていくのが分かると咳払いをし、言葉を飲み込んだ。

「……まあいいぜ、海蛇は海蛇で上手くやるから……多分な」

「どうした、来ないのか？ ならばどんどん攻めろ、エビワラー！」

彼はまた走り込み、フェロックに攻撃を仕掛けようとする。先程と状況は同じだが、一つだけ都合が違うものが。

フェロックがパニックに陥り、何人たりともその後の彼を止められないということである。

「…………るな…………」

それは近くにいても聞き取れない程の小さな声だった。更なりにエビワラーには聞こえていない。しかし反復して声に出されるにつれその言葉は顕著に聞こえてきた。

「来るなアッ！！」

どごとと音がしたと思った時には既に岩は影もなく消されていた。1人と1匹は、ここになって初めて彼が破壊光線をしたということに気が付く。エビワラーに到っては避けたものの、掠り、酷い擦過傷が腕に刻まれた。

「うわっ…………何て威力だ…………エビワラー、怯まず攻めろ！ もう一度雷パンチ！」

流石と言っているのか、エビワラーはそれにも臆せず反動で動かないフェロックの背後に回った。そうは問屋が何とやら、コンマ一秒でフェロックは体からおどろおどろしい波動を放った。

そのワザ 悪の波動にエビワラーは一瞬怯み、隙を見せた。理性はとうの昔になくぐり捨てられ、半野生化したフェロックはその毛程の隙を見逃す筈はなく、カウンターの暇も与えずアクアテールを振り向きざまにぶちこんだ。岩に激突したエビワラー。かなりのダメージで、起き上がるのは不可能と見られた。

だが彼の攻撃の手は緩めず、エビワラーのいる場に破壊光線。そしてエビワラーに冷気を纏った牙で噛み付き、氷づけに仕上げた。それでも落ち着かず、今度はパーセクに照準を合わせた。口の中は高エネルギーの玉が溜められていた。

「まっ……待て待て！ 俺を攻撃しても意味はっ……あ、良かった、消えてく。俺が」

負けたことに困り二つめの分身は消えた。

その後彼は破壊光線を発射し、それでもまだ飽き足らずに暫く暴れ、フィールド全壊寸前でやっとこさ落ち着いた。

「こ……怖かったあ……ところで敵は？」

天井はあまり好かないが、敢えて彼らからにでも言わせてやるのか。

「^{てめえ}手前の方が」「あなたの方が」

遥かに怖かった

そんな同内容の台詞をはもらせ、2匹は顔を見合わせた。

20話 vs パーセク（フェロックの場合）（後書き）

ジエクトの時と比べると、大分あっさりしてしまっただ；
フェロックみたいなデカブツは動かさにくいです^^；

21話 vs パーセク（サルコの場合）

Circumstance of Sarcomere（サルコの場合）

初っ端から彼らは飛ばしていた。それぞれの特殊な戦い方が双方を益々熱くした。

「カポエラー！ トリプルキックだっ！」

彼は頭を軸に回転しながらサルコの肩、鳩尾^{みそおち}、足を狙い、蹴りを繰り出した。対するサルコはそれらを丁寧且つ素早くガード。足に来た時は前宙でかわし、その勢いで踵落^{かかと}としを食らわそうとする。そうはさせじとカポエラーは独楽のような回転運動の速度を速めて弾き返す。一進一退の攻防劇に、指揮する者も自然と闘志が高まる。

「そのゴウカザルの動きを封じる！ 攻めて攻めて攻めまくれ！！」

トレーナーの指示としては余りにも感情的、あまつさえ抽象的ではあるが、カポエラー自身も同じ気持ちであろう。

一旦地に足付け、一呼吸置いてからカポエラーは再び動く凶器と化した。

「互いの力はとんとんってどこか。まずまずの試合模様だな」

「主人が勝てる兆しはありますか？」

「いんや、俺様からじゃあ何にも言えねえな。勝利の女神さんの好みのタイプがサル公だつて事を祈るしかねえ」

「……………浮気は許せません……………」

ソフィーは少しムツとした。喩えを本気にしているのか、そうでないのか。

「ん？ ああさっきのは例えだよ。そう本気になりなさんなや。あいつが勝つたら“きす”すんなり何なりしてやれ」

ソフィーはキスという言葉に今度は紅葉を散らし俯いた。

（こんな初心で生真面目な他夫も珍しいもんだなア……………話しておもしれえぜ）

そんな半外野のやりとりは扱置き、カポエラーはサルコに猛スピードで迫っていた。

しかし彼はそれを躲そうとはせず、足が当たらないように体勢を低くし、足で彼の軸を後方に払った。カポエラーは軸がぶれた為サルコの正面に倒れ傾いた。それがサルコの狙いだった。

彼は倒れてきたカポエラーの胴体を抱き付くように固定してから持ち上げ、目にも止まらぬ速さでバックドロップを成功させた。カポエラーは受け身をしきれず硬い岩場に頭を打ち付けられた。

「カポエラー、リベンジ！」

しかし、ぶつけられたとしても、頭が地面についているのはポジション的に楽である。カポエラーは狂いかけた思考回路のまま、回転して遮二無二にサルコを蹴飛ばした。リベンジは、ダメージを受けた直後、その根性で相手を攻撃するというもの。

攻撃後の隙を突かれたサルコはまともに食らってしまった。

「いつて……！」

「いいぞ！ 続いて回し蹴りだ！」

調子付いたのか、カポエラーは更なる攻撃をサルコに加えた。リベンジを食らったばかりだった彼は避けきれずにそれを肩で受けた。じんと痺れたそこを押さえ、彼は体勢を立て直す。

「よしよしよし！ このままトリプルキックで」

「調子乗るなよ！」

サルコはこれ以上攻撃が来ないように、マツハパンチをカポエラーの腹にぶち込んで岩壁まで吹っ飛ばした。それでも気情からか、吹っ飛ばされてもカポエラーは立ち上がった。

「勢いが殺がれたか……正面からじゃ負ける！ 穴を掘れ！！」

足を下にしてしまつては、勢いを立て直すのに時間が掛かるとパーセクは判断した。

彼の命令に反応したカポエラー、軸をドリル代わりにして姿を隠した。勿論サルコには何処にいるのか見当こそつかないが、キョロ

キヨ口と相手を探す必要などなかった。そんな行為は愚かだし、逆に彼にとってこれはチャンスだったのだ。

サルコは思い切り地面を拳で殴った。

拳が当たったところから地面は波状に揺れ始める。彼は所謂地震のわざを使ったのである。初期微動は主要動へと変化を成し、全体を揺らした。穴を掘っている者には堪ったものではない。何せアセノスフェアとリソスフェアのチークダンスだ。巻き込まれては不快極まりない。

不快なのはトレーナーも然り、立ってられないのだ。目と脳の指令がぐつちやぐちやで、命令どころではない。自分自身のコントロールで精一杯。それでも彼はカポエラーに地面から出て攻撃するよう指示した。成程、根性は共にあるようだ。カポエラーは指示を受け、揺れが収まった頃に出たはいいが肝心な攻撃対象がない。

「こつちだぜ、こつち」

声がし、上を見るといつの間にかサルコは切り立った岩崖の上で寛ぎポーズをつくっていた。野生時代では崖の上で生活していた彼からすれば、崖を登ること位朝飯前だろう。それにしても、この余裕は何だろうか。

「なっ……！ 卑怯だろ！ それじゃあカポエラーが攻撃出来ねえだろー！」

「なら出来るようにすればいいじゃん？」

サルコは余裕たっぷりの様子で相手を見下し、馬鹿にした。未熟なトレーナーの指示と、それに従うポケモンの力量の低さ。戦う前のサルコの期待はすっかり萎み、途中から真剣勝負から遊びに走ったみたいである。

「くう〜っ……………！ カポエラー、岩を削ってあのサルコ足場を崩せえっ！」

これまた言われなくとも、超然とした速さでカポエラーは岩を削っていった。

数秒には足場は今にも崩れそうになっていた。

「おっと……………もうそろそろいいかな……………！」

サルコは足場が崩れる瞬間、宙返りをしてその場を離れた序でに火炎放射で崩れた岩を炎で包んだ。岩は火砕流宜しくカポエラーに襲いかかった。

「カポエラー、よけ……………」

「遅い！」

サルコはカポエラーの背後に現われ、至近距離で拳を刺した。

インファイト 彼のメインウエポンである。拳に押し出されたカポエラーは避ける術なく火砕流に飲み込まれた。

炎の岩に埋もれたカポエラー、目を回して動く気配なし。勝利の女神はサルコの方に首を縦に振ったようだ。根拠はパーセクの体の消え具合によく現れていた。

そして彼は何かしら捨て台詞を吐いて消えた。この位の台詞であったらどうでもいいので独断でカット。いちいち負けて喚くのも見るのも見苦しいであろうし。

サルコは、『何だこの程度だったのか……………』と落胆の面持ちで岩を意味無く砕いていた。

そうしているうちに例の如くフィールドは歪み、白い空間に転送された。

21話 vs パーセク（サルコの場合）（後書き）

ぜえはあ……やっとなんが戦闘が終わりました；

散々バトルバトル喚いていたのに、いざ書くととなると難しいですね
^^；

どうでもいいですが、回し蹴りがどうしても回し下痢になるマイ携
帯……orz二度蹴りとかも、勘弁してください；

22話 進路決定！

これで全ての時間が繋がり、サルコ側の勝利が決まった。勝利した順番は書いた順番である。

リーダーが戻るとパーティー全員が出迎えてくれていた。

「みんな……無事だったな！」

「サルコこそ、勝って無事だったんだね！ 僕は何か分からないけど、勝ったよ〜！」

「当たり前だろ？ 相手なんて”開けて悔しき玉手箱”ってところだったし。……ジエクトは大丈夫か？」

「う、うん！ ちょっとあぶなかったけど、ここでやすんだらゲンキになったよ！」

数分か互いの健闘を報告していると男が姿を現した。足取り重く、今にも重力に屈しそうである。

「……まさか……まさか負けるとはっ……！！」

意思を分割する分負けた場合、3倍の体力を使い果たしてしまうようで、その疲労は想像を絶するものであった。

パーセクはとうとう地面に伏してしまい、白い空間も元の色に戻り始めた。

フィールドが元に戻り、パーセクが倒れる際に石状のものが落ちる音を一同は聞いた。倒れた彼よりもその音の方が気になって彼そ

つちのけでそれをリーダーが拾う。

「石板みたいだな……大きさをすると5、6個に分けてるのか？」

「絵も描いてありますね。何かの足と尻尾でしょうか？」

「この足と尻尾、ツアイトのにそっくりだよ！」

「何にしる拾った分には全部集めてやるうぜ」

急にスタールはそんなことを言い出した。明らかにこんなものお荷物である。

「でも今は宝探しじみたことしてる場合じゃ……」

スタールの発言の意図が分からず、サルコは彼の提案を却下しようとした。しかし、彼は信じられないといった顔つきでサルコを見た。

「おいおいおい！ サル公、脳味噌に蛆でも湧いちまったのかア?! この石つコ口は敵さんが大事大事に持ってたんだろ？ 大事に持ってたつつうことは何か重要な秘密があるってことでねえのか？ んで、それを全部集めりゃ分かるかもしれないねえぜ。さつき海蛇の言った通り、これは逆立ちしても神さんの体の一部だ。関係ねえ訳ねえさ。駄目で元々、あてはねえんだ。集めようぜ」

確かに一理ある。敵の所有していたものは何か秘密がありそうである。しかも、それは石板。何かないわけが無い。

「……まあそうだな、目的なく動いていても仕方ないしな……今み

たいな、ポケモンを持っている人間を探して負かして奪おう！」

「あとミオにも行ってみてはどうですか？ 図書館へ行けば、この異変のことが分かるかもしれませんよ」

ミオといえば、シンオウ唯一の図書館がある町である。知識の集合体のようなそこなら、少しでも何か分かるかもしれない。それがソフィーの考えであった。

「そうだな。よっし、じゃあミオへ行くがてら石板集めをしよう！」

この提案は反対する者もおらず、満場一致で可決された。かといってもバトル直後だし、もう日が暮れたので皆は適当な場所を探して休むことにした。施行は明日である。

22話 進路決定！ (後書き)

今日は2本立てにしてみました。

幸い、手直しするところがあまりなかったなので^^

23話 孤独の黒獅子

時同じくして、背の高い叢くまむらの中を足の限りに走るポケモンが。首の小玉を揺らしながら、草に足を取られても、切り傷を負わされても、はたまた鼻を擦くすくられても只管ひたすらに走った。止まれば捕まる、止まらなければ捕まらない、ただそれだけであつた。

彼には味方がいない。いたはいたのだがつい先程リーダーに追放されたのだ。故一匹であり、周りからは野生扱いとなつて狙われている。

幸い草で隠れて見つかりにくい、絶対的なカモフラージュはできない。実際幾度か人間と鉢合わせになつた。その都度倒してはいつたが、それも限界に近付いていつた。

埒あかないのは目に見えていたので、この長い長い叢を一心不乱にかきわけ、そして遂に叢から抜け出し、彼 グランは霧の支配する溪谷に来ていた。

既に夜になつていたので、彼は身を隠す場所を見つけて眠りに就いた。夜だし霧も深いので、見つかる心配はまずない。だというのに、体は疲れているのに、彼はなかなか寝付かれなかつた。何が原因かと言われても分からないが、目を瞑るとリーダーの怒つた顔、声、そして殴られた頬の痛みが鮮明に蘇ってくる。

「あの時のことを気にかけてるのか……俺が？」

有り得ないと自嘲した。それから俺らしくない、あれごときに踊らされてどうすると自分を戒めた。彼は川に行き、水を浴びて頭を冷やして先程の考えと決別してから再び寢床に戻つた。

朝。人間の声で目を覚ました彼は見つからぬよう前傾姿勢で進んだ。幸い、霧が彼を隠してくれていた。彼自身は透視能力があるお陰からか難なく進めた。
ところが階段を駆け上がり丁度橋に差し掛かるところであった。

「前方にレントラー発見。覚悟はいいな」

声の方を見るとゴーグルを付けた男が。

この男はゴーグルの性能か、霧の中でもグランがはっきりと見えていた。

「ここにレントラーは生息しないことから見たところ、野生ではないな。行け、サマヨール！」

グランを野生扱いする輩が多い中、この男は彼がトレーナーのポケモンだということを見抜いていた。

ボールからは一つ目が不気味なポケモンが、出て来るなり攻撃を仕掛けた。

「霧の中だからといって、こいつに通用するとは思うな、どくどくだ！」

寝起きで、しかも寝不足で疲れが全く取れていなかった為、対処に遅れたグランはシャワーの如く毒を食らってしまった。血を少量吐いた彼はそれでもサマヨールに電気を浴びせようとする。

「無駄だ。影分身」

当たる瞬間サマヨールが幾匹かに広がる。

その間にも毒は彼の体を蝕んでいった。
逃げられず、振り切れずの絶体絶命の窮地に立たされた彼に助けは
なかった。

「止めだ、シャドーボール！」

サマヨールは無慈悲にも黒き塊をグランに投げ付けた。彼は最後の力を絞って避けたものの、半身が当たり、その拍子に足を踏み外して谷底へ姿を見えなくした。

「やり過ぎたか……？ まあいい、どうせ死んだなら捕まえる手間が省けた　次へ行くか」

深い霧は谷底を隠すように一層濃くなっていた。

24話 初めての朝と再出発 (前書き)

活動報告でも申しましたが、ユーザ以外の方でも感想を送られるようになってきました

24話 初めての朝と再出発

「うん……ふわあああー……朝か……眠……」

こちらはサルコサイド。全く呑気なものである。別の場所で仲間が谷底に落ちたというのに、リーダーは半開きの眼を擦っている。しかしまあ、知らないからそのことを咎めても仕方ないが……

「、あれ、スタールがいない」

と、ここで昨夜まで途中一緒に見張りをしていたムクホークの姿がなく、ゴウカザルは辺りを見回した。見張りというのは、寝ている間に万が一人間が捕まえにくるといけないので、おんな子どもであるソフィー、ジェクトを除く3匹で交代交代ですることになっていた。夜明けまで9時間、1匹あたり3時間ずつと当初は割り当てられていた。

ところがだ。最初のフェロックが30分にして限界だと眠りに入りかけたサルコに訴えてきたのだ。グズると手がつけられないのは経験上分かっていたので半ば強制的に彼は余分に2時間半見張りをする羽目になった。

今も張本人のフェロックは池の底で蜷局とぐろを巻いて高躰たかいびきである。

その後変に起こされたサルコは逆に眠れず、スタールの番になっても目が冴え、暫く一緒に見張っていたがいつの間にか眠ってしまった。結局見張りはグダグダに終わり、そして最後までその怠惰な見張りに根気よく従事していたスタールが今いない。

「トイレかな……？ それともパトロールとか……」

そんなことを考えていると彼の頭上から何かが降ってきた。それ

はサルコの頭を直撃し、しかも柔らかいのか形が崩れ、彼は汁も盛大に被った。

「いつて……！ 何だコレ?!」

上を見ると大量の実を運んでいるスタールがいた。因みに先程サルコに当たったのは直径25cmを越えるカイスの実。

そんな大きな実を運んでいたスタールは何故か濡れていて、表情は可也鬼気迫っている。そして彼は足の掴む力を緩めて多量の実を乱暴に投下した。

「ちよっ……おまつ、待てっ……うわああ!!」

それはもう木の実満載雨霞、何のこっちゃか知らないが兎に角サルコは木の実の恵みを全身に受けた。セシナが当たった時は悶絶ものだ。

悪びれもなく降り立ったスタールに当然の如くサルコは汁塗れの体で抗議する。

「おいっっ！ 何するんだよ!! 俺が下にいるの知ってただろ?!」

「っせえー!! 手前は黙ってとつと木の実しゃぶってりゃいいんだよ!! んの……どサル!!」

「どサル?!」

「手前も起きろい!! いつまで寝てやがんでい!! 一ちとら見張りしてたんだぞ畜生ーっ!!」

八つ当たりも甚しく、スタールは木の実を蹴散らし喚いた。一体、その濡れた体は何を語っているのだろうか。

「お、落ち着けて！ 随分と穏やかじゃないけどどうしたんだよ？ 何かビシヨビシヨだし」

「あんの野郎ー！ 飛べねえくせに面で人切りやがってー！」

「だから何があつたんだよ?!」

こちらはこちらで大変そうである。

無事このことを解決できるのか一抹の不安が残る。取り敢えず彼の怒りの原因を探ってみることに始まっていきそうだ……

「……要するに、他のパーティーのポケモンに馬鹿にされたんだな？」

「口に出して繰り返さない！ 思い出すだけでむかついてくらあ！」

今、スタールは虫の居所がかなり悪い。何があつたのかを思い出させるのもご法度のようだ。

「いや、そんなこと言つたつて読者に説明しないと……」

「読者つて何だよ」

メタサルコ発動。

「で、どんな奴だったんだ？」

「エンペルトの野郎だ。あいつ、水タイプのポケモンばかり引き連れて……ってエ！ さっき説明しただろオが！！」

「読者を置き去りにはできないだろ？」

どうやらスタールは一通り説明したらしく、これ以上メタサルを続けると元の木阿弥なので、三人称視点から説明しよう。スタールは朝食の調達をしに飛んでいた。調達した後、ふと下を見ると何やら水タイプの集団が。その先頭にいた頭であるうエンペルトと彼は目が合い、それがいけなかった。

突如エンペルトはハイドロポンプを放った。それは彼に直撃。木の実を持っていた為上手く避けられなかったのだ。

幸い、よろけただけで済んだものの、勿論彼は怒った。何しやがんでい！という感じだろう。

「それがただ退屈で、お前を撃ち落としたら楽しそうだったからって吐かすんだぜ？！ 俺様はあのだペンギンの暇潰しにこんな目に遭ったんだよ！ しかもその濡れたみすばらしい形の方が付き付きしいつつうんだ！！ ざけんなんてんだこっちはよオ！！」

「成程なあ……ところで、その【ど＋名詞】は罵り言葉なのか？」

「ど素人とか言うだろ？ そんな類だよ」

「類ねえ……でも、俺達の他にも行動を起こしてる奴らがいるって

「ことで心強いじゃないか」

「だとしても絶対エ近付きにはなりたくねえけどな！」

「まあそんなこと言うなって……それより、木の実食べないか？
みんな起こしてさ」

「だな。こんなとこずっといても進まねえしな……」

まず2匹は真っ先に見張りを離脱した裏切り者のギャラドスを起こすことにした。

「海蛇！！ 飯だぞ！ 起きろい！！」

「もう起きてるよ」

「っ？！ てめっ……何てモン食おうとしてんだ！！」

フェロックはトサキントを啜くわえながら池の底から顔を出した。トサキントからは死相すら漂っている。

「だって、僕木の実だけじゃお腹空いちやうもん」

「金魚食つなよ！ 金魚を！ 放してやれ！」

「スタール、いちいち拘泥コウヂイしてたら話進まないから。食うっていうならそれでいいじゃないか……食物連鎖だし、お前だって猛禽だろ？」

「けどよ、水中の女王をこんなにしちまって……ったく、まあいい、

好きにしるい！」

喜ぶフェロックは放置しておき、2匹はソフィー、ジエクトを起こしてから朝食を済ませ、その後一行はまだ足りないというフェロックを引き摺りながら先へと進もうとしていた。

「ん、ジエクト………そういえばお前、歩き方がおかしいな」

「え、な、なんでもないよ！」

先程から足を引き摺っているジエクト。朝は何ともなさそうだったが、いざ歩き始めると明らかに足を庇っているのが分かる。しどろもどろになる彼の態度も怪しい。

すかさずサルコはジエクトを抱き上げ庇われている方の足を見た。僅かではあるが腫れが認められ、空を舞う痛みには彼は薄ら涙を浮かべてぎゅっと目を瞑った。

「ジエクト、本当のことをいいなさい」

それでも口を割らないジエクトに、ソフィーは柔らかな口調で話すように促した。

「……ごめんなさい………きのうのせんとつであしをつつちやって……しばらくはガマンできたんだけど………」

「どうして早く言わなかったんだ！」

「あなた。……ジエクト、早く気づいてあげられなくて、お母さんの方こそごめんね」

黙っていた彼も悪いが、それ以前に親であるのに気づけなかった自分にも非がある。そう思ったソフィーはサルコを宥めてから我が子に謝った。そしてジェクトを自分の背に乗せた。

「あなた、この子どうしましょう」

「次の町のポケモンセンターに行けば、手当てできるだろ。それまでちょっと我慢だな」

そんなこともあったが、彼らは人間達をかわしつつ、次なる町ヨスガを目指した。

25話 咲いた菊花の花 (前書き)

最近短い気が……でも、気にしないんだz(ry

場面は変わります。この先、しょっちゅう場面転換がありますので、
そのところはご了承くださいませ。

25話 咲いた菊の花

「パーセクはやられた……か。役立たずめ」

カイドウは黄色くなったパーセクのポイントを睨み、咄嗟トッセンした。あの機械には発信機が付けられており、組織の者のカードIDと連動して、名前と共に個人の場所が特定できる。更に、普通ならば青色の印となつて表示されるが、対象者が気絶した場合は黄色、死亡した場合は赤色の印となつて表れる。

そして極めつけは小型カメラ。画質は悪いが、そこであつたことをリアルにモニターに映し出す。

しかし、カイドウの関心は中核六人のみ。先程から、目は6つの点と、6つの映像しか追っていない。

「カイドウ様、幾人かもポケモンの襲撃を受けた模様……」

「分かっている！ 使えない物は捨てておけ！！」

正直彼は焦っていた。中核六人の1人が倒され、石板まで奪われてしまった……彼はパーセクを倒したポケモンを徹底的に見つけ、捕まえるように無線で中核六人改め5人に指示した。

「……中核の1人を倒すなんて、それを育てたトレーナーは一体何者なんだ……」

「はつくしゅっ！ ……あり、どこどこ？ 牢屋みただけど……」

「気がついたか。丸一日気絶してたから敵ながらつい心配してしま

「たぞ」

「??? …… ああー！ そっか、あの時……。！！ あれからどうなったの?!」

「ここは地下室。意識が回復したヒヅキは、自分が冷たい鉄格子にぶち込まれたこともさておき、さっと血の気を引かせて監視員に訊いた。自分の知らない間にどうなったのか、あの2匹は結局操られてしまったのか……」

監視員は躊躇うこともせず、あつたことそのまま話した。

ヒヅキはそれを聞くなり地面にへたりこんだ。

「そんな…… 最悪の状態じゃん…… 私の子達もみんな捕まって……」

「分かんないぞ。トレーナーのポケモンはしぶといからな、実際トレーナーのポケモンに俺の上司が倒されたらしい。パーティーは確か…… ゴウカザルにアブソルが2匹、あとギャラドスとムクホークだったかな……」

「えっ嘘?! ちょ、ちょっとそれ本当?!」

「は!?! …… あ、ああそうだ」

「1匹いないけど、その子達私のポケモン!!」

監視員の言うパーティー編成を聞いた途端、彼女は檻越しに餌をちらつかされた猛獣の如く鉄格子を揺らしながら体を乗り出した。暗く湿った場所に相応しくない、ガシャンという激しい音が響き、監視員は瞬間的に身を強張らせた。

「……てことは、私のポケモンは捕まっていってことだよね！」

「ま、まあそういうことになるな……（び、ビビったあゝ……）」

「ここまで来てくれるってことだよね！ みんなを助けてくれるってことだよね！ ね！！」

少女の藍色の瞳は輝いていた。燦燦とそれらを輝かせるものは確信にも至らない脆い希望。しかし、それがどれだけ彼女を元氣付けたことか。ヒツキは興奮して再び鉄格子を揺らした。そのまま壊してしまうような勢いである。

「いや、それは分からないけど……」

「大丈夫！ うちの子みーんな強いもん！ 絶対負けないよっ！」

ここまで断言されると自惚れも自惚れに聞こえないから不思議である。逆に納得させられそうだ。

「よし、私も負けない！ みんな……信じて待ってるからね！」

生き返った少女の決意の声は遠くにまで木霊した。

25話 咲いた菊花の花 (後書き)

ヒツキ復活。

しぶといなあ

ヒツ「でも、待ってるなんて私らしくないよね？」

いや、知らん。まだそれ先だから。

ヒツ「ぶー！ タイクツだよ！」

26話 vs スペクトル（対峙編）

叢の緑に白が混ざる。白衣を纏った女は屈んで何かを拾った。

「これも使えそうよね……」

グレーのウエーブヘアをかき上げ、その女性　スペクトルは拾った木の実を紺のウエストポーチにしまいこんだ。研究材料として集めているらしい。勿論、本来の任務も忘れてはいない。彼女は足元で混乱していたムツクルを容易く捕まえた。

「……ふう、ここら辺もだいぶ捕まえたかしら」

彼女は一息ついて木陰に座った。

ふとした風に、伸びを一つ。

「ナツキはやられちゃったのよね……全く、馬鹿なんだから」

数時間前に入った無線を思い返す。カイドウの声を聞いたと思えば、内容は幼馴染であるパーセクのしくじり。それには萎えたが、カイドウに彼の穴を埋めるように励まされ、彼女は一人でここ一帯のポケモンを一掃するかの気迫で来た。

彼女はとにかくカイドウに気に入られたい一心でいる。その感情は恋心とでも解そうか。

「でも　こんなこと本当に意味あるのかしら　」

風に吐かされたのか、つい本音が漏れた。実行に至るにつれて、変わっていつてしまったカイドウが彼女には心苦しかったらしい。

「……あら？」

心境はどうであろうと、想い人の命令には絶対に従う。それを強要するかのように、彼女の傍を見慣れたポケモンが通った。

「ここは人間がいないな」

「っかしよ、ポケモンもいねえぞ」

サルコ達はもうすぐヨスガに着こうとしていた。町の様子を見たいし、ジエクトの足も治したい。そんな彼らの都合良く、周囲には人間がいなかった。

「ポケモンがいないということは、捕まったということ……誰かいることは確かですので、慎重に行きましょう」

「また会ったわね」

ソフィーがそういった直後、見覚えのある白衣の女が彼らの行く手を阻んだ。

「ルールは分かっているわね……始めるわよ。悪く思わないで頂戴ね、あなたたちを倒して捕まえるとカイドウ様の命令なの。石板も返してもらいたいし……だから、嫌とは言わせないわ。悪いけど、本気よ」

彼女、スペクトルは自分のボールを出した。中身はキノガッサ、

パラセクト、ロズレイドといった草タイプ中心の面々である。
勿論サルコ達には嫌という項目は削除されていて、既に誰がどの相
手をするかを相談している。

「まず、ジエクトは除くな。そんな怪我で戦わせられない。スター
ル、キノガツサかパラセクトのどっちかを頼む。俺はロズレイドを
やる」

「俺様はどっちでも……海蛇次第だな」

「……僕、パラセクトをやる。速く動かないし、パンチできないし
……」

フェロックは昨日のことをまだ引き摺っているのか、言い方に覇
気がなく、折角の巨体も縮こまっている。

「フェロック、テンション上げてこうぜ。今から気で負けてどうす
るんだよ！」

「うん……」

「ってことは、俺様はキノコ頭か！ いいぜ、やってやるっじゃね
えのー！」

「キノコ頭というか、まんまキノコ……そだ、くれぐれも尻尾の実
は食うなよー！」

「つたりきよオ！ 海蛇じゃあるめえし、心配え御無用だぜ！」

「何それ、ヒドいよー！」

スツールにからかわれると、弱気だったフェロックは途端に身を彼に寄せて文句を言った。

「あははっ。そうだよフェロック、その元気だ！ ……それじゃ、また白い空間で！」

「皆さんのこと見守るしかできないですけど……頑張ってきて戻ってきて下さいね」

「がんばってね、みんな！」

「ああ。頑張るな！」

3匹は前回と同じく各々の相手の前に立った。

「もう決まったのね。せいぜい倒されないようにしなさい……」

そしてボタンが押された。

26話 vs スペクトル (対峙編) (後書き)

中核(略)がわざわざポケモンを出すのは、ボールの中だと上手く異空間に転送されないかららしいです。

27話 vs スペクトル（スタイルの場合）

Circumstance of Starling）スタイルの場合

フィールドは草タイプが得意な森林であつた。あらゆる植物が繁茂し、空気はいいがここは今戦いの舞台。森林浴を決め込む余裕なぞない。

（さあって……何処から攻めるかな……）

「キノガツサ、マツハパンチ！」

「うお、早速かよ！」

スタイルはパンチを真横に避けてから空に逃れた。

（やっぱり空からだよな）

空を飛べるということは大きなアドバンテージ。スタイルは相手が見えなくなる位に上昇“しよう”する。

しかし、ゴンつと鈍い音が。それは想像していたこととは遥かに違う、ありえない音だつた。そして、音と共にじわじわとくる頭の痛み、彼は完全に面食らつた。

「でえっ！？ な……なな……何で空に天井があんだあ！？」

頭を天井にぶつけた彼を見て彼女は嘲りの笑い声を上げた。

「うふふふ、所詮は小さな空間……無限に空がある訳じゃないの。今よ、スカイアッパー!!」

キノガツサは腕を振り上げ跳び上がった。そして彼の顎を抉るようにして拳を高々と上げて攻撃、天井ギリギリで更に突き上げられた彼はもう一度天井とコンタクトを取った後ピンボールのように跳ねっ返り、草のベッドに突っ込んだ。何とか着地は助かったが、顎の痛さが半端でない。

「あははは！おじちゃんおもしろーい！」

「くら、ジェクト！」

「いっちちちち……こんのッ……！」

彼は痛いところを擦ってキノガツサを睨み付けた。

「だが、少しはやるようだな……小娘にしちゃ、上出来だぜ？俺様もそろそろ本気といくかな……！」

どうやらこのキノガツサはメスらしい。そんなことはどうでもいいとして、スタールはキノガツサに、自身が最も得意としている技を仕掛けた。

燕返し。それは俊敏且つ鋭利な技で、一度決めた標的には絶対に外さない。

彼は彼女を切り裂くように右の翼を振り下げ、息もさせない間隔

で今度はそのまま振り上げて彼女を再び切り裂いた。

これは絶対に避けられない技。彼女は例に漏れることなく正面から食らった。

しかし、それと共に粉状のものが舞い散った。

粉は黄色みを帯びていて、スタールはそれを吸い込んでしまった。

「ぶっ……！！ ゲホゲホッ！！ 何だこの粉……れ、か、体が動かねっ……？！」

今のはキノガツサの特性の孢子。言うまでも無いが、直接体が触れる攻撃ならば触れた相手は状態異常になるというもの。

スタールの場合、体が麻痺して上手く動けなくなってしまったようだ。

「掛かったわね。さあ、どう料理して差しあげましょうか？」

「ケツ！ え、縁起でもねえ……！」

その場で留まっているスタールを見下して、スペクトルは別の意味とも取れる台詞を吐いた。

「まずは燕返しを癒しましょう……キノガツサ、ギガドレインよ！」

彼女は命を受け、彼の体力を吸い取り始めた。彼からも力が抜けていくのが手に取るように分かる。

（ちくしょ……脂肪取ってくれるなら有難えんだがな……！ どうかしねえと……ええい！！ 取り敢えずこの痺れどうすりゃいい

んでい！ 何か、何か無えか……？！)

余計なことも少々考えながら、ふとスタールはスペクトルを見る。すると、彼女のウエストポーチが彼の目に入った。

(！ 一か八か、一発打ってやろうじゃねえの！)

彼は 痺れる体を鞭打ち、キノガツサの背後にいるスペクトルに翼を広げて向かっていった。

「きつ……きゃあつ！ トレーナーを襲うなんて卑怯よ！」

「だあれもお前さんなんざ、襲わねって……よっしゃ取れた！」

スタールは彼女の付けているポーチを引き千切り自分の物にした。

「っ……！ 返しなさい！」

「返せと言つて返す阿呆が何処にいるってんだ」

スタールは彼女のポーチを漁った。この博打は大当たりで、中身は木の実が犇きあっていた。薬開発用に採取していたものが仇となった。

「クラブ、クラブはっ……無えな……小さくて見つからねえだけか？ ま、これで妥協してやるか」

取り出したのはラムの実。

「っそれは……！ キノガツサ、奪い返しなさい！」

キノガツサは慌てて彼からそれを奪おうとするが時既に遅し、彼は食べ終わった後で、突進した彼女を飛んで躲かわした。

「振り出しに戻るってか？ 賽サイの目は俺様に味方してるみてえだな。つかし、俺様ばっか賭けても不公平だから嬢ちゃんにも打たしてやるぜ！」

そう言うなりスタールは叢に身を隠し、姿を消した。

「さつきからフェアじゃないわよ。隠れてなんかいないで出てきなさい！」

彼女は苛ついていた。下手に彼に付いていく令を出せば返り討ちに遭う。彼が出て来るのを待つしかなかった。そしてそれがまた仇となって表れることとなる。

「おう、今そつちに行くぜい」

彼は何ら変化なく叢から出て来た。強いて一つ変わった所というなら、2羽に増えたというところだ。影分身である。

「どつちが本物の俺様分かるか？ 待ってやるから当ててみな！」

ステレオで声が迫ってくる。キノガツサは迷っているようだ。だが、彼女のトレーナーは勝ち誇ったような笑みを湛えている。

「さ、半か丁か、お前さんの腕を見せてくれや」

「確率は2分の1……でもこうすれば1よ！ キノガツサ、両方に

マツハパンチ！」

キノガツサは両手に拳を作り、2羽になったスタイルに飛び込んだ。

しかし、儂くも2羽のスタイルは両方共消えてしまった。

「!?!?」

「残念だったな……賭け事はそんなに甘くねえぜお嬢ちゃん!!」

上空の樹から本物の彼は飛び出し、羽を畳んで低空飛行。ジェット機のような速さでキノガツサを轢いた。彼の中での最大威力の技、ブレイブバード。この大技は外すと隙が大きくなる。分身が2つだけだったのは、相手をなるべく引き付けてその場に止まらせるためであった。

本来キノガツサは飛行タイプの技はダメージを4倍受けてしまう。1.5倍も累積されて実質6倍の威力の技が彼女に炸裂したことになる。

当然キノガツサは戦闘不能。起き上がる素振りも見せない。

「キノガツサ! ……くっ! 覚えてなさい」

「賭け事イカサマに如何様はつきものつてえことだな。いくら嬢ちゃんでも、みすみす儲けさせてやる程俺様はポケモンできてねえんだ。済まねえな……」

スタイルは反動で負った右翼の傷を押さえつつイミテーションの空を見上げ、澄んだ空気を胸一杯に吸い込んだ。

27話 vs スペクトル（スタイルの場合）（後書き）

おっさん初戦闘。トレーナーまで襲っちゃいました。
彼はこれからも機転と根性で乗り切っていきます。

28話 vs スペクトル（フェロックの場合）

circumstance of Ferocious（フェロックの場合）

バトルとは最初が肝心である。その時点でどれ程相手を圧倒、または翻弄できるかで決まると言っても過言ではない。

（キノコだから状態異常にするのが得意だよね……多分。孢子を吸い込まないようにしなきゃ！）

（髭が青いことからして相手はオス……有効ね）

お互いの思考が交錯するのも序盤に多いだろう。

「パラセクト、例のワザよ！」

「例の……ワザ？」

技名を隠され、警戒した彼はパラセクトの動きを見逃さないよう構えた。しかし、それがいけなかった。パラセクトは、自分の笠を手（？）でちよいと上げ、白色の片目を瞑って見せた。何がしたいのかこちらは理解に苦しむが、フェロックにとってその行為がいと艶なまめかしく、魅力的に映った。

人間で例えるとするならば、年端も行かぬ娘が、スカートの裾を少し捲り上げて自身の大腿を見せることと同じ……ではないかもしれないが、そんな感じであろう。

先程のは立派な技で、如何なる異性でも効く、メロメロという技だ。

オスなら青、メスなら白　スペクトルは髭の色で性別を判断した。

「おかあちゃん、あのキノコさんキレイだね……」

「?! ジェクトどうしたの一体……!」

白い空間にまで被害(?)が及び、幼いというのに、ジェクトも技にハマってしまった。そして技だということに気付いていないその母親は、息子の趣味に不安を抱いたという。

(な、何だろう……この気持ち……倒さなきゃって思うのに、相手を攻撃する気になれない……できないよ……)

外見の割に初^{つひ}な彼は質の悪いことに、彼女に惹かれてる気持ちすら分かっていない。気持ちはどうあれ、こうなれば、相手の手玉に取られ放題である。

「気に入ってくれたみたいね。彼女も喜んでるわ。お礼してあげなさい、切り裂く!」

パラセクトは自分の膚となったギャラドスの鱗を切り裂いた。奴隷解放はいつになることであろうか……

ギャラドスからして、パラセクトの切り裂くのダメージなんて微々たるものではあるが、こちらは中々攻撃できないのだ。このままでは蓄積ダメージで負けてしまう。

(頭では分かっているのに……何で?!)

フェロックは噛み付くことも疎か、水流すら彼女に向けることができない。

「勝負にならないわね……退屈だわ。クロスポイズン！」

スペクトルはそう言いながらもパラセクトに攻撃ワザを仕掛けた。この時、フェロックは反射的に彼女から目を背けてしまったが、背けた途端に彼女に対する訳の分からない感情が薄れた。

（もしかしたら、相手を見ちゃうからいけないのかな？ それなら……！）

フェロックは上を向いて冷凍ビームを放った。すぐ上方にあった樹の葉が、あっと言う間に全て凍り付き、氷柱が作られた。

「……？ 何をする気なのかしら」

スペクトルは訝いぶかしがった。自棄まげでも起こしたのかしらとも思っている。

「これでよし……と！ ねえ、ステキな君に僕からもプレゼントがあるんだけど、ちょっと来て！」

技に掛かったと信じて疑わなかった……実際に掛かってはいたのだが、単純に“いいモノ”をくれると思っていたパラセクトは罠とも知らずフェロックの元に近寄った。

「足元には気を付けて ね！！」

その瞬間、彼女の目の前に地面から巨大な岩の刃が飛び出した。彼女は驚き、岩 ストーンエッジの勢いに押されてひっくり返った。彼は、このワザで彼女を“傷つける”つもりはなかった。ただ、この反応を狙っていたのだ。

「今だっ！」

フェロツクは凍らせた葉のある樹の幹を尻尾で渾身の力を以て叩いた。すると、大きくぶらさがっていた氷柱が丁度真下にいる、無防備な腹を晒して藻掻いている彼女を襲った。直接攻撃するのがはばか憚られるなら、彼は間接的に攻撃することを選んだようだ。

氷柱は腹に直撃、効果は抜群で、更に足をばたつかせる彼女。滑稽ではあるが、向こうはそれどころではないだろう。

「そんな姿の君なんてもう何とも思わないよ！ ごめんねっ！！」

みつともない姿を見て冷めたフェロツクは、断ってから、最初攻撃できなかった悔しさも上乗せて止めのアクアテールを打った。パラセクトは樹に体をぶつけ、そのまま死んだように動かなくなってしまった。

「……あれ、いつのまにフェロツクおにいちゃんがかつたの？」

「ジエクト、見ていたんじゃないの？」

「んつと、キノコさんがメロメロのわざをやったところから、なんかぼく、ぼうつとなっちゃって……」

「あれはワザ……？ 良かった……」

「？」

ワザと知ってソフィーは安堵した。

「将来はいいお嫁さんを見つけてなさいね」

「?? へんなおかあちゃん……」

フェロックもまた安堵していた。倒したことによってあの気持ちが消えたのだ。ワザだと最後まで気付かなかった彼の体は白い空間へ送られた。

しかし、何故幼い子供が技と見破れて、彼が見破られないのだろうか……

28話 vs スペクトル（フェロックの場合）（後書き）

まさかのメモロ。

どんなパラセクトの使い方してんですか、スペクトルさん。

なお、ストーンエッジはアニメと違って、岩の杭が地面から飛び出るといって設定でいれます。

29話 vs スペクトル（サルコの場合）

Circumstance of Sarcomere（サルコの場合）

ロズレイドはサルコにとって、戦い易い相手であった。四天王の時ではいつも相手になり、何度も倒してきた。

今彼は樹から樹へ移りながら間合いをとっている。この身の熟しこなは流石猿であろう。

「……チヨロチヨロとされるのは嫌いな。ロズレイド、相手の動きを止めなさい！」

スペクトルのそんな命令を受けたロズレイドは薄紫のオーラのようなものを発した。すると、サルコの体は自らの意思とは裏腹に、機敏であった体は言う事を聞かなくなって樹から落ちてしまった。

「いてっ！ い、今のは何だ?!」

「落ちればこっちのものね。へドロ爆弾よ!」

「つと!」

サルコは勿論地上でも身軽であり、へドロ爆弾を躲した。スペクトルは溜息を吐き、ロズレイドに次の指令を出す。

「草笛よ」

ロズレイドは、そこら辺の草を使い、それは綺麗な旋律を奏でた。

空間内はコンサート会場のように旋律が反射し、それが余計に彼の眠気を誘った。

更に悪い事に、サルコは碌に寝ていない。彼は必死に耳を押さえて耐えていた。彼の心境は最早雪山である。

「手、邪魔よ。退かせなさい」

ロズレイドは又オーラを発し、彼の手を耳から離させた。

「っ?! ま……また……か……よ……」

暫く耐えていたが、とうとう彼は^{まぶた}瞼の重圧に屈し、催眠状態に陥ってしまった。

「おとうちゃん! ねちゃダメだよ! おきて!」

「あなた……お願い……!」

隔絶された白い空間からの家族の声は虚しくも届かず、依然として彼は眠ったままだ。

「状態異常様々ね。余程疲れていたのかしら? 可愛い寝顔なこと」

この戦いで眠るということは、即ち敗北を味わうということである。自分から「捕まえて下さい」と言っているようなもので、非常にシビアな状況だ。

「このまま捕まえても物足りないわね……いつそ倒してしまおうかしら。ロズレイド、神通力よ!」

このロズレイドは遺伝子操作で、敷衍フエンして言うところタマゴ技だが、神通力を生まれつき覚えている。猿を樹から落としたのも、手を不自由にさせたのも、その技の所為である。ただ、この技は多大な集中力があるので、ちょっとでも気が逸れると技は失敗してしまう。

ロズレイドはサルコを宙に浮かせ、地面に叩き付けた。彼は痛みで一瞬目を覚めますが、間髪入れずに睡魔の襲来で再び眠ってしまっている。

「続いて、ヘドロ爆弾！」

ロズレイドは黒みがかった紫色をした粘性のある球体を彼に向かって発射した。

前後不覚の彼は避けられる筈も無く、容赦ないそれを被弾した。

さほど防御力の無い彼は、このまま体力が削られると非常に危険である。

サルコは纏わりついたヘドロの所為か気分悪そうに、しかし、こんな状態になっても眠っている。だが、突如彼の頭の炎が勢い良く燃え出した。彼が置かれた条件により、潜在している能力……つまり特性の“猛火”が発動したのである。

彼の身長程にまで手を伸ばした炎は彼の尻尾を焦がす。

「うあちっ!!」

何と言う事か、今まで叩き付けられても爆弾を浴びても覚まさないかった目が今、一瞬で覚めた。

「あ、熱かった……前世（モウカザル時代）の記憶が呼び戻されたかと思っただぜ……」

尻尾に息を吹き掛けて冷ましている彼を見て、スペクトルは舌打ちした。もう少しで捕まる筈だった眠れる猿が起きてしまった。自分が油断したことにも腹を立てているようであった。

(う……体が……やばいな……猛火が発動したってことは、もうすぐやられるってことか……)

「……でも、目を覚ましてもう遅いわ。ロズレイド、神通力！」

ロズレイドは精神を集中し始めた。

(！　そうか、あの時は神通　邪魔してやる！)

サルコは増幅した頭の炎を振り乱した。
すると、火の粉があらゆる方に飛び散り、草に引火。セイカリヨウケン星火燎原の文字通り、一気に燃え広がった。

それに動揺したロズレイドはワザが出せなかった。それどころか逃げ場を失い周章狼狽、右往左往、自分に引火しないように必死だった。しかし、とうとう炎に捕まってしまい、ロズレイドは火達磨になってもがいていた。

「落ち着きなさい！　ロズレイ　?!」

どうにかロズレイドを落ち着かせようとしたスペクトルだったが、彼女も落ち着いてはられない状況になってしまった。白衣に炎が移り、彼女の脛すねまで火の手が上がった。

「……………つ!!」

スペクトルは慌てて白衣の燃えている部分を千切り捨てた。そこからもまた草に引火し、フィールドは既に手の付けられない状態になっていた。

「自分の有利なフィールドにした筈が、皮肉なもんだな……」

自ら作り出した業火を周りに侍らせ、サルコは口端を上げた。普通ならえらいことで、こんな荒々しいことはとてもじゃないができないのだが、ここは作り出された仮想空間。何をしてもそれは仮想の中でしかないのだ。

熱と煙の灼熱地獄と化したフィールドは完全に彼の味方だった。

彼は息を吸い込み、最後の放火、1人と1匹に更に瀬越しをかけた。炎はロズレイドの体を更に包み込んだ。特性のお陰と相性で4倍以上の威力を生んだ火炎放射は一頻り燃えた後、鎮火した。

もうどちらが勝ったなど分かったようなものである。

ロズレイドは綺麗であった体を焦げと煤すすだらけにして倒れていた。

彼女の分身が消えて勝ったのはいいのだが、実はサルコ自身もやばい。ここは火事場同然。煙の所為で空気が悪く噎むせ返り、尚且つ相手から有難く授かった多大なダメージが相重なり、立っているのがやっとである。

それでも何とか耐え、彼は無事(?) 家族の元へと戻ることができた。

29話 vs スペクトル（サルコの場合）（後書き）

スペクトル編終わりました。やっとこさ手直しが少なくなってきました……が、まだまだですねorz 戦闘がどうしても詰まりがちです。とりあえず、スペクトルさん、油断しすぎですな。

30話 強奪脱力ヨスガシティ (前書き)

今度は黒天使さんのところのリリスちゃんからオボンの実を貰いましたー

……誰もいない。食べるのなら今のうち

サル「懲りてねえようだな……」

ひいいい、ごめんなs インファイト

オボンの実は作者を除くみんなで美味しくいただきました
ありがとうございます^^

30話 強奪脱力ヨスガシテイ

白い空間から現実の世界へ戻り、彼らは勝利をものにした。

「……も、申し訳ありませんでした……カイドウ様っ……！」

上辺だけの謝罪ではなく、心からの謝罪だろう、スペクトルはうつすらと目に涙を溜めて地面に倒れた。

「よーっぱどここの白衣のグラマーネエちゃん、その“カイドウさま”って野郎に忠誠誓ってたんだな。泣いてやがんぜ……」

スタールはスペクトルを一瞥した。そして彼が引き千切った彼女のポーチに目を留める。まだ木の実は溢れるほど沢山ある。

「これは貰っておくぜい」

彼女への憐れみどころか、スタールは彼女のポーチを銜くわえて自分の物にした。憐れみを彼に期待するだけ無駄である。

「えっ……そ、それって盗みではないんですか……？」

スタールの意外な行動に、ソフィーはまさかと思いつつもその口を開いた。

彼はあつけらかなとした表情で『そうだぜ』と頷いた。

「そんなはつきり……盗みだなんて……」

「何言つてんでい。嬢ちゃん、そんな真面目じゃ世の中渡っていけねえぜ？ 俺様達やもつと飛んでもねえモンこいつらに盗まれてんだぜ。それに較べちゃ、まだ可愛いじゃねえか！ これがありゃ、木の实貯めて歩けるしよ。利用できそうなものはとことん利用しまくるつや……お、石板もあつたぜ！」

彼はポーチから石板を取り出してみせた。

「そうだよ！ ソフィーさん、スタールの言うとおり、利用できるなら利用しなきゃ生き残れないし、2人を助けられないよ！」

「おかあちゃん、ぼくもそうおもつよ」

「ジエクトまで……」

意見で孤立したソフィーはそれでいいのかと思い、夫に訊く為振り向こうとした時、彼女の背後でドサリという音がした。

「あ、あなた?!」

「おとうちゃん!」

仮想と言つても空間だけ。負つたダメージ、疲労感にはつきり引き継がれている。戦闘後では気丈にも大丈夫だと言い張っていたサルコだが、相手に勝った安心感もあつてか、気を失ってしまった。相変わらずヘドロは纏っているし、しかも酸欠気味で、体の至る所に打ち身の痕がある。立っていただけでも大したものであろう。

「ヤレヤレ……サル公まで倒れちまって、しょうがねえなア……海

蛇、こいつ持ってけ」

スタイルはフェロックにサルコを乗っけるよう促した。

「あ……う、うん！ でも、サルコ大丈夫かな？」

「大丈夫だったの。こんで死んだら悲劇つつうより喜劇だぜ……嫌ちゃんとボウズ、こいつは心配には及ばねえからな。ポケセンにぶちこんどきゃ、じきに起きるさ。珍しいことでも何でもねえしよ」

「そうであればいいんですけど……」

「俺様の言う事は絶対エだぜ？ モタモタせずに行くぞ！」

やがて一行はヨスガに到着し、ポケセンセンターに行く者、町にいるポケモンを守る為に悪い人間を排除するという者に分かれた。因みにポケモンセンターにまで人間が屯たむろしていたが、スタイル、フェロックの威嚇コンビが奴らをすべて追い出した。そして、直ぐにその2匹はポケモンの集まりそうな所を中心に外へ繰り出た。センターに残ったのはソフィーとジエクトとサルコ。ソフィーは人間が入ってこないように正面扉に鍵を掛け、センターの備品を使って夫と子の手当てをした。

2時間程経ったであろうか、サルコが意識を取り戻した。ヘドロで汚れた毛は綺麗に拭き取られて元の白毛に戻り、少し焼かれた尻尾の先端には丁寧に包帯が巻かれていた。

「あなた……！ 気分はどう？」

「ん……ああ俺、気絶したのか」

ペチ と額を叩いて眩く彼の傍らには心配そうに覗き込む妻と、怪我の手当てをしてもらった息子の姿があった。彼の足にはサルコの尻尾と同じく、包帯が巻かれていた。

「おとうちゃん、きゅうにたおれちゃうから、ビックリしたよ！」

「ごめんな、2人共……もう完全に大丈夫だから。ジェクトは足、どうなんだ？」

「てあて してもらってからだいぶラクになったよ！」

ジェクトは足を軽く振ってにつこりと笑った。それでも庇っているようだが、このまま順調にいけば早く治りそうである。

「そうか、良かった。ありがとうな、ソフィー。お前に手当てしてもらって……」

「いえ、当然のですから……」

一瞬和やかな空気が流れたが、それは聞き慣れた声とともに破られた。

「おい、一家団欒ムードのどこ悪いが、サル公！ 復活したんなら、ふれあい広場へ行ってくれい！ 多分チビ餓鬼共が危ねえ！」

俺様はコンテスト会場で手一杯だ！ 今海蛇が向こう行ってるから、助太刀してやってくれ！」

2階から忍び込んだのであろう、スタールがなだれこむように乱入。人手（？）が足りないということで、サルコに増援を頼んだ。

「分かった、すぐ行く！」

「頼んだぜ！」

スタールは空気を壊すだけ壊しておいて、忙しないままコンテスト会場へと戻っていった。

「ところで、何で俺が起きた事知ってるんだろ？ まあいいか。じゃあ行ってくるな！」

「あなた、まだ休んでいた方が……」

行く気満々で準備体操をしている夫を、妻は心配した。今さっき倒れたので、それは誰でも心配するというもの。妻であれば尚更である。

そんな妻の心配を払拭するかのように、サルコは彼女の頭に手をやった。

「ん、俺ならもう十分大丈夫だ。それに、こうしている間にも捕まりそうなポケモンがいるんだ、行かずにはいられないさ！ ソフィーとジエクトはここで待っている。直ぐに戻るから！」

早口でそう言い、彼は裏口から外へ飛び出して行った。

30話 強奪脱力ヨスガシティ (後書き)

またタイトルをふざけてしまったorz
思いつかないとおふざけにはしてしまっ；

しかし、おっさん。盗みを正当化してはいけませんな。

31話 黄色いイナズマ少女 (前書き)

ちよいとゲストポケモンを出してみました。

31話 黄色いイナズマ少女

サルコが向かったのはふれあい広場。普段ならば可愛いポケモン達がトレーナーと一緒に仲良く散歩をしたりする場所である。都会の中だが自然も豊富で空気が新鮮。まさに憩いの場だが、今ではただの人間達の溜まり場に凋落していた。

サルコは苦々しく思いながらも、そいつらを排除するために尻尾を振り回している仲間の元へ行った。

「サルコ！ 大丈夫？」

「ああ！ 完全復活だ！ ここはどんな状況だ？」

「今僕が人間達をどうにかしているんだけど……数が多くて困ってるんだ」

「ふれあい広場のポケモン達は？」

「玉が無いから混乱してて、言う事きいてくれないよ……捕まっちゃった子は僕が助けたけど、直ぐに他の人間に捕まえられて……」

「鼯ごっこ鼠ごっこって感じか……フェロックは捕まえられそうにはなかったのか？」

「ううん。僕のが怖いみたいで、誰も近寄らないよ。僕自身も人間が怖いから、ちよっとだけ悪の波動出してるし」

確かにフェロックの周りには濃い紫の波動が漂っている。それに

気づいたサルコも意味なく毛が弥立った。

「だ、だろうな……取り敢えず人間をどうにかしよう！」

「空から見たスタールが教えてくれたんだけど、人間はもうこれ以上来なかったって。人間ごとに地域が区分されてるみたいだよ」

「そうか、それは丁度いい！」

そう会話しながらも、体の方は戦っている。かといつてもポケモンと生身の人間だ。赤子の手を捻るが如く彼らは彼らを倒していった。しかし相手は数多、単体攻撃が多数を占める彼らは段々と数に対処しきれず、バテてきた。

「うつつ、結構いるね……尻尾が疲れてきちゃった……」

「幾らなんでも多すぎるなっ……！」

そこで2匹はふれあい広場の中で協力してくれるポケモンを探した。しかし、混乱はどうかできるものの、果たして戦力になるのはいるのかと彼らは思った。見渡せば“可愛い”ポケモンばかり。2匹が浮きまくっている。それでも彼らは探した。とどのつまり、混乱してクルクルとその場で回り狂っているポケモンで妥協する形となった。黄色い体に、切り込みの入ったギザギザ尻尾、ほっぺたは赤く塗られている。彼らは近くで伸びている人間から小玉を奪ってそのポケモン　ピカチュウに掛けた。

「うおおー、せかいがきゆうにもどったぞ……って、おまえだれだ！」

メスで、しかも幼いのに随分な口調である。この際贅沢は言っ
られないが。

「解けたとこ悪いけど、ここの人間をどうにかするの手伝ってく
れないか？」

「コロすのか？」

ひどく純粹無垢な目で、このピカチュウは物騒な言葉を吐いた。
その瞳はヒツキを彷彿とさせる。

「い、いや、殺すのは流石にマズイから気絶程度で……」

「なんか き がのらないぞ……」

ピカチュウは急にぐてつとして生気を失くした。殺さないと聞い
てこのやる気のなさは未恐ろしい気もする。サルコは内心「このガ
キ……！」と思ったが、そこは何とか理性で封じ込めた。

「ねえ、お願い！ 君が思っている以上に大変なことになっている
んだ！」

フェロツクからも頼み込む。それではかえって怯えてしまって逆
効果かと思いきや、このピカチュウはフェロツクを見て顔付きが変
わった。それは興味が湧いた時の顔とも言えようか、じっと彼を見
ている。

「おい、フェロツク。知り合いか？ じっとお前のこと見てるぞ」

「知らないよ！ 電気ポケモンは怖いから……知り合いなんていな

「ふ」

「いいぞ、きょうりよくするぞ」

「「えっ?!」「」

変わり身の早い彼女に、彼らは素頓狂な声を上げる。

「あいつらをぜんぶぎせつさせればいいんだな?」

「そうだけど、何でまた急に?」

「こまかいことはきにするな!」

「ねえ君、名前あるの?」

「ライか? ライはライだぞ! おまえ、ギャラドスだったららんぼうなことばつかえよ!」

いつの間にかライというピカチュウは、フェロツクの頭の上に登って彼の頭をぺしぺしと叩いていた。恐れを知らないというか、肝が座っているというか、少なくとも彼女がただのピカチュウでないことは確かである。

「そういうのニガテで……」

ライがそんな態度なものだから、フェロツクはすっかり萎縮してしまった。世にも奇妙な画である。

「ま、いいか。いくぞ! おまえらあ〜!」

フェロツクの胴体を滑り台のように滑り降り、ライは人間達に突っ込んでいった。会って数分で、既に彼女が主導権を握っていた。しかしこの助っ人、口は立派だが果たして戦いの腕はどうだろうか。

電気を溜め始めた彼女の首には、予め彼女の首に掛かっていた、小玉以外の玉が光っていた。

やがて彼女は溜めた電気を一気に解き放った。

「うりゃあ〜!!」

カツと辺りが見えなくなる位の光が走ると、その光は地に向かって咆^ほえ、響き震えた。凄まじい疾雷である。これで数十人は倒れた。この山椒は小粒でもピリリどころか、炎を吹く程辛い。

「……………すげえ……………」

サルコは息を飲んだ。こちらが戦力外通告受けそうである。

既に受けて当然の者もいるが。サルコの頭上から水滴が降ってきた。雨かと思つて上を見れば、ギャラドスが普通に泣いている。

「……………だから泣くな!!」

「だ……………だつてだつて、あんなスゴいか、か、雷見た事無いもん！
! あんなのをもし食らつたかと思つと……………」

「なんだ？ ヘタレだな〜！ ギャラドスならもつとしゃんとしろ
お〜!!」

まず一仕事して帰って来たライは、巨体を小さく畳んでサルコの

陰に隠れているフェロックを叱咤した。

「サルコー、この子怖いよおー!」

「俺に言われても……おつと……よっ!」

サルコは隙を付いたつもりで寄ってきた人間を手刀で仕留めた。

数分して、人の動く気配は消えた。広場は先ず安全圏となりえたのだ。

「ふへえ〜つかれたぞ……」

「結局ライが殆ど倒したな」

「まったくだぞ! やくたたずだな、おまえら〜!」

言われた事無い言葉に少しカチンときたサルコだが、どうしても彼女の強さが気になった。

「なあ、お前、何でそんなに強いんだ?」

「ん? かあちゃんのかたみのでんきだまのおかげだぞ」

そう言いライは誇らしげに電気玉を見せた。その中心部には絶えず電気が走っていた。それは青白かったり黄色かったりして、ぶつ

かり合っては消えたりを繰り返している。

「へえ、噂には聞いてたけど、これが……」

「ところで、どうなってるんだ？ いきなりコウリン……あ、いまのはライのトレーナーのなまえだぞ。そいつはきえるし、せかいはゆがむし……」

サルコ達は自分の分かっている範囲で、全てを彼女に話した。

「ふうん……たいへんだな、おまえ」

「けれど俺達が何とかしなきゃ、世界がどうなるか分からないんだ！ 仲間も、俺達のトレーナーも取り戻したいし……」

「よし、ライにもなにかできることないか？ライはおまえらがきにいったぞ！」

「そうだな……ヨスガのポケモンを守ってくれないか？ いずれ奴等は目を覚ます……何時になるか分からないけど、奴等が諦めるまで粘っててくれ！」

「ライひとりですか？」

「うっ……と、そうだな……」

ヨスガは広い。彼女の小さな体では限界がある。どうしたらいいのか、サルコは腕を組んで考え込んでしまった。こんな時によい案が浮かばない。

「ここにいるポケモンのリーダーになって、みんなに自分の身は自分で守るように教えたら？ そんなに強いんだもん、みんなのお手本になれるよ！」

意外なポケモンが知恵を貸した。フェロロックがそう提案すると、サルコは手を叩いて彼を指差した。

「、それだ！ 全員に小玉を渡して、バトルの指南をしてくれ！ このくらいいるなら十分だろ？」

「わかったぞ！ライがんばるぞ！」

「よし、決定！」

「でもここ、たくさんたてものあって、そこにもニンゲンがいるかもしれないからたいへんだな。コンテストかいじょうに、だいきクラブに、ポフィンつくるところに……あとポケモンセンターとか」

「ポケモンセンター……。っ！」

ライの何気ない一言が、サルコを動揺させる。ポケモンセンターその単語に彼は青くなった。

「あれ、サルコ顔色悪いよ？」

「ソフィー、ジエクトー！」

「サルコ?!」

センターの中には妻子がいる。

其れ即ちどういふことか、容易に想像できてしまう。思えば、あれから随分と経ってしまったている。

サルコは過去の自分の行動に対して^{ジクシ}忸怩と苛責の念を共に抱きつ
星行電征、センターへと直行した。彼は必死に自分を落ち着けよう
とした。鍵も掛けてあるし、人間がポケモンセンターに侵入してく
る確率は100%ではない、もし裏から入ってきててもジエクトが何
とかしてくれる等と暗示をかけていたが、侵入してくる確率は0%
でもない、ジエクトは今怪我^{ヒタズラ}していて戦えない等と、命題の逆の思
考も湧き上がり、彼は只管に祈りながら走ることしか出来なかった。

31話 黄色いイナズマ少女 (後書き)

このライは、弟のルビーのデータのピカチュウから貰ってきました。本当に電気玉を持っていて、ボルテッカーまで覚えている子なんです。

ちゃんと弟に使用許可は貰いましたよw

32話 罪の意識 (前書き)

ちよつと流血描写あり。苦手な方は注意です。

32話 罪の意識

「おとうちゃんおそいね」

「そうね、大丈夫かしら……」

母子はじつと主人の帰りを待っていた。もしかして　という考えを打ち消しながら、その場から動かないでいた。

すると彼女たちの背後から誰かが入る音がした。2匹は安堵の表情で振り返る。しかし、その音の主は彼女たちの望んだ者ではなかった。

「……っ……！」

「アブソルの親子発見！　直ちに捕獲する！」

2匹は隠れる間も無く、裏口から侵入した人間に見つかってしまった。

「おかあちゃん、こんなやつぼくが……　ついたっ……！」

ジエクトは攻撃しようとした途端、足が痛み出した。彼の足はまだ戦うには早かったのだ。これではとても戦える状態ではない。そんなことも構いなしに、人間は壁際まで彼女達を追い詰めて行く。

「何も怖くないから、大人しくこれに……　捕まれ！！」

遂に人間はボールを投げた。至近距離から、まずソフィー目掛け

て飛んできた。彼女は思わず目を閉じ、面を伏せる。だがいつまで経っても捕まえられた心地がしない。恐る恐る目を開け、面を上げると彼女の目の前には、蠢き、やがて止まったボールがそして近くにいた息子の姿がない。

彼女は何が起こったのか直ぐに分かった。

彼、ジエクトは足の怪我にも拘らず、自分を庇^{かかわ}って人間に捕まってしまったのだと

「チツ、子供が邪魔したか……ま、いいか。ここらではアブソル自体珍しいもんな」

この時、ソフィーの中で何かが切れた。それはマリオネットのように彼女を操っていた理性という糸と言えば妥当かもしれない。意識下に眠らされていた新しい操り主、換言すれば本能が彼女をつき動かした。

「う……う……あああああ……あーっ！っ！」

ザシユリ と布の裂ける音と舞う鮮やかな赤色 ソフィーは立ち上がり人間の片腕を鋭い爪で切り裂いた。戦ったことのない彼女といえど、彼女はアブソルだ。悪タイプの中でも、攻撃力に秀でた戦士である。

無我夢中な彼女、更に彼の肩を頭の鎌で切りつけた。ボールを思わず落としても気付かないどころか、肩を切り落とされんばかりの激痛だった。

「ぐああっ！ ……獣ごときが、舐めるなア！！」

激昂した彼、ソフィーの首を掴み床に転ばせた。

「こうなればいつそこいつを……」

この後の台詞は決して省略した訳ではない。言えなかった。

「貴様は何をしてんだああー！！」

入り口から中の様子を見た瞬間にドアを蹴破り、飛び込んできたポケモンの掌拳によって奴は倒されたのだ。

「ソフィー！！　しっかりしろ！」

そのポケモン、サルコは倒されていたソフィーの体を起こし、支えた。

「あ……あなた……ジエクトが、ジエクトが……」

彼女は力無く延長線上にあるボールを指差した。

「ジエクト……！！　こん中なのか?!!」

サルコはボールを叩き割る。

そうしてボールは上下真つ二つに割れて中身が出てきた。

「びつくりしたあー……あ、おとうちゃんおかえり！」

「ジエクト！　お前捕まえられちゃ駄目だろ！　……遅れてごめんな……!!」

サルコは、ジエクトに怖い思いをさせてしまったことを謝り、力一杯彼を抱き締めた。

「おとうちゃんくるしい……ぼくならだいじょうぶだから」

「……でもよくやったな。お前がお母さんを守ってやったんだろ？」

「うん。でも、ボールでつかまえられたのはじめてだったから、ちよっとだけたのしかった！」

サルコは思い掛けない我が子の呑気な感想に苦笑しつつ、妻の様子がおかしいことに気付く。華奢な体は小刻みに震え、焦点は目の前の倒れている男と、血の滴った床に定まっているばかりであり、まるで両手を失ったように呆然としていた。

「……私が……傷つけてしまった……人間を……」

「ソフィー？」

「おかあちゃん、どうしたの？」

ソフィーは人間やポケモンを傷つけるという行為を生まれてこのかた一度もしていない。してはいけないと自分をコントロールしていた。正当防衛とはいえ、それも彼女は許しがたい罪咎に及ぶと思っっている。

これ以上自分の粗相の痕跡を見るのに耐え切れなくなった彼女はセンターから走り去るように出て行ってしまった。

突然彼女が駆け出したので進行方向にいたサルコは弾き飛ばされてしまった。

「おい、何処行くんだ！」

すぐに追いつき止めようとしたが、平生の彼女からは考えられない程の力で振り切られ、ソフィーは暮れ泥む都市の中へ溶け込んでいった。

「ソフィー……！」

33話 原罪と贖罪

「おとうちゃん。おかあちゃんは？」

ヒヨコヒヨコと後を付け、歩きながらジェクトは父親に問う。

「分からない……兎に角捜さないで、ここ一帯は危険だ！」

サルコはジェクトを抱いて皆のいるところへ向かった。

「はあっ?! お前えのカミさんがいなくなっただとあ?!」

ちょうど彼らは片付いたコンテスト会場にいて休憩しているところだった。そこへソフィー失踪の知らせが入ったものだから、休憩どころではない。スタールは、俯くサルコに詰め寄った。

「……ああ。急に表情が強張りだして……」

「それ本当なの？」

「だれかいなくなったのかあ？」

フェロックと、そしてライも、話すごとに表情が険しくなっていくサルコに顔を近付けた。

「はあゝあ……そんなときゃ手前がいたんだろ？ 何でそんなことになっただよ！」

「俺だってよく分からないんだ！ ……だから、捜さないで」

「早く見付けねえと、まだ大通りには人間サマが御座そうじてるぞ。消えちまったのは仕方ねえ、俺様は空から見てみるぜ」

「僕も広場とか捜してみるよ！」

「ライもフェロックとさがすぞ！」

いつの間にか意気投合した2匹。一見して奇妙な取り合わせである。

「海蛇の足引つ張んなよ、ネズ公」

「オンナノコにむかってネズこうとはなんだ！ リーゼントオヤジのくせに！」

「っだと手前えっ！！ 口の利き方も知らねえのか！？」

売り言葉に買い言葉。スタールとライは睨み合っている。他人との衝突が多い者同士、ある意味気が合いそうである。

「こんな時に止めるって……！！」

と言っておきながら、ライの発言を思い出した直後サルコは失笑し、顔を背けて肩を震わせた。

「手前もこんな時に下らねえツボに嵌ってんじゃねええ！！ ヨメさん捜すんだろ？！ 俺様は先捜すぞ！」

サルコにまで馬鹿にされたような心地がしたスタールは機嫌を損ね、翼を広げてさっさと飛んでいってしまった。

「なんだ？ あのオヤジ、レイギっていうのがなくなってないな」

それは彼に限った事ではないが。

「ライたちもいくぞ！ フェロック、のせる！」

「うん！ ……ね、サルコ。ソフィーさん見つかるといいね」

「絶対見つける。見つかったら必ず知らせろ」

「了解！ 行ってくるね」

サルコモジエクトを抱き抱え建物を中心に風潰しに彼女を捜したが、何処を捜しても妻の姿が見当たらない。あるのは行く手を阻む人間ばかりである。それでも道々行くと倒された人間がいた。恐らく彼女が薙ぎ倒していった跡だと彼は直感で思った。

町はもう夜の帳に包まれ、ジエクトは父親の腕の中ですやすやと寝息を立てている。サルコは人間で作り出された道標を辿っていき、やがて行きついた先は他の所とは違った、異国のような雰囲気を漂わせる建物だった。

中に入ってみると厳かな雰囲気を肌を感じる。不思議とここには人間が寄り付いていない。正面にはステンドグラスがあしらわれていて中央には山のようなものが描かれた絵画が。

ふとサルコは歎歎キキヨの声を耳にし、目を移すと長椅子の上に横たわるソフィーがいた。

「ソフィー！ こんなところにいたのか……急にいなくなって、一体どうしたんだ？」

彼女は答えない。単一的に声を押し殺して泣くのみであった。

「……人間を傷つけたって言ってたよな？その事を気にして……」

ソフィーはそこまで言われると、ようやく重い頭を縦にゆっくりと振った。その際にぼたりと雫が垂れ、椅子に小さなしみを作った。

「……もつと他の方法があったかもしれないのに……選りによって私、暴力で解決するなんて……」

涙声でぼつりぼつりとソフィーは話し始める。その間でも、彼女のルビー色の瞳からは大粒の涙が零れ落ち続けている。

「……私は全ての罪を背負って生まれてきてしまったのだわ……」

彼女の欠点は一度落ち込むと極限まで自分を追い詰めることである。故に関係ない罪の意識を全て抱え込んで潰れてしまう。

「……なあ、俺達が何で戦うか知っているか？」

「……え？」

夫からの突然の質問に、ソフィーは首を擡げてサルコの方へ傾けた。

「「こつこつと言うのも慣れていないし、照れ臭いけどさ、ただ俺達は守るべき者を守る為 それだけのことなんだ。中にはそうでもないものもあるけど、お前の場合は違った。さっきはジェクトが捕まったからソフィー、お前は身を挺して守ったんだろ？ 母親とし

て立派じゃないか！ それと同じことで、大切な相手を悲しませない為に戦う……そう考えれば、戦うことは決して不毛な物でもないんだ。全ての罪……って言ったよな。そんなもの、例えば天を敵に回してしまったとしても、俺が全部被ってやるから」

サルコはソフィーを自分の元へ抱き寄せ彼女の頭を撫でた。それを合図に、これまで極力抑圧された感情が今以上堰を切ったように押し寄せ、彼女は声を限りに泣いた。そんな彼女を彼はいつまでも撫でていた。

次第に泣き声はしゃっくり混じりに小さくなった。

「もう大丈夫か？」

「ええ……ごめんなさい。あなたの毛を濡らしてしまって……」

「気にするなよ。ところでさ、凄いなここ。身が引き締まるというか、洗われるというか……」

サルコは天井を見上げた。静寂と共に何かが降り立つような気がして、しばらくそこを見つめていた。

「走っている内に自然と体がここに行き着いたんです。不思議ですね……」

「前にヒヅキがここに来た事があったんだ。でもあいつ、つまらないとか言っただけ出たからよく見てなかったんだけど、じっくり見て見ると落ち着いてくるな」

サルコは深呼吸をして、探し回って疲れた体に、その神聖な空気を取り入れた。そうすると何となく霊験を感じるから不思議である。

「あなたご存知ですか？　ここは共に生きると誓った男女が契りを交わす所でもあるんですよ」

不意にソフィーはそんな話を振った。何度も夫に目配せをし、彼女の頬はほんのりと紅に染まっている。

「結婚式か……人間はこんないい所で結ばれるのかー。羨ましいな」
「あの、私達も……誓いましょう。こんな時世に不謹慎ではあるけれど……折角だもの」

やや遠慮がちに、サルコの顔を窺いながら、ソフィーは先程から言いたかったことを彼に伝えた。彼は彼女がそんなことを言い出すとは思わず、一瞬きよんとした。

しかし、妻が恥を忍んで切り出したことだ。彼女は安心したいのかもしれない　そう思ったサルコは少し恥ずかしげに、彼女に笑い掛けた。

「そうだな。……思えばそれどころじゃなくて、まだそんなことしたことないしな。ジエクトも寝ているし」

都合の良いことに、ジエクトは只今爆睡中だ。余程疲れていたのだろう。サルコはソフィーの前足を握った。彼女もそれに応じ、握り返す。

「俺は、如何なる時もお前を一生の伴侶であることを認め、護り抜

く事を 誓います」

「私は、如何なる時でもあなたを愛し、支えることを 誓います」

そしてその後、2匹の誓いの儀式は交わされた。ステンドグラスから差し込む月影だけがその2匹の様子を見守っていた。

式が終わると2匹は暫く時間も忘れて話をしていたが、丁度ソフィーが言葉を返したところ、隣りから寝息が聞こえた。半日にしてボロボロになってまでも敵と戦い、あとの半日、町を奔走していたサルコはここで限界が来たようだ。

ソフィーは残念そうな表情を残しながらも慈しみの微笑を投げ掛け、その頬に口の思惑を乗せた。少しして彼女も、彼に寄り掛かり眠りに就いた。

「おやすみなさい……あなた」

彼女のその表情は彼女の生きてきた軌跡の中でも一番良いものであった。

33話 原罪と贖罪 (後書き)

今回は夫が頑張りました。

ところで、あの建物は教会なんですよね？ 普通に教会扱いして
しましたが…… ; ; ;

34話 気持ち新たに (前書き)

タイトルが苦し紛れなのがよく分かりますな

34話 気持ち新たに

夜は月影が、朝は日影が彼らをステンドグラス越しに優しく包み込む。夜も明け、朝の日差しを眩しさを覚ましたサルコは大きく伸びを……したのだが、反り返り過ぎて派手に後ろに転げた。お負けに昨夜、座ったままの不自然な体勢で寝ていたので首が少し痛い。

「いててえ……ん？」

起き上がるうとしたところ、彼は手前にある机の中の奥に少し古びた手帳のようなものを見つけた。

「何だこれ？」

サルコは手帳を机から取り出してそれを眺めた。

どうやら日記のようで、書いてある年から逆算すると、20年以上前のものだった。表紙には”成長日記”と記されている。中を見ると写真付きで、人間の子供の成長日記であった。

「名前は、ウミ……何て読むんだ？この漢字」

「あなた、起きてらしたの？」

サルコが日記と格闘していると、ソフィーが未だとろんとして眠たそうな眼を擦り、起きた。

「お、ソフィー。お早う。いきなりで悪いが、この漢字何て読むか分かるか？」

「この字ですか？……カイ……カイ……ごめんなさい。分かりません。その手帳はどうなされたのです？」

「机の中に放置されてたんだ。本が好きなソフィーなら読めるかなと思って」

「そんな漢字は見た事無いですが、内容なら多分読み取れると思います」

ソフィーは日記を読み始めようとしたが、中は乱筆で、所々掠れて読めない部分もある。それでも彼女は一番始めの日付の日記を読み上げた。

「『今日、ここに赤子が捨ててあった……産まれて間もなき乳飲み子を私は託されたのだろうか、手紙と共に捨ててあった。その子供を抱いてみると、怯えたような表情をしていた気がした。不思議なことに、その子供は紅い目をして、毛髪には黒色に緑が混ざった神秘的な姿をしていた。きつとこの子は神の御子だ。私はそう確信しこの子供を育てることにした』」

それは捨て子の成長日記だった。一文を読み終えたソフィーは、何とも形容しがたい表情をした。

「捨ててあったって……酷いことする人間がいるんだな」

「そうですね……何か事情があったのでしょうか……続きも読める所は読んでみますね」

と、彼女が口を開き続きを読む為声を発しようとした瞬間、『ぐ

ぐうぐう』と建物内の蔽かな雰囲気ぶち壊しの音が響いた。

「……………」

出所はサルコであり、彼はばつが悪そうに頭を掻いた。昨日は朝しか食べていなかったのを彼は思い出す。

「まあ…………ふふつ。続きは後にしましょうね。ひとまず皆さんの所へ戻りましょう」

「あ、ああ…………でもいいのか？勝手に持って行っても」

「そんなに生真面目では、世の中渡っていけませんよ」

ソフィーはそう言い手帳をサルコに渡した。彼女の中で何かが変わった。そんなことを思いつつ、彼はまだ眠っているジェクトを起こした。

「ううん……………」
「……………」
「あれ?! おかあちゃん! モー、シンパイしたよ!」

その割にはぐっすりだったが、彼なりに心配していたのだろう。ジェクトはソフィーに擦り寄って母親の温もりを確かめた。

「ジェクトにまで心配掛けちゃったわね。もうお母さんは大丈夫。逃げたりしないわ」

ソフィーもジェクトに体を寄せた。

「よオ、仲間が必死こいて捜してたつつうのに、密かに朝帰りたあ、いい度胸じゃねえか……」

建物から出ると、上から降る声。ムクホークが異文化の建物の屋根の上で翼を腰に当てていた。

「す、スタール……！ 朝帰……っそんなんじゃねえよ……！」

「嘘だつての。本気にすんな。そこにいたつつうことは分かってたんだよ。サル公が入っていくのを見掛けてな、待てど暮らせど出てこねえから、まあ……何だ。入ってくのも無粋だと思ってよ」

「ラブラブだったんでしょ？ 僕でも分かるよ！」

「よっ！ ふたりともあついでっ！」

一緒にいたフェロックとライは二匹を離立てた。どうやら夜通し彼らもここにいたらしい。

「こ、こら……！ リーダーをからかうんじゃないっ……！」

「……………」

ソフィーは顔を真っ赤にして俯いている。サルコも赤くなって、仲間に抗議した。

「これからどうなるかも分からねえし、今回は大目に見てやる。あと、これやるからとっとと食べや。コンテスト会場で“ケンカ”し

てたら見つけたポフィンだ。飯まだだろ？」

「……ありがとな、色々」と

「なアに、その代わり倍にして返せよ？」

そう言い、スタールは悪戯っぽく笑った。……想像はしにくいが。

「あと、嬢ちゃん。何があつたか知らねえが、1人で抱え込むなよ。いらんもんまで背負つて下を向いちや、皆の顔も見えねえからな」

今度はソフィーに向き合い、彼は笑った。

彼女はそれに微笑み返し、彼に一礼した。そして皆にも迷惑を掛けてしまったことを謝った。

「なんだかんだあつたが、一件落着。暫くして一行はヨスガを発つことにした。」

「じゃあな、ライ。ここの町は任せた」

「おお〜！ まかせてだぞ！」

「ライちゃん……無事でね」

「おまえも、ガンバってこいよ！」

ライと軽く挨拶を交わし、彼らは次の町を目指して出発した。

彼らに神のご加護を　そう祈るかのように太陽は彼らを柔らかな

光で照らした。

35話 夢見る菊

モニターの画面が次々と途切れていく。勿論スペクトルのも砂嵐が続いていた。

「雑魚共めっ！ 貴様らはどうしてそんなに使えない！！」

「カイドウ様、落ち着き給わって下さい……」

「雑用しかできない下僕は黙っている！！」

カイドウに一蹴され、手下は縮こまった。反論するにもできず、ただ彼の顔色しか伺えなかった。

中核六人の内3分の1が倒されたことになり、まだ4人いるものの、彼は内心に巣くう影を拭いきれずにいた。

「あーあ、ひどいこと言っちゃって……部下は大切にしないとけないのになあ……」

「？ カイドウ様が何か言ってたのか……つつつかよく聞こえるな！」

所変わってヒツキの入っている牢屋。彼女は暇が過ぎたのか、カイドウとその手下の会話を盗み聞きしていた。

ヒツキが囚われているところとカイドウのいる場所とは、結構距離がある。にもかかわらず、彼女は一語一句をはつきりと聞き取れていた。

「トレーナーたるもの、耳は良くなkachya! でないと、くさむらにいるポケモンの鳴き声を聞き逃しちゃうもん!」

「へえー、大したものだな。で、何て言ってた?」

「『雑魚共めつ! 貴様らはどうしてそんなに使えない!』」

『海棠様、落ち着き給わって下さい……』

『雑用しかできない下僕は黙っている!!』……だつてサ」

ヒツキは高低の声色を使い分けて事細かに一人芝居で再現してみた。

「うーん、そりゃ確かに酷いな」

「あの人本当に人間? 人を物扱いしたりしてさ!」

「半分人間ではないっていう噂なら聞いた事あるけどな」

「え? それってどういうこと?」

どうやらヒツキの好奇心に火が付いた様子。明るい瞳を更に輝かせて鉄格子に張り付いた。

「だーめーだ! 噂だけでもお前に教える筋合いなんてない!」

「ケチー! 人でなしー! 人がこんなに退屈してるのにい〜! ジンケンジュウリンだあー!」

「駄目つたら駄目だ! 人権蹂躪の意味間違ってるし……ちえつ、何で囚われの身でこんな元気なんだよ……」

監視員を辟易^{ヘキエキ}させたヒツキも、少しすると諦めて大人しく自身が持っていた本を読み始めた。

「……拘りコンボって結構あるんだな……で？ ああ、ここでバトン うあー、やられたな……それから無償降臨……」

ヒツキは何やら呪文のようにぶつぶつと呟き始めた。トレーナー業をしていない者が聞けば、彼女が何を言っているのか分からない。

「身代わりから気合いパンチかぁ……これもやられたし……身代わりって以外と役に立つんだな……竜舞積んでも……なるほど、そこからじたばたで」

「一体何の本読んでるんだ？ こっちにはさっぱり言っていることが全然分からないんだけど」

取り残されたような妙な疎外感と、ヒツキが急に呟きながら大人しくなったことへの些かな恐怖感。溜まらず監視員は彼女にそう訊いた。

「ふんだ、教えてあげないもーん！」

ヒツキは先程のことですっかりお冠である。ぶいと首だけを監視員から逸らした。

だが、監視員も馬鹿ではない。というより、タイトルおっぴろげのヒツキの知恵が少し足りないだけか、彼は彼女が読んでいる本の表紙のタイトルを見た。

「『必勝バトルテクニク集』か……」

「え！ 何で分かったの?! もしかして、あなたエスパー?」

「な訳あるか! 表紙表紙!」

やはり彼女にはどこか抜けている。バトルテクニック以前の問題だと彼は思った。

「そついうのが好きなのか?」

「うん。お父さんが強いトレーナーで、家にこついう本が沢山あるから昔からポケモン関係の本が好きなの……」

お父さんという言葉を言った彼女の瞳に一点の曇りが見えた。

「どうした? 急に元気がなくなったみたいだが」

「ん、ちよつとお父さんのこと思つちやつて……私のお父さんね、私がつつと小さかつた時に旅に出ちやつたの……でもそのまま行方不明で……」

声を詰まらせ彼女は答えた。監視員はしまったという感じで口元を押さえる。

「でも、私決めたんだ! 将来うんと強くなつてジムリーダー……ううん、もつといけるなら四天王になるつてこと! ジムリーダーや四天王になれば、もしかしたらお父さんが挑戦しにきてくれるじやん! ……だから、こんなところで負けてる訳にはいかないよ!」

少し湿つた目尻を拭い、屈託のない笑顔で監視員に将来の夢を語

りかけたヒツキは、彼にとってどんな宝石よりも輝く夢見る原石であった。そして、そんな彼女が羨ましかった。

俺はこんなにも未来に希望を抱いていただろうか、今まで自分らしく生き生きとしていただろうか……いいように使われ、機械的な作業で一日が埋没し、ポケモンにさえ触らせてもらえない。俺はそれで満足なのか……？ 死ぬ時に良い人生だったと笑って逝けるのか？

「あれれ、何で君が泣いちゃうの？」

「なっ……泣いてなんかいない！ 目にゴミが入っただけだ！」

少女がこんなにも希望を持っているのに、自分ときたら 彼はうすら悲しくなって、気付いたら一筋の涙が頬を伝っていた。ばればれな嘘で否定しながらも、自分の感情に彼は十分気付いていた。そして彼女に対する見方が変わったということも。

それによって彼に変化が訪れることになる。

それは 　また後程。

35話 夢見る菊 (後書き)

途中のヒヅキの台詞(拘りコンボ云々)は聞き齧りですが
実際にしたことはありません(されたことはありませんがw)

36話 青竜と黒獅子

生きていた 彼の感想だろう。

辺りは薬の臭いが充満している。そもそもここは何処であろう。地獄とも天国ともつかない、何の変哲もない家である。

少し古風な家だった。身じろぎをすると、木の床がギシリと軋むのが聞こえる。

自分が腰を落ち着けているのはふつくらとした座布団、自分の身を包んでいるのはしっとりとした毛布。座布団に顔を埋めると、人間臭い。

毒 彼はその存在に気づいたが、もう苦しくなく、ほんのりと口の中が甘い。怪我は 知らぬ間に包帯が巻かれていた。

彼は、死んだと自分で確信していた。のに、生きている。

勿論彼はどこでどう生き残ったかは知らない。

確かにになっていくあらゆる感覚に、そして自分の運の強さに、グランは溜め息を吐いた。

「もう起きて大丈夫かい？」

「……………!!」

すると、優しいな声と共に彼の目の前に不意に現れた青いポケモン。そのポケモンは背中と腕に鱗状の翼のようなものがついていて、手にあたる部分には指の代わりに鋭い爪が1本生えていた。見た目は西洋の竜のようである。

「あれは驚いたなー、君が窪みに血だらけで落ちていたんだもん」

1匹うんうんと頷いて過去を振り返っているそのポケモンはガブリ

アス。どうやら、彼がグランを助けたようだった。

「正直死んだと思ってたけどね。兄者に感謝しなさいよ。あんたをあそこからロッククライムで助けたの、兄者なんだから」

奥からもう1匹、ポケモンが顔を出した。ガブリアスと似ているが、小柄で鱗状の翼も小さかった。ガブリアスの進化前、ガバイトである。

「……………」

ガバイトにいきなり上からの態度で来られ、グランは不快感を前面に出した視線を彼女に向けた。

「ちょっと！ 睨んでないで何か言いなさいよ！」

「まあまあ、リュウナ。僕は恩を着せる為に助けたんじゃないんだし……………」

「…………そうやって親切をして自分に酔っているんだろう。見え透いた嘘を吐いて俺が騙せると思っているのか」

「何ですってえ?! 恩知らずも大概に……………！」

ありがとうの『あ』の字も言わない、更には嘘つき呼ばわりしてふてぶてしい　リュウナと言うガバイトは、そんな態度のグランに掴み掛かりそうであった。

「リュウナ、いいんだ。僕はそんな気持ちもあつたかもしれないし、ないかもしれない。ただ…………あ、君名前は？」

「お前に名を教える舌があつたらとつくに抜いている」

兄のガブリアスがそんな妹を宥め、彼はグランに名前を訊いた。干渉が嫌いな彼は、冷淡にそうあしらった。そんな言葉で返されると思わなかったガブリアスは少し困惑の表情で自分の頭を軽く搔いた。

「そ、そつか……じゃあレントラー君でいいかな？ その、レントラー君がそんな風に思っていたならそれは仕方ないんだから」

「もー、兄者のお人好しも大概にしてよね！ 怒ってるこっちの調子狂っちゃう！」

グランの態度に少しも反発しないガブリアスに、リュウナは呆れたように腕組みをした。彼女だけでなく、グランも表に出さないが、調子を崩されていた。ここまでやんわりと受け流されたことはなかった。

すると彼は次第に居心地が悪くなり始めた。早く出ようと試みるも、すぐに顔を顰めて座りこんでしまう。

「……っクツ！」

「あ、まだ傷があまり塞がっていないんだから無理しないで」

「はあ……兄者には付いていけないわ！ あたしは食料を調達しにいつてくるからね！ 兄者とあたしの2人分！」

リュウナは最後の部分を強調して小玉の首飾りを翻して小屋を出た。

それを兄のガブリアスは苦笑して見送った。

「ごめんね……リュウナはぶきつちよなだけで根はいい子なんだ」

「根はいい子　そんなもの、性格の悪い者につける常套な言い訳だ」

さつきからグランは不機嫌な顔を崩していない。今まで出会ったことのない、得体の知れない考えを持つ者と空間を共にしたくないらしい。

「本当なんだけどなあ……助けたのは確かに僕だけど、君が落ちているのを見つけたのは彼女なんだよ」

「だから何だ。物を見つucker事位、コイキングでも出来る」

「あははっ君は面白い例えをするね」

このガブリアスに、本当に彼は調子を崩されていた。笑わせるつもりもないのに、勝手に笑っている。自分が道化役のように思えて、それにもまた腹が立っていた。

「もういい」

「あ、待って。もう一つ。覚えていないかもしれないけど、君がここに運ばれてからちょっとしたら君が大量に血を吐いちゃってね、それが毒のせいだっけ見抜いたのも彼女なんだよ。このまま分から

ない状態だったら命に関わっていたかもしれないなかつたんだ」

よく見ると血の拭き取った跡がある。どうやら嘘でなく、その量からして彼が命の危機に晒されていたことがよく分かる。

「……ならばいつそ逝かせてくれればいいものを。女に助けられる位なら、死んだ方が」

言い終わらないうちに、彼はガブリアスにぱしっと軽く触れるくらいに翼で頬をはたかれた。

「……あ、ごめん、つい……でも、そんなこと言っちゃ駄目だよ。折角生まれてきたのに、助かったのに……感謝しなきゃ」

申し訳なさそうに、ガブリアスは萎縮した。そして諭すようにグランと目線を合わせようとした。

「生まれて良かったと思った時など一度も無い。下らない世の中に降ろされたと思う……大きなお世話だ。俺に干渉するな」

「何か調子狂うな……」

それはこっちの科白だと、グランはガブリアスの目線をかわしつつ、彼をちらりと一瞬、横目で睨んだ。

「気を付けていれば世の中良い所がいっぱいあるのに……僕達も親が2人共密猟者に捕らえられちゃって、辛い事、悲しい事が沢山あった。でもね、ここにいたタツおばあちゃんに拾われて、名前まで貰って、幸せになつたんだ」

「お前の過去話はどうでもいい。黙っていてくれ」

「うん、分かったよ。ごめんね、勝手に喋っちゃって」

ガブリアスはあっさりグランの要求を受け入れ、本当に黙ってしまった。まさか、自分がそういつても継続して喋りかけてくれるのかと思つたグラン、自ら作り出した静寂に耐えられないのか、口を開く。

「……………何故助けた」

「黙ってないといけなかつたんじゃ？」

「いいから言え。許可してやる」

「理由？ うーん、思いつかない。理由をいちいち考えていたら助けられるものも助けられないよ。困っているポケモンがいたから助ける、ただそれだけだよ」

「……………」

ある意味彼が羨ましくあつた。彼の言つた事は単純且つ狂痴だが、グランは味わつたことのない複雑な感情に苛まれた。

「……………話は飛ぶが、もう一つ聞く。何故殴つてまで俺を生かそうとした。お前は生に何の魅力を感じる？」

「知らないね」

「なっ……………」

「僕はそんな大それたこと知らないし、そもそも知ってて生きてたらつまらないよ。でもまあ、強いていうなら、探求中かな？」

彼の返した答えはク・セ・ジユ。つまり無知であることを認め、更にそうであるからこそ、それを知る道を探しているということである。

グランは彼に物を聞くのを諦観した反面、彼に対する憧憬の情も芽生えた。柳が風に揺られても、根底は地に付け栄養を吸っている。そんな喩えがしっくりくる彼があるということが恰好良く見えた。

「……分かった、お前とは話し合えない」

「え、何で？」

再び互いに長く気まずい沈黙が流れる。

しかし、それは絹を裂くような悲鳴で破られた。

「きゃああーっ！っ！っ！」

「リュウナツ!?!」

36話 青竜と黒獅子（後書き）

ガブリアスのことを何も知らないまま衝動的に書いたら……結果こんな性格になってしまいました；

ガブリアスを鯨だと知ったのはつい最近のことです

ここでは竜ということにしておいてください；

それと、ク・セ・ジュの解釈がちとずれている気もしますが、気にしないんだぜ（待）

37話 黒獅子の決意 (前書き)

お久しぶりでございます。

37話 黒獅子の決意

「やめてっ!! 何処触ってんのよ?! ちょっと……そこに入ったら駄目……!」

突然扉が開けられ、人間がリュウナを盾にするように人質ならぬ“竜質”として押し入って来た。

「おお、仲間がいるじゃねーか……こいつを餌に捕まえるか」

「リュウナ!」

「兄者……来ちゃ駄目よっ!!」

ガブリアスは人間に攻撃を加えようと一歩踏み出したが、リュウナに止められてしまった。兄が攻撃を仕掛ければ、妹にも当たってしまう。しかし仕掛けなければリュウナは、自分は……何と云うアンチノミー二律背反。すると彼の真横から電流が走った。迷わずそれは人間と彼女を直撃した。

「!」

悲鳴を上げて倒れる人間。それに押されてリュウナも倒れた。

「リュウナ! ……君、僕の妹に何て事を……!」

憤りかけているガブリアスを尻目に、電流を放ったグランは何も言わずにふいと外方を向いて彼を更に視界から追いやった。

「いたたた……急に倒れてくんじゃないわよセクハラ野郎！！このッ！このオ！」

しかし、リユウナは何事もなかったかのように立ち上がり、人間を蹴ったり踏んづけている。

「あれ？」

「……相性を考えてみる」

ガバイトは地面・ドラゴンタイプで、電気は効かない。その為人間だけが被電して倒れたのである。

「そうか、僕達は電気が効かないのか。それを知っていて“助けて”くれたんだね？」

「……電気が溜まりすぎていただけだ」

グランは電気を出せるまで回復してきたようだ。驚異の回復力である。それを確かめたかっただけに電撃を放ったのかは謎だが。

「兄者、まだ外に人間が沢山……！」

「しょうがない連中だね。僕が行くよ」

扉を開けたまま、ガブリアスは溜息をひとつ吐き、外へ出て仁王立ちをした。そして空を裂くような咆哮を上げた。

彼の咆哮に応えるかのように、空から無数もの星……という可愛いものでもなく、ほぼ隕石と言っても過言ではない物体が尾を引い

て降ってきた。

「流星群　　兄者の必殺技よ。驚いたでしょう」

リュウナが心得顔で得意そうに兄の出したワザの説明をした。グランは見た事も聞いた事もないワザに流石に動揺を隠せず、彼にしては珍しく冷や汗をかいた。

兎に角迫力が凄い。割りと距離のある所から見ても眩い無数の隕石が人間を巻き込んでるのが分り、衝撃が窓を殴っている。

「……やっぱり兄者、手加減してる。そんな奴等殺しちゃえばいいのに！」

あれで手加減なのか？！　と叫びそうになるのを堪え、グランはただただワザを見ていた。震えが止まらず、心臓は忙しく速い鼓動を打ち続けている。勿論こんな経験は初めてである。毒で変なスイッチが入ったのかと自分自身に問い質した位。

「フウ、もうこれで暫くはいいかな」

隕石の数だけのクレーターを残して彼は一息吐いて小屋へ戻った。

「兄者！」

早速リュウナは兄に抱き付

「リュウナ、これで　ぐえっ」

く程しおらしくもなし、彼女は兄の腹にストレートを打ち込ん

だ。

「兄者の馬鹿！ 馬鹿兄者！ 何で殺さないのよ！ あんな奴等すぐまたここを攻めてくるじゃない！」

「殺しはしないよ。もうこれに懲りて、怖がってここに来ない……
といいけどね」

「……………」

「多分この人達は権力のある人に操られているだけなんだ。なのに、理由なく殺しちゃうのは可哀想過ぎるよ？」

「どうなっても知らないんだから……でも有り難う」

漸く彼女は兄に抱き付いた。そして、やはり外方を向いてるグラ
ンに一言曰く

「……………アンタもありがとうね」

そんな彼女が言った言葉に、彼は耳を微かに動かしたが、まるで聞こえていないかのように背を向けた。

「兄者ー、ご飯よー」

騒動も一件落ち着いた頃、時は既に昼を刻んでいた。リュウナは集

めた食料を調理し、まさに今出来上がりて兄を呼んでいるところであつた。

「うん、今行くよ」

辺りは薬の臭いから良い匂いへと変わっていて、それがグランの鼻を撫でる。煩わしいと思つた彼は掛かっている毛布の中に潜つた。

「レントラー君も食べなよ。ここに運ばれて丸一日眠つたままで何も食べていないでしょ？ 僕はいいから、僕の分を食べて」

「兄者！ ……あ、あるわよそいつの分！ あたしとしたことが、分量を間違えちゃつて……！」

「本当？」

「そいつがいると磁場が狂うのかしらね！ あゝヤダヤダ！」

リュウナは悪態を吐いているが、器に盛られたのは明らかに“分量の間違い”を超越している量の料理であつた。立派にもう1匹分
いやそれ以上である。

「さつさと食べて、ここを出て行きなさい！ ……今なら人間も近付いていないし……」

グランの前に器が置かれた。

だが、毛布は動かさず。彼は外界から自分の領域を遮断していた。

「おーい、食べなよ」

ガブリアスが毛布に呼び掛けても返事がない。

「態度が悪……い……！」

とうとうリユウナが毛布をひっぺかした。大儀そうにグランは顔を上げる。彼は恐らく受け取りはしないだろう。他人に食べ物を貰うということが、餌付けをされているようで、我慢がならなかった。しかし、本当に我慢がならないのは空腹の方で、それを主張するかのようにグランの腹が大きく鳴った。体は正直なものである。咳払いをして音を誤魔化そうとももう遅く、ガブリアスは明らかに笑いを堪えている。

「ほ、ほら、お腹空いてるじゃないか……た、食べなよ」

何たる屈辱、グランは反対側を向いて、こうなったら意地でも食うものかと壁と睨めっこをしている。

だが、立ち込める香りは空きつ腹を刺激し、更に腹を鳴らす結果となった。序でに空腹を我慢し過ぎているせいか、気持ちも悪くなっていた。

数分して彼はとうとう欲求に屈服し、一口食べた。

空腹は最上のソースとも言いが、かなり旨かったらしく、グランは一心不乱に、顔をつっ込んで食べ始めた。鬼気迫りさえする彼の様子に2匹は押されていた。

何と言うか、よく自分達が食われなかったと思う

2匹は共通の意識を以て文字通り飢えた猛獣であった彼を啞然として見ていた。

グランは器に盛られていたものを一瞬にして平らげ、更に余っている分まで時折噎せながら食べ尽くしてしまった。

「すぐくお腹空いていたんだね。見ていて気持ちよかったよ?」

器が空になる一部始終を見ていたガブリアスのこの一言にグランは我に返り、そして恥じた。まさか自分が我を忘れて食べ物にがつくなど、彼の中ではありえなかったのだった。

「顔に沢山付いてるわよ」

顔を突っ込んで食べたので、グランの顔にはあちこちに”お弁当”が付いている。リュウナはそれらを指(?)で搦って食べた。最早彼はどうにでもしろという感じで為されるがままになっている。

「お行儀悪いよ、リュウナ」

「いいじゃない。じゃあ取った後どうするの。それならつけてたコイツに言っつてよ。それよりさ、兄者も早く食べたら? 冷めちゃ不味いわよ」

「そうだね。いただきます! ……あれ、リュウナ。このハーブ…
…」

「!?!」

「タツおばあちゃんから貰った……」

「あーあー!! 兄者、違うのこれはア!」

「五月蠅い女だ。一体どうした」

急に騒いだリュウナに、グランは訝しさと煩わしさを合わせたような口ぶりでその動揺の理由を尋ねた。

「これに混ざってるハーブね、怪我とか体の調子が悪い時にとっても利くんだよ」

過剰にうるたえている妹の代わりに、ガブリアスはハーブの説明をした。

「そんな不思議なものがあるのか。でも何故そんなものを」

「あ、兄者がさつき流星群したから、その疲れを取る為によ！別にアンタの怪我の為になんか……」

言われてみると、彼は体の軽さを感じた。傷もさほど痛まない。

「そっか。そういうことにしておくね。ありがとう」

「そういうことって……！ もーっ！」

「ところで、レントラー君」

ふとガブリアスはグランに向き合った。今更だが、その呼び方が彼に違和感を抱かせた。

「……………名前で呼べ。俺はグランだ。種族で呼ばれるのも癪に障る」

「じゃあ、グラン君」

何か違う。初めて君付けで呼ばれ、彼は背筋がぞくりとした。

「……………君付けも止める。寒気がする」

「『グラたん』はどう?」

ガブリアスは明らかに遊んでいる。グランは低く唸り始めた。毛も逆立っている。

「ごめんごめん、ちょっとからかっただけだよ」

「こんな奴をからかう兄者の神経が分からないわ……………」

「……………それで、何だ。何を言いたいんだ」

気を取り直して、グランもガブリアスの方に体を向けた。呼び方にこだわりすぎて、まだ肝心な用件を聞いていない。

「いや、グランはどうしてあんなところに落ちていたのかなと思って」

「落ちていたって……………俺は不思議な飴か何かか」

やはり勝てない。グランは観念して、今までの経緯　今回の異変について、パーティーを追放されたこと、パーティーについて、そして人間のポケモンに襲われたことを全て話した。

「成程ね。それで君はどうするんだい?」

「俺は……………」

彼は言葉に詰まった。闇雲に走っていても又同じことが起こり得る。今度こそ命の保障はない。

「馬鹿ね、なに黙ってるのよ。捜しに行きなさい。アンタ、結局みんなの所に戻りたいのが丸分かりよ！」

「そうしなよ。みんなでいた方が安全だし、捕まっている仲間と君のトレーナーも助けやすいと思うんだ。それに、みんなもきつと待っているよ！」

兄妹の提案に、少し考える素振りをしていたグランだが、既に心は決まっていた。そして彼は最後の発言から結んでいた口を開く。

「お前達は本当に馬鹿な兄妹だ……しかし、その考え方も悪くない。そうさせてもらう。怪我也大分良くなったことだ、直ぐにここを発つ」

彼らしいといえばそうになる。あたかも他の選択もあつたが、しぶしぶ兄妹の言うことを受け入れるという感じだった。しかし、実際は彼の目の前に敷かれているのは一本のレールであり、彼は彼らに背中を押してもらったという形になる。

「うん、分かったよ。上まで送っていくね」

「……最後になるが、名は何という」

「僕？ タツキだよ。簡単な方の竜に王様の王って書くんだ」

「竜の王……大層な名だ」

グランはそう言い少し口角を上げた。

「しっかりと掴まってね！」

タツキはグランを乗せてロッククライムで谷から山へ、一気に降り登り、リュウナもそれに続いた。

「あれ、リュウナも？」

「別にいいでしょ、付いて来たって」

「……言っておくが、感謝の気持ちというのは俺には無い。期待するな。寧ろ俺は余計な世話だと思っている」

「それでも、君が助かったんだから良かったよ」

別れ際でも生意気なことをグランは言うが、タツキは誤魔化されない。言葉の端々から生まれる少しの抑揚でグランの「本当の気持ち」を掴んだ彼はにこりと微笑んだ。

「こつちだつて、手間が増えただけよ！ 何よ、エラソーに！ ……また他のポケモンに迷惑にならないようにしなさいよ！」

妹のほうは言葉のまま捉えてしまっているが、密かに彼にエールを送った。彼女も素直になれない性分のようなのだ。

「俺は二度同じ過ちは繰り返さない」

「そうそう、その意気！ 命は大切にね……あ。あと、さっき殴っちゃってごめんね」

「……何度も謝る程気にするな。力の加減なしに殴った誰かに比べれば軽すぎるものだ」

誰か……とは、今頃当の本人はくしゃみをしているだろう。

「別れ際にもたもたしていても仕方がない。俺は行くぞ」

「頑張つて、元気でね！」

「最後まで世話焼きか……いい加減にしろ」

霧で隠されて見えないが、彼は笑っていた。そうタツキは思い、小さくなっていく背中を見送っていた。

「まったく、素直じゃない奴だったね、兄者！」

「っふふ。似た者同士、だよ」

グランが次第に見えなくなった途端、自分のことを棚にあげて、実は自分と同じような性格の彼に苦言を呈したリュウナ。今までグランを自分の妹と重ねて見ていたタツキは、その滑稽さに思わず笑いながら一番適した言葉を彼女に掛けた。すると、怒りか恥ずかし

さか、彼女は忽ちたちまに真っ赤になった。

「それってあたしのこと?! ジョーダンじゃないわよ! あんな奴と一緒にしないで!」

「あ、もう完全に見えなくなっちゃった」

「……………」

むくれていたリュウナだが、その科白にたまらず橋に向かって叫んだ。

「あの時助けてくれて本当に嬉しかったよ! ありがとうー!!
あと、生意気ばっかでごめん! アンタのこと応援してるからね
ー!ー!ー!」

「ほらね、そうやって素直に言えればいいのに」

タツキは悪戯っぽく笑った。ここまで素直な妹が珍しく、からかいたかったのだろう。

「い、いいの! あたしはあたしなんだから! ……さ、あたし達もあの家、ここの谷を守りましょう!」

「よし、もう一仕事するぞー!」

「あんまりムリしないでよね」

「分かってるよ」

リュウナの叫んだことが伝わったのだろうか、グランは彼らが見えなくなったところで振り向き、ぼそつと何かを言ってからまた走り始めた。

彼の目指すは、仲間の元である。

37話 黒獅子の決意 (後書き)

何かデジャヴが半端ないです。特にリュウナの叫び。……どこかで
あったような；
まあいいや

38話 テンガン山への道のりにて、鯉の涙

グランがタツキ達と別れる時分、サルコ達は険しい岩場のある208番道路の橋の上にあった。

「へ、へ……へーっくしょん!!」

噓はなひる時即ち、人、我を言う。前に書いた通り、案の定その“誰か”もといサルコは盛大にくしゃみをしていた。その直後も景気よくもう1回。

「おいおい、大丈夫かよ」

「あなた、風邪でも引きましたか？」

「いや、それはないけど、おかしいな、急にムズムズして……俺の噂うわさをしている奴がいるのか……？」

涙はなを噉りながら彼は訝しがつて首を傾げた。そして、この緊急事態に体調なんか崩していられないと、妻からの問いかけを否定して昔からの俗説を彼は信じることにした。

「おとうちゃん、ツバとんだあ……」

「あ、ごめんな」

抱えられている息子が何か害を被った様子。サルコは両手が塞がってしまっているので仕方がないが、まあ、それはさて置き

「……なあ、おかしくねえか？」

「何が？」

「ヨスガにゃあんなに人間がいたのによ、ここはどうだ。人っ子一人もいねえでねえの」

スタールの言う通り、平原や岩場は静まり返っている。するのは遠くで聞こえる滝の音のみ。

「確かに……そう言えば、ポケモンの姿も見なかったな」

「ねえ、みんなー!!」

下からの声。橋は渡らずに川の道を進んでいるフェロックのものであった。

彼が橋を渡ろうとすれば橋が落ちるのも至極当たり前になってしまうので、彼だけ別の行路を辿っている。

「どうしたんでい、海蛇」

「あ、スタールでいいや、ちょっと降りてきて！」

「いいやってどどういう意味なんだ?!俺様しかそこへ行けねえだろが!」

「怒ってないで早くー!」

渋々彼は彼の元へ行く。すると、彼の背の上でシクシクと泣いているポケモンがいた。全身が赤く、頭には王冠のような飾りがあり、

白色の立派なヒゲが2本口元に生えているが、口は情けなく開いていて、目も頭の飾りに反して威厳がない。そんなアンバランスな容姿の魚型ポケモン、コイキングは、それはなよなよとして、鰭を顔に当てて人間でいうお姉さん座りで泣いている。

スタールは正直これはどうかと思った。

「……………で、俺様にどうしろってんだ？早く言わねえと喰っちまうぞこの鯉」

「食べないでよ！今流されてたのを見つけて乗せたんだけど、僕が理由聞くにも泳ぐので精一杯で…………この子も泣いてばかりだし、ちよっとこの子から理由を聞いてもらえないかな？」

「なんでこんな鯉に対してそんな義理があんだア？」

「ムツ…………聞かないと、こうだぞ！」

フェロックは巨体を揺すり、背に留まっているスタールを振り落とそうとした。

泳げないスタールはこの流れに飲まれたら、まず自力で戻ってくるのは不可能に近いだろう。

「どわっ！ ゆ、揺らすな！ 分かったから頼む、この通りだ！」

「分かればいいよ。この子を先ずみんなの所へ連れてって。スタールだけじゃ無理だから」

（クソッ、後で覚えとけよ……………！）

彼はコイキングを鷲掴み（鷹だけど）にして軽々と橋の上へと飛ん

だ。

「なあ、どうして泣いているんだ？」

リーダーが訊いても未だ泣いている。それどころか、相当なことがあったのか、サルコ達には一瞥もくれない。

「弱ったな……泣いてるだけじゃ分からないぞ？」

「何か辛い事でもあったんですか？」

ソフィーが訊いても面を隠し、完全に心を閉ざしてしまっている。

「っこの……おい、手前いい加減にしゃがれ！　こうやって皆が訊いてやってるっつうのにメソメソしゃがって何様だ！！」

コイキングの分際で俺様達を無視するでねえ！　終いにや喰うぞ！！」

とうとうスタールが切れてしまった。何も言わずにいつまでも泣かれては、周りのイライラも募る。尤も、怒っているのは親父鳥1羽だが。

「スタール、それじゃ逆効果だつて！」

恐ろしい形相で脅され、余計にコイキングは声を上げて泣いてしまった。慌ててサルコがスタールを突っ込むも、時既に遅し。

「おなかいたいのか？　だいじょうぶ？」

コイキング1匹に立ち往生していると、今まで大人たちの様子を見ていたジェットがサルコの腕からするりと抜け出して3本足でコイキングに駆け寄り、その顔を覗き込んだ。純粋な目がこちらを捉える。

「……………」

すると、今まで壊れた水道のように零していた涙が止まり、その目も彼を捉えた。

「坊や、まだ小さいのに優しいのね……………」

「お、泣きやんだ」

子供の力だろうか、それともジェット個体の力だろうか、コイキングは穏やかな顔付きになった。涙も乾いている。

「坊やみたいな子ばかりだったらいいのに」

「おい」

「ひっ!?!」

髭の色と口調からしてメスのコイキングは、やっと顔を上げたところ、目の前にずいっと現れた猛禽ポケモンに怯えて体を硬直させた。そりゃ天敵に真正面から急に立たれては誰だって竦む。

「おじちゃん、こわがらせちゃダメ!」

「ちっ……………なんでえ、俺様何もしてねえじゃねえか」

ジエクトに怒られ、少し極まりが悪そうにスタイルは肩を竦めた。彼に注意されては、流石のスタイルも強く反論できない。

「食つぞつて脅してただろ……あ、こいつは気にするなよ。俺達はお前を食べるわけでも、苛めるわけでもないんだ。

泣いていたのを仲間が見つけたからその訳を聞きたいだけなんだ」

「訳……言つのも辛いの……」

「だいじょうぶだよ。ぼくたちがきいてあげるから」

ジエクトの後押しもあり、コイキングは漸く重い口を開いた。

「私はここ一帯で流されながらも皆と平和に生きてきました……でも、ついさつき大勢の人間がやってきて私以外の仲間が全員捕まってしまう……叢にいるポケモン達もみんな……私、私、独りぼっちになって……」

そこまで言うと、コイキングはその時のことを思い出してしまい、再び泣き始めた。

「そうか……道理で静かな訳だ。もう少し早く来ていれば……!!」

「どっかの誰かさん達が異文化の建物でイチャついていなければなあ……」

スタイルは2匹をチラリと見た。

「うつうつるさい！ 放置したのは誰だよ！ それに、それとこれと

は別だろ！」

「そ、そうですよ……」

「おとうちゃんとおかあちゃん、おかおがあかいよ？」

状況を知らない、生まれたての感性を持ったジエクトがそう指摘すると、恥ずかしさが更に込み上げてくる。まだ連れ合って浅い2匹は、暫くお互い頬を染めたまま動かなかった。

「と、とと、と・に・か・く！ 仲間が捕まったなら助けないと！ 泣いてるだけじゃ始まらないじゃないか」

落ち着かないまま、サルコは無理矢理話題を転換した。全く、これではおちおち夫婦の時間も作れない。

「冗談はやめてください！ 私にはとても戦えません！」

サルコの助言に、とんでもないとコイキングは鰓を広げて息巻いた。

「ま、そうだな。そんで？ 俺様達にどうにかして欲しいって魂胆か？」

「そんなつもりは……でも、そうしていただければ……」

「だとさ、サル公。どうすんだ？」

「どうするって……これ以上人間の好きにはさせられないだろ。助けてやるっぜ。ということだからさ、案内してくれないか？」

「ほ、本当ですか?! あ、ああ、ありがとございますっ!」

コイキングは予期せぬ答えを聞いて相好ソウゴウを崩し、サルコにしがみついた。

コイキングが抱き付いたので生臭い……とは流石に言えないので、サルコはさりげなく彼女を自分の体から剥した。

「おーい、おおおんえ言っえうおー?」

下から何やら怪しい言語が聞こえた。その声の主はフェロック。彼は既に渡りきり、胴体を伸ばして岩場に齧り付きながら喋っていた。

「母音だけで何言っただか分かんないぞーっ!」

「ひょーがあいあん! こうひあいお、あがはれあうおん!」

(訳:しよーがないじゃん! こうしないと、流されちゃうもん!)
話を振られて彼も大変そうである。理解の有無にかかわらず、彼は必死で自分の言いたいことを伝えようとしていた。時々水を飲んでがぼがぼ言っている。

「字にしてみると、暗号か何かかよ……何とかして登ってこい!」

こんなギャラドス見ていられない。し、喋っていることが聞き取れないなら言葉としての機能を果たさなくなっただけで会話が成り立たない。サルコは、フェロックも地上へ来るように指示した。

「うー……よいひょっ!」

フェロックはぐおんとシャチホコのように尾を持ち上げ、そのままでんぐり返りの要領で岩場に着地した。

「凄い戻り方……」

「男らしい戻り方ですわね。ぼっ」

「そうかあ？」

じきサルコ達もフェロックの元に到着し、フェロックはコイキングからこの内情を聞いた。

「そうなんだ、仲間が……辛かったね……」

「ええ、とても……人間達は多分このテンガン山の内部に巣くっています！

私も戦えませんが、仲間の無事を確認したいので、一緒に行きます！

中には水もありますし、そこで見守ってます」

「別にそら構わねえけどよ、邪魔したら即刺身にすんぞ。そこんとこあ、覚悟してもらわねえとなア……」

スタールがそう言うと全然冗談に聞こえない。事実、目が獲物を捉

えた時そのものであり、完全にコイキングをロックオンしていた。

「は、はいっ……」

「だからスタール！ 怖がらせんなって……コイキング、大丈夫だからな。そんなことにならないように俺たちが止めてやるから」

「そうそう！ スタールが君を食べそうになったら、僕がスタールを食べてやるんだからー！ さ、いこー！」

これまたやりかねない。凶悪ポケモンの片鱗を示したところで、テング山の入り口へと頭を突っ込んだ。

「あら、フェロックさん一寸待ってください。あなた、小玉がないですよ」

無邪気に恐ろしいことを言ったフェロックを少し引いた目で見ていたソフィーは、彼のどの胸にも小玉が掛かっていないことに気づいた。

「えっ?! きつと流されたんだ……でもちよつとみんなが斜めになってるだけだけど?」

「そう言えば、コイキングさんにも小玉がないですけど、混乱していませんね」

「?」

彼から言わせると正バイアスに景色が傾いているだけで、今は無茶苦茶ではないらしい。

「一体どういうことだ……?」

「??? そんなことより、早く仲間を助けてください」

納得のいかない彼らであったが、世界の異変のしくみについてよく知らないコイキングに急かされて疑問は保留。一行はテンガン山へと足を踏み入れた。

38話 テンガン山への道のりにて、鯉の涙 (後書き)

また、よー分からん題を付けおつたな、私……

39話 御山の擾乱

シンオウを東西に分断する大山、テンガン山。特別な磁場が張られているとも噂されている。また、頭頂部は真白の雪に覆われ、そこに行き着く者は一握りしかいないと言われている。その深山みやまは実際目立った存在をシンオウ全体に古代から残し、人々に畏怖の念を抱かせていた。

しかし、その人々の敬虔ケイケンさを嘲笑うかのように、中は数人の人間がうつつき、乱獲に精を出していた。無論、ここもポケモンの気配がしない。

カンと冴え渡る空気が今になっては逆に不気味である。

「ひでえな……ズバットもいねえじゃねえか」

不可侵の山で人間による目に余る蛮行。スタイルは周りを見渡し咄嗟トツサした。

「コイキングさん、これから人間がこちらに気付いて襲ってくるかもしれないから今の内に隠れていて下さい」

ソフィーは事が起こらないうちにコイキングが安全な場所に行くように促した。

「あ、ハイ」

コイキングは近くの池に跳ねて入り、深くへ潜って息を殺した。

「誰も手前なんか捕まえやしないとは思っけどな、俺様は。フウ…

…よっしゃ、いっちょ暴れてやるか!」

スタールは地を足で蹴り上げ、勢い良く飛び立った。

「スタール……何だかんだ言ってヤル気満々じゃないか」

静寂を大翼で切り裂くように飛ぶスタールに、サルコは少々呆れていた。もう人間たちの悲鳴が聞こえ始めている。

「ねえ、僕も行つていいかな？」

傍らに、見るからにウズウズしている凶悪ポケモン。お前もかというリーダーは小さく息を吐いた。

彼が、駄目って言ったら……どうする？

という意地悪な問い掛けもしない間に、フェロックはうねうねと体をくねらせて人間の集団に混じっていった。

「っし、俺も行くか！ ソフィー、ジエクトを頼む！ お前も何処かに隠れている」

「あ……。あなた……」

「ん、どうした？」

「いえ、何でも……」

ソフィーは一度出かけた言葉を飲み込んだ。

それは小さな、しかし彼女にとっては大きな決意の塊であった。だが、それを完遂及び成功させる自信が無い為に彼女は尻込みしてしまった。

「オラオラオラァーッ！！」

スタールは次々と人間を張り倒し轢き倒す事限り無し、そしてその攻撃力は国士無双の勝る者無しである。

それから彼は倒した人間からボールを奪い取った。

フェロツクも悪の波動を放ち人間達を失神させていった。

更に広範囲に渡れる尻尾を振り回し、誰も近付けないようにした。

サルコは身軽さを活かして動き回って彼らを翻弄、纏めて掛かってこられたところを一網打尽に殴り倒した。

全てが順調に進んでいた。

彼女の仲間が入っているボールは溜まっていく。

「凄いです、皆さん！」

ところが、その彼らの活躍を池からみていたコイキングは思わず顔を出してしまった。

彼らは各々の戦いに集中していてそれに気付かずにいる。

不運にも、気付いたのは人間の方　コイキングでもポケモンである。人間はコイキングににじり寄った。

されど、もう他に気付いた者がいた

「コイキングさん、危ない！！」

その声と同時に放たれた真空の刃。

人間は刃に体を切り付けられ、真空の圧力に押されて岩壁に叩き付けられた。

「?!」

それは、はつかばかりの間であった。
自分を狙っていた人間が吹っ飛ばされ、自分は無事である。
そしてコイキングは自分を助けてくれたポケモンを見た。

「アブソル……さん？」

「大丈夫ですか？」

「は、はい……」

真空の刃、即ち鎌鼬かましたちを放ったアブソル、ソフィーはそれを聞いて
微笑んだ。

育て屋に預けられていたので、ワザとレベルは進歩している彼女。
ワザを使う機会がなかなかないだけで、使えば戦いにおいていい線
はいくであろう威力を、人型に崩れた岩肌は物語っていた。

「さあ、今の内にまた隠れて下さい」

「ありがとうございます……」

人間達は何やら騒いでいた。うちつけに彼らの仲間が正体不明の
風にやられたのだ、それは当然の理であろう。

「おい！ あそこにアブソルが二匹いるぞ！」

1人の人間が叫ぶ先には、彼女達が隠れている岩であった。
それを聞き、近くにいた人間はその岩の陰を見た。

「いたぞ！」

「おかあちゃん、みつかつちやったよ?!」

「大丈夫よ……大丈夫だから……」

ソフィーは怯えるジェットに向かって呪文のように『大丈夫』を連呼した。

そして彼女の周りには空気が渦巻いている。

「覇っ!!」

ソフィーは再び鎌鼬を発生させ、返り討ちにした。

「おかあちゃんスゴい……!! おかあちゃん! うしろっ!」

「!」

背後には他の人間が忍び寄っていて、ボールをなげんとするところであった。

しかし、弾丸のように走ってきたゴウカザルに、背後から、走ってきたそのままの速さでの跳び蹴りを食らい、人間は彼女の目前で倒された。

「あなた……」

「ソフィー、一体何をしているんだ……」

声のトーンは例の彼のものとは違い、低い。彼は怒っている……
彼女は直ぐに察した。

「ち、違うの……ただ私は」

「言い訳なんて聞くか！！ 周りの状況も把握できないで、戦闘に勝手に参加するな！！ 俺達の手間が増えるだけなんだよ！」

「…………あの…………そのアブソルさんは私の為に…………」

「鯉は潜っているっ！！！」

「ひいっ…………」

戦闘中に邪魔が入ると、気が立っている彼はその者に当たってしまっ
まう。

本来、彼の種族は気性が荒いので仕方ないと片付けてしまったらそ
れだけなのだが…………

父親の剣幕に、この時ばかりはジェクトも介入できなかった。
ソフィーは彼に興味本位で戦闘に参加したと誤解されてしまった
こと、そして彼にまた守られて彼の手を煩わせてしまったことが悔
しくて口をきゅっと真一文字に結び、俯いた。

「…………ごめん…………なさい…………」

出てくる言葉も謝る内容でしかなく、それがまた悔しくて彼女は
ポロポロと涙を数滴落とした。

その数分後、人間は全て倒された。

「ふいっ…………こんで…………こは全部か…………」

「疲れたけど、楽しかったね！」

「楽しかったって……まあいいか。さてと、あとはこのボールから皆を出して……」

パチパチパチパチ……

突然の拍手の音。彼は辺りを見回した。まだ人間が残っているのかと

しかし、何処にも物音はしない。

『ここですよ。いやあ、貴方達は実に素晴らしい……』

彼らの前にテレポートしてきたフーデインが現れ、先刻の拍手はそれに乗った人間のものではなかった。

39話 御山の擾乱 (後書き)

この回、サルコの株が下がった気がする (ry)

40話 vsセファイド（対峙編）

フリーデインに乗った、スーツを着こなしている人間の青年。彼はフリーデインから降り、傍らの大量のボールを見て端正な顔付きを少し引き攣らせながら、眼鏡の奥のヘーゼル色をした目を伏せて嘆息した。

「いけませんねえ、そんな勝手を働かせては……」

彼は指をパチンと鳴らす。

すると、ボールが光だし、徐々に形を失って消えた。

「！ ボールが……」

「消えやがった……！」

「驚いている様子ですね……いいでしょう、説明してあげます。手下共がある程度捕まえたなら、その中のリーダーが私達、中核六人という者達に連絡を取り、私達は何らかの動きで神に合図を送って時空の狭間にボールを入れてもらうんです。

……もつとも、二人が貴方達に倒されてしまったので、合図の人手が足りなくて指が擦れてしまいましたけどね。紹介が遅れましたが、私はセファイド。ズイでは私の手下が失礼しました」

セファイドと名乗った男は仰々しく会釈をした。その中に傲慢さが明け透け同然に現れている。

「いけ好かねえ野郎だぜ……！！　こういうタイプは一つ番嫌いでいい！」

「……神って、ツアイトのことだよな？」

「時空の狭間 聞いたことがあります。時、空間の神が罪人を落とすと言われている、言わば永劫の奈落……二神が許さない限り、戻る事は叶わないそうです……」

重苦しい口調でソフィーはコイキングにそんな言い伝えを告げた。それはどんな残酷な折檻よりも、どんな屈辱的な嘲笑よりも彼女の心を強く抉った。

「そんな……では私の仲間は……？」

一縷の望みに賭けながら、コイキングは縋るようにソフィーを見たが、無情にも彼女は首を横に振った。コイキングはそれを見て全身の水分が無くならんばかりの涙を流した。もう、この哀しき水源を止められる者は いない。

「許せない……！ アイツらも、ツアイトも……！」

フェロツクは殷^{アンコウ}紅色の濁った目を見開いた。きっと彼の腹には、マグマのような怒りが沸々と込み上げているだろう。

「ちょっと待てよ！ ツアイトはそんなことする奴じゃ……！」

「じゃあ、あの時何で！ 何であんなこと言ったとサルコは思うの？！ 知ったようなこと言わないでよ！」

お前らを利用していただけ サルコの心にあの時のツアイトの言葉が突き刺さる。

「それは……」

サルコは何も反論できなかった。
彼に何かしら理由があつて突き放したと思つても、事実こんな事になつてゐる。

認めたくても認めたくなかつた。仲間裏切られたということが、
どんなに辛い事かも

俯いたサルコに、少し言い過ぎたかなと気にしながらも、フ
エロツクはキツとセファイドを上から睨み落とした。

「おっと、やる気ですか……やるならこの子達とやつて下さい」

セファイドは、先刻からいるフーディンに加えてチャールム、ネ
イティオを繰り出した。例の如く、彼は臨戦態勢である。

「好きな相手を選んで下さい」

先程からセファイドは悠々たる面持ちで彼らと向き合つていた。
口振りもまた、余裕たっぷりである。

「先ずは」

「僕がネイティオやる！ この怒り、何処かにぶつきたいんだ！」

フェロツクは即決であつた。ここまで皆勤だが、戦うことに慣れ
ている種族なのか、闘志が滾つてゐる。その上、怒りも彼を突き動
かしてゐた。

「海蛇、まだ誰もなあんにも言っつてねえぜ……そう言う俺様もチャームやるけどよ」

「あとはフリーデインだが、俺はちょっとパス。あいつのエスパー技食らったら耐えられるか分からない。ジエクト　はまだ足が駄目か……」

フリーデインはあの特攻の高さが怖い。この勝負は競技とは違う。生半可なバトルをして負けたら捕まるのだ。本来ならバトルしたがりのサルコだが、今回は慎重になった。だが、肝心のバトル要員がない。パーティーが悩んでいるところに、1本の手が上がった。

「私が　私がやります！」

「ソフィー?!」

「止めときな、嬢ちゃん。モニターか何かでも見た事があるだろうし、こないだサル公が倒れただろ？　それ程厳しい世界なんだ。嬢ちゃんが出る幕でねえ」

意外な立候補者に、一同は目を丸くする。その内のスタイルは冷静さを取り戻し、諭すようにソフィーにそう言った。彼からすれば、彼女の申し出は無謀以外の何物でもない。

「おかあちゃん、ぼくやれるよ！　がんばれるよ!」

ジエクトは足が完治したことをアピールしようとしてピョーンピョ

ンと飛び跳ねたが、誰が見ても負傷部分を庇っている。

「私には……大切な者達を助けたり、守る権利がないのですか……？」

「権利とかの問題じゃないんだ。お前をこの戦いに巻き込みたくは

」

「もう十分巻き込まれています……！」

ソフィーにしては珍しく声を荒げた。

「ソフィー……」

「……あ、すみません……私だけ、私だけ護られてばかりで、このままでは私だけ卑怯者じゃないかと思って……それに、私、変わりたいんです。あなたがこの前仰ったことについてずっと考え、答えを見つけました。逃げてばかりではいけない、私も仲間の為に戦うべきだと。そして何より、この異変で涙を流しているポケモンを見るのが辛いんです。」

一刻でも早く……自分の手でも助けたいんです！　もうこの身を捨つ覚悟はできています……！」

思いの外頑固な一面を見せた妻。そして頑固さだけでない、彼女の凜としたその姿勢に強い意志を夫は感じ、遂に折れた。

「こうなったらどうせ止めても無駄だな……そこまで言うなら、行って来い」

「はい。ありがとうございます」

「おかあちゃん……」

ジエクトが不安げにソフィーを見上げる。すると、彼女は「戦場に赴く女戦士」から「母親」の顔つきになり、我が子を舐めして頬を合わせた。

「ジエクト、お父さんと大人しく待っていてね」

「ゼツタイかってね！ ゼツタイだよ！」

「ええ」

母の体温を一身に受けたジエクトは、くすぐったそうにしていたが、瞳を輝かせて真っ直ぐに彼女を見た。そんな息子に短い返事をし、彼女は温かい微笑を注いでいた。

「やるのは決まっちゃったから構わねえんだが、嬢ちゃん。相手の技とか、自分の技とか相性とかその他諸々盛り沢山、バトルのこと分かってんのか？」

ここでスタールが割り込んできた。しかし、彼の言っていることは大事なことである。知識無くして勝利無し。バトルの経験が無いソフィーには、それが何よりの不安要素であった。

「え……つと。自分の技は本で一応把握しています。技の練習も少ししていました。相性も自分に関すること位ならば……」

たじろぎ彼女は答えた。育て屋に置いてある本で知識を蓄えてい

たらしいが、いきなり実践とは段階が早すぎる。

「おいおい……それでよく戦う気になったなア！」

スタールは彼女のあまりに頼りない返答に少し呆れた。彼女らしくもない、とも言いたげである。

「ですが！……何とかします」

「もしかしてソフィーさん、冒険大好き？」

「だったらサル公と夫婦になったのも頷けるな」

言いたい放題である。だが、一概に否定もできない。この2匹が夫婦になった経緯いきまじは普通でなく、ソフィーがサル公と契りを結んだこと自体、大変なことであった。その時のことと比べると、彼女にとって今回のことは軽いものなのだろうか。

「おらっ！！ どういう意味だ！ んな事いいからさっさと行けよ
」！

「あなた」

散々な言われようにサル公は当然怒ったが、ソフィーが一声彼の名を呼ぶと、彼は戸惑いの表情を見せて皆に背を向けた。今更になつて自分の言ったことの重みが分かってきたようである。

「……大きな怪我だけはするな。必ず、必ず無事で帰って来いよ」

「はい。行って参ります」

ソフィーはそっとサルコの傍らに寄り、彼の頬に口を付けた。

「随分と時間が掛かったみたいでしたが、そろそろ始めましょう」

セファイドの台詞を皮切りに、バトルメンバーは各々の相手の目の前に立つ。

そして戦いの世界が切り開かれた。

40話 vs セフアイド (対峙編) (後書き)

後半からコイキングの台詞が絶賛消失中。

41話 vsセファイド（フェロックの場合）

circumstance of Ferociousフェロックの場合

フィールドは何て事ない普通の空間だった。

背景はメタリックな銀色をしたもので、障害物としては、点々とブロック状の箱がある位。

「シンプルでいいでしょう？ 私のお気に入りの空間なんですよ」

セファイドはにこつと笑い、1人満悦している。

フェロックは当然彼の好みには興味無く、ネイティオに攻撃を仕掛けた。

その様子にセファイドはふう……と呆れたように溜め息を吐いた。

「分からないですか。これだから野蛮なポケモンは……ネイティオ、フェザーダンス」

彼、ネイティオは普段閉じている羽を目一杯広げて羽根を振りまくように舞った。

それはまるで意志を持ったかのようにフェロックの体に纏わりつき、彼は思うように力がなくなってしまった。

「うわッ……?!」

アクアテールは勢力を次第に失った。

ネイティオに行き着く頃にはもう技としての威力も心許無い程に。

「危ない危ない……こうしておけばひとまず安心ですね」

「な、何この羽根ー！」

フェロックは必死に体を振って羽根を落そうとした。その努力が無駄だと知っているセファイドは、ヘーゼルの眼を閉じて静かに笑った。

「ふふつ、その羽根は取れませんよ。あなたが倒れない限りね……」

フェロックは、こうなれば体の自由の善し悪しに関係ない悪の波動を選ぶ。フェロックから四方に暗黒のオーラが広がった。

「ネイティオ、光の壁」

だが、セファイドはそんなことにも動揺しなかった。彼の一言でネイティオの前に壁が張られた。特攻に自信のない彼の波動は、容易くもその壁に弾かれる。

苛立ちを隠せないフェロックは、物理技で抜群の急所当たりを狙ってストーンエッジを放とうと、岩を生成した。

「！……そうはさせませんよ！ ネイティオ、先取りです！」

ネイティオもまた、覚える筈のない技の素の岩を生成、彼より速く放つ。

岩の剣は有無を言わずフェロックに襲いかかった。

「！ あいつ、ストーンエッジなんて覚えてるのか？！」

ネイティオの思わぬ攻撃にサルコは瞠目していたが、息子が恬淡として曰く

「おとうちゃん、さきどりじゃないの？ ネイティオはおぼえるわけないし、あのおにいちゃんがちゃんとそういつてたよ」

だそうな。甚く冷静なジエクト。父親であるサルコよりも対戦経験の浅い彼だが、こういう分析は得意みたいだ。

「……そ、そうだな。俺もそう思った」

決まり悪そうにサルコは肩を竦めた。負った子に瀬を教えられないとは本当かもしれない。

「うわああッ！！」

フェロックは岩剣をもろに浴びた。先取りは威力をプラスして放たれるので、ダメージは大きい。しかも効果は抜群。

「読みが甘いですね。私のように相手を観察しなくては、到底勝利は難しいですよ」

「う……うう……」

フェロックは苦しそうに呻く。ひこうという、ネイティオと共通のタイプが招いた悲劇、彼は皮肉にも自らの技でダメージを受けてしまった。

「駄目だ……相手の方が読みで上手……！」

「あきらめるのはまだはやいよおとうちゃん、どうにかなるってね、コイキングさん」

切羽詰った表情で拳を握るサルコを励ますように、何かを信じているような眼でジエクトはそう言い、またコイキングに同意を求めた。コイキングも彼の言うことに同調して強く頷いた。

「……はい。せめて、仲間の敵を討ってくれると私は信じています」

「けどなあ……あいつの武器でもある攻撃力が……」

サルコはそう2匹から言われても腕を組んでいる。牙をもがれてしまったフェロックについて色んなことを懸念しているようだ。

「オトナっているいろかんがえちゃうんだね」

「苦労しているんですね。ゴウカザルさん」

2匹はいつまでも心配している彼を哀れみの眼で見始めた。

「お前、泣いてたんじゃなかったのか」

「サイコキネシス！」

流れは完全と言って良い程、セファイドに向いていた。フェロックはネイティオのサイコパワーに押され飛ばされ障害物にぶつかった。

「ついたたた……！ うううー……もおーっ！！」

感情がフェロックの頭を支配していた。羽が纏わりついているのも忘れ、体を伸ばして噛み付こうと、ネイティオに飛び掛った。しかし、口の中まで羽が入ってくる。その羽は牙を覆い、鋭利さを失わせた。

ぱくり という可愛い擬音である。本人はネイティオの体ごと噛み砕いたつもりだったが、実際の相手の体は浅い噛み傷がつくだけだった。

「おやおや、おいたはいけませんよ。おしおきです！ ネイティオ、ナイトヘッド！」

命令を受けた彼は噛み付かれている胴体を回転させて振り切り、いつもどこを向いているか分からない眼をフェロックに向けた。その吸い込まれそうな瞳に、彼は嫌な予感に苛まれる。すると、ネイティオは突然眼を更に見開いて自分の背丈よりも数十倍大きい残像をフェロックに見せた。ナイトヘッドは自分の力量を相手にぶつけるワザ。

彼の有りつ丈の力を垣間見てしまったフェロックはショックで震え上がってしまった。

しかし、そのショックのせいか、彼にある考えが浮かんだ。

（向こうは思い切り力を引き出している……なら……僕も！）

彼は再び体を振り始める。羽根をどうにかしようとしたのだろう

か、兎に角振り切れんばかりに体を動かした。

「フェロック！ 羽根なんか落そうとしても無駄だ！ 気にするな！ おいつ！ ……自分のターン無駄にするなよ！」

今更羽根をどうにかしようとしているフェロックに、サルコは届かない叱咤をした。精神的にまだ幼いフェロックには思慮が足りない。ずっと仲間として連れ添ってきたサルコはそう思い込んでいた。

「ムダじゃないかもしれないよ？」

だが、ジェクトは何かに気づいたのか、静かにそう告げた。

「は？」

「見苦しいですよ。羽根はどう足掻いても取れないんですから」

それでも彼は体をクネクネさせている。行動を起こさない彼に、セファイドは少し苛ついた。

「無駄な行動はよして下さい。私は焦らされるのは嫌いです」

「無駄かどうかは……僕の動きを見てから言つてよ！」

フェロックは突然、水を纏った丸太のような尾をネイティオに叩き付けた。するとネイティオの体勢が少し崩れた。重心が傾き、足

がよろける。

（　　！　少し力が上がったような……まあ、気のせいとしまし
うか……きつとネイティオが疲れてきているだけでしょ）

セファイドが一抹の不安を消していた最中、フェロックはまた体
を擦った。今度は先程より激しく、長く。しかし、一向に羽根は取
れない。それでも彼は構わないといった感じでただひたすらに体を
動かしていた。

「嫌らしい動きですね……ネイティオ！　サイコキネシスでやめさ
せ　」

ネイティオは、主人の命令を聞く前に再びフェロックの尾に巻き
込まれた。よろけただけでは済まず、完全に横倒しになってしまっ
た。

「エンジンがかかってきた！　そろそろいけるかも！」

一呼吸置き、最後の仕上げ。剥がさんばかりの勢いで尾で地を叩
き、巨体を捻り上げた。

「あの動き　まさか　！」

セファイドがようやくフェロックの行動の意図を知った途端破壊
音。ブロックを貫通して何処まで行くのやら、フェロックは信じら
れない速さでギガインパクト、ネイティオに衝突した。

「？！　嘘でしょう……ネイティオ！！」

ネイティオは目を開けたままノックダウン。

「そういうことだったのですか……」

と言った所で彼は消えた。

「まだまだ、観察不足だったね。今気づいても遅いよーだ！」

「攻撃がくつと下げられたのに一撃……しかも、あの速さはフェロツクのものじゃないぞ!？」

サルコは軽く混乱状態に陥っていた。この戦闘内容が何一つとして理解できていなかったみたいである。無論、フェロツクの急な強化のからくりも分かっていなかった。

「りゅうのまいだよ。フェロツクおにいちゃんがからだをクネクネさせてたのは、りゅうのまいをしてたからだよねえ？」

「はい。あれは確かに鯉族に伝わる鼓舞の舞い！ 見事でしたわ……!」

「……あ、そう。はは、知らなかったのは俺だけかよ」

負った子だけでなく、抱えた鯉にも教えられたサルコ、立場無し。

フェロツクは羽根を取るふりして竜の舞を積んでいたのだった。

そして、相手の集中力を見計らって一気に雄飛。下げられた攻撃力は補われ、それ以上になつた攻撃力で全身全霊を以て突っ込んだ訳

である。

「コイキングさん、やったよ!」

彼の勝利の報告は冷たく寒々しい空間に一つの灯を点らせた。

41話 vsセファイド（フェロックの場合）（後書き）

りゆうまいって、いいよね！

余談：リメイク前は先取りのワザの名前を間違えるという致命的なミスをやったのけました。

42話 vsセファイド(スタイルの場合) (前書き)

今年最後の更新です。

42話 vsセファイド（スタールの場合）

Circumstance of Starling）スタールの場合

スタールがいる場所もメタリックな空間であった。自然を感じない無機質な場所、スタールは今度は天井に気をつけながらそこそこの高度を保ち、ホバリングでチャーレムと対峙した。

「よろしくお願いしますね、鳥さん」

「いつちいち癩に障る奴だぜ…… ったく！」

そう一つばやいてから、スタールは羽を更に広げて鋭い目付きと共に相手を威嚇した。貫禄のある彼に、少しチャーレムは身を引いた。

「おや、恐い恐い…… チャーレム、ヨガのポーズ」

チャーレムは奇妙なポーズで自身の攻撃力を上昇させた。スタールは軽く舌打ちしてチャーレムを襲いに掛かるうとする。

「猫騙しです」

スタールの目の前でバチンつと音がした。一瞬彼は何が起こったのか理解できなかった。そしてすぐ、叩かれるのではないかという恐怖が襲い、思わず彼は目を瞑ってしまった。

「?!」

「今です。雷パンチ」

スタールが怯んだのをいい事に、チャーレムは拳に電流を込めてそれを彼に殴り付ける。

「ぐっ……!!」

タイプ一致ではないが、相手は物理攻撃が得意である。抜群ダメージを受けた彼は床に倒された。

「スタール! ……雷パンチがあつたか!」

「おとうちゃんおちついて。おじちゃんならたえてるよ」

「お前は本当楽道家だな……どこからその遺伝子が来たんだ?」

「この子の言う通りだと思います……攻撃力をヨガのポーズで一段階上げても、威嚇で一段階下がっていますから、結果ほぼプラスマイナスゼロですので、一撃ダウンはないでしょう」

「そしてお前は何者だ」

「またもや2匹に説得され、いよいよサルコは居場所がなくなってきたのであつた。サルコ含め、お気楽である。」

「う……ぐう……き、き、汚えぞ！！ しかもこの俺様に猫騙したあ、いい根性してんじゃねえか！！」

彼は物凄い勢いで立ち上がったと思っただら、熱立いぎりって再びチャールムに向かつて行った。

「見切って心の目です」

チャールムは飛んで来た彼を横っ飛びで躲して目を瞑り、心で照準を彼に合わせた。

心の目の次は強いワザか、外すとリスクの高いワザ 経験からそう結論付けたスタールはワザが当たらぬよう空に逃れた。しかし、彼の読みは当たっていたが、その判断は‘間違い’だった。

「跳び膝蹴り」

チャールムは彼を追って空高く跳んだ。まるで彼女に翼が生えているように、鮮やかに彼を易く捉えた。

「んなっ……っ?!」

スタールが驚く様を横目で見遣り、にやりと笑ったチャールムは、すかさず彼の背中に回って痛烈なニー・キックを畳み掛けるように食らわせた。

「……うっ……!」

声にもならない声を洩らし彼は落下した。

軌跡は一次の、直線関数のように真っ直ぐに、速度は打たれたボールのように増していき、終いには、激突。

障害物の崩れ具合がその衝撃の強さを物語っている。

「知らないんですか？ 心の目をすれば、相手が空を飛んでいてもかまえてその後の技が当たるのですよ？ 逃げるなんて愚かなこと

いやはや無知は命取りですね」

セファイドはほくそ笑み、スタールを卑下し、また笑った。

「っ……っ！」

サルコは思わず目を背けた。ジェクトもコイキングも、表情が重々しい。

流石のスタールも、あれだけの衝撃、立てる訳が

「あ、おとうちゃん！ おじちゃんまだたってるよ！ たちあがったよ！」

諦めかけてたジェクトだが、立つに器用でない両脚を必死に伸ばして起き上がったムクホークを見つけると声を張り上げた。

「本当か?! ……スタール、よく立ったな！」

それならこっちのもの そんな気持ちも含まれる、嬉しさの込もった呟きをサルコは付け足した。彼のしぶとさは想像を超えるのだ。

(く……くそっ！ 目が霞みやがる……！)

幸いというか、高さはそれ程無かったので、最悪な事態は免れた。しかしながら、彼は頭を強く打って脳震盪を起こしてしまったのか、目眩が付き纏うグロッキー状態になっていた。震盪は彼の視力をも奪いかけている。彼の視力は今、物体を捉えるのがやっとである。

「フラフラですけど、大丈夫ですか？ 未だチャーレムは傷一つ負っていませんよ」

二重にも三重にも桎梏シッコクに縛り付けられたスタイルであったが、ここでへこたれる彼ではない。しつこいようだがこの男は負けん気と根性が取り柄だ。

セファイドに挑発された彼は今の体調にも負けずに果敢に立ち向かっていった。

このままやられるのが、彼の中では許せなかったのだ。

「何度来たって無駄です。猫騙し！」

先刻と同様、猫騙しを仕掛けたチャーレムだったが、スタイルは怯まず燕返しを決めた。

「は……はンツ！ こちとら目が良く見えねえんだ……ざ……残念だったな……！」

燕返しを受けたチャーレムは一度スタイルと距離を取った。良く見えないのなら、遠ざかって見えにくくしてやるうという魂胆であ

る。

「……同じ手は食らわないうてことですか……ならばこれで白黒つけましょう！ チャーレム、跳び膝蹴り！」

物体が迫ってくる。スタイルは深呼吸をした。ここで決めなければやられる……視界が完全に閉ざされない内に奴を迎え撃つ

だが、どうやって今の彼の体力でチャーレムに競り勝とうとするのだろうか。正面から来ても彼が倒れるのがオチである。

そんな三人称の疑問を置き去りにして、彼は飛び立ち羽を畳んで加速した。

ブレイブバードという名の大博打を打つ為に

ほとんど彼は意識を手放しそうであった。ただ、生まれ持った意地と根性が彼を叱咤激励して繋ぎ止めていたのだ。

渾身のブレイブバードと跳び膝蹴りが今、ぶつかり合おうとした時

彼は軌道を上方に逸らして、チャーレムを飛び越えた。

チャーレムは、蹴る相手がいなかった為に、障害物にぶつかる。

「！ チャーレ……」

スタイルはその隙に速度を保ったまま宙返り。

そこから一気に上に凸の美しい放物線を描いて回転しながらチャーレムの頭上に向かって加速、下降、そして、衝撃音。

埃の支配が終わった先に立っていたポケモンは大翼を誇らしげに広げていた。

「……！　そんな……ことって……」

セファイドは納得のいかないうちに役目が終わり、その姿を消した。

「最後は……気持ちの強え奴が勝つんだよ……このこと……その腐りきった性根に……塗ったくっつけ……」

スタールはそれだけ残すとぐらりと体を傾け横たわった。

そんな彼を掬うようにフィールドは白い空間へと変わっていった。

42話 vsセファイド(スタイルの場合) (後書き)

今年はおっさんENDでした

では、みなさん良いお年を！

43話 vsセファイド（ソフィーの場合）

Circumstance of Sophy（ソフィーの場合）

「何処からでも、構いませんよ？」

セファイドは一目で、ソフィーは戦い慣れしていないということを見抜いた。何故ならば、彼女の構えは未熟であったのだ。前屈みになり、体に力が入り過ぎている。そこに気付くとは、それだけ伊達に実力者をやっていないということか。

「それでは……行きます！」

まず彼女は自分を鼓舞する戦いの踊り 剣の舞で攻撃力を上げた。彼女は自分の元の力では敵わないと思ったのだらう。

しかし、それは自分の力を過小評価しているというもの。フリーデインの防御する力は大分低いので、アブソルであるなら通常の力でも十分対抗できるのだが、如何せん彼女は知らなかった。

「羨ましい……その攻撃力、上昇分いただきますね。フリーデイン、パワーアップです！」

突如、ソフィーの漲みなぎった力が消え、彼女は脱力のあまり体勢を崩した。力が抜けた彼女の代わりに、フリーデインに力が湧いたのか、無い力こぶを誇示している。フリーデインの行動も謎だが、それよりも自分の力が抜けたこの現象を、彼女は理解できなかった。

「折角なのでこの攻撃力、生かしましょう。冷凍パンチ！」

冷気の拳がソフィーを襲い、拳に伴う悪寒にも似た寒さが彼女を包み込んだ。

「つきや……！」

彼女は避けきれずに拳を食らってしまった。鎌には霜が降り、その冷たさが分かるだろう。

とりあえず反撃と、彼女は空気の渦を作り出し始めた。アブソルを象徴するワザ、かまいたちである。

「む、フリーデイン。チャンスです！ミラクルアイ」

フリーデインはギュッと目を瞑り、そしてゆっくりと目を見開いてソフィーを見据えた。しかし、別段攻撃するわけもなく、そのまま彼女を見続けていた。

気味悪いと思いつながら、やがて彼女はかまいたちを発する。

「守る」

「あつ……！」

フリーデインは緑色の膜を張り、空気の渦はそれに触れた途端に霧散してしまった。渾身のかまいたちだったのに簡単に防がれてしまい、ソフィーは小さな声を上げた。

「1ターン潜伏型の攻撃はこの様に容易に防げますね。次はこちらです、サイコキネシス！」

これは自分には効かない　そう思ったソフィーだが、それは誤謬^{ユウ}であり、彼女自身の体が言う事を聞かなくなってしまったことがそれを証明していた。

体を締め付けられるような痛みにも、彼女は顔を歪めた。普通、悪タイプにエスパータイプの技は効かないはず。

「ミラクルアイ……！」

「何ですか、その技」

コイキングが耳慣れないワザの名をサルコに聞いた。彼女の知識は少しムラがあるのだろうか。

「悪タイプにもエスパータイプの技が当たってしまうんだ……まさかそんな技を持っていたなんて……！」

サルコはやつとの見せ場にもかかわらず、深刻そうな顔付きだった。安易に妻を送り出してしまった自分を責めているようにも見える。

「おかあちゃん……」

ジエクトも母親の身を案じている。しかし、彼女を信じて目を背けず、真っ直ぐ彼女を見つめていた。

「タイプだけじゃ勝てませんよ。分かりましたか？」

セファイドはソフィーに諭すように語りかけ、分かったなら結構

ですと、固い地面に打ち付けるようフリーデインに令した。

これはどうしたものか　彼女の投げ所となっていたタイプ上の有利さは消えて無くなった。

「リフレクター」

フリーデインは攻撃の後、ウィークポイントの防御力を壁で補填ホテンした。彼女は八方塞がりな感じが否めなかったが、それでも落ち着き、何かを念じた。

「このままじわじわとなぶ翳り上げてしまうのは、私の意向に反します。瞑想で上げてから一気にいくとしましょう！」

フリーデインは目を閉じ、集中し始めた。彼の「気」が高まっていたのが、戦いの経験の浅いソフィーにも十分伝わった。

彼女は夫の影響で瞑想の効果は知っていた。であるから、それだけはさせたくなかった。

彼女は止めようとフリーデインに走り寄った。今なら相手も無防備

「邪魔しないで下さい。フリーデイン、冷凍パンチ」

冷気がまたもや彼女を支配する。それは徐々に彼女の体力、体温を奪っていった。いくら戦う相手が無防備でも、指揮する者が気付いては意味がない。

その間もフリーデインは瞑想で能力が上がっている。ソフィーは何としてでもその補助技の連鎖を止めたかった。

すると、ふと彼女の元に突破口が天啓テンケイの如くうち浮かんだ。ソフィーは突然柄でもなく、髪(?)を掻き揚げ、相手を見下した笑い声を立てた。

「ぷっ……あつははは！貴方ってば、補助技ばかりやっちゃって、臆病者にも程があるわ！ そんなのに頼るなんて、攻撃に自信が無い証拠よねえ？」

誰が、彼女がこんな態度を取ると予測出来ただろうか。夫であるサルコでさえも、目が点になっている。

「お、俺の妻が……壊れた……」

「へんなの！ おかあちゃんじゃないみたい……」

しかし、彼女のそれは本性とかそんなのではなく、歴とした技である。

些かの羞恥を伴いながら彼女の成した技、それは”挑発”。受けた相手は怒りに任せて、攻撃しか出来なくなる。

敵はまんまと彼女の戦略に引掛かり、瞑想を中断して怒り出した。インテリな奴程こういうのに掛かりやすいのは、人間もポケモンも同じなのだろうか。

「どうしたのです、フーデイン！」

異変に気付き、セファイドはまさか……とソフィーを見た。彼女は鼻で笑い、更に舌を出してトレーナーをも巻き込んだ。

「ち、挑発ですか……ふん、いいでしょう！ フーデイン、サイコキネシス！」

フーデインはサイコキネシスの体勢をとる。

ここまでくれば、あとは技を出すだけなのだがいきなりソフィーは技を使おうとしたフーデインに鎌で切り掛かった。

これも、技。”不意打ち”である。相手が攻撃技をしようとしたと失敗する、読みが必要なこの技。

だが挑発をした今、読む必要が無くなり、しかも1対1。相手が替えてくる心配もないので、必然的に技は成功する。

知恵と名付けられた彼女らしい作戦であった。

「よ、よし！！ さっきのは何だかよく分からなかったけどいいぞ！」

「挑発＋不意打ちのコンボですね！」

「うん！ トレーナーもかかったみたいだよ」

「お前ら、解説者？」

けれども、リフレクターの仕業か、フーデインは皮一枚で耐えてしまった。

そして出そうと思ったサイコネシスが発動、ソフィーは飛ばされ地面に擦りつけられた。

彼女は擦過傷で体が痛くて動けなくなった。

「う……」

「先程は見事でした……しかし、これで貴方も終わるでしょう……」

フリーデイン、気合い玉!!」

フリーデインは諸手を上げてとてつもない気の玉を生成した。これは当たりにくい故、乱発するより相手を動けなくしてから当てた方が確実によかったのだろう。

これを食らえばジ・エンド……なのだが、何故だか彼女は不敵な笑みを湛えていた。

理由は簡単、発射というところで強力な念がフリーデインを貫いた。集まった気は弱まり、消え、フリーデインは諸手を上げたまま　そう、正に”お手上げ”状態で倒れた。

「っ?!　一体何を……!」

何が起こったのか分からないままセファイドの分身は消えていった。

「……保険を掛けておいて正解でした」

彼女は未来予知で攻撃を準備していたのだ。先刻念じていたのは、その為。

「知識に埋もれていては、いざと言う時に息が出来ません……大事なのは知識を掘り起こして活用する事……私はそう思います」

ソフィーは体の痛みが引いてきたので何とか立ち上がり、既に見えない相手にペコリと一礼した。

「良い刺激になりました。お相手ありがとうございました」

43話 vsセファイド(ソフィーの場合) (後書き)

敬語同士ややこしいw

そしてダメージの加減がめっちゃめっちゃだい(^ q ^) w

44話 からをやぶる (前書き)

ちよい短めですー。

44話 からをやぶる

こうして3匹はまた全勝し、顔を合わせる事が叶った。セファイドは色々と勉強になりましたと残し、伏した。

「ソフィー、良くやったな！ 体は大丈夫か？」

改めてサルコはソフィーの勝利と無事を喜び、彼女に抱き付いた。

「ええ、少し体が痛みますが、大丈夫……ありがとう、あなた。それより、スタールさんが……確か白い空間では倒れてらしたし……」

自分の体にしっかりと固定されているサルコの細くも逞たくましい腕を少し緩めてもらい、ソフィーは先程からふらふらしているスタールを見た。

「……ん？ ……俺様なら……もうらいじょうぶらせ……」

呂律ろりつが回っていない時点でアウトだろう。彼は頭を片翼で押えて蹠ふみめいた。

「つつ……やっぱ嘘ら……ここれいいから、ちいと休ませてくれい……頭が……流石にこたえたぜ……」

彼はそのまま横へばたりと寝そべった。

3人目となると流石に厳しくなっていくのが、バトル後の彼らの状態を見て分かる。

フェロックも疲れ切って壊れたバネのように伸び伸びになっている。体を振り過ぎたのもあるかもしれないが。

「あの……皆さん有り難うございました」

戦闘後の皆の様子に押され気味に、おずおずとコイキングは頭を垂れた。仲間は戻らなかつたものの、捕まらないように自分を守ってくれたのだ、それだけでも優渥ユウアツクの極みである。

「ああ、俺が言うのも何だが、全然構わないさ」

「皆さんの戦いを見て勇気が湧きました……私、仲間の分まで生き延びようと思います。もう泣きません！そして、いつか仲間が帰ってくることを信じて待っています！」

この時初めてコイキングは頭の王冠に恥じない表情を見せた。泣いてばかりいた彼女の姿はもうなく、目には生気が戻っていた。心なしか、鱗も瑞々（みずみず）しい。

「その気持ち、忘れないで下さい。私達がきつと、きつと貴方の仲間を助けますから」

ソフィーは一字一句を刻むように力強く、コイキングを励ました。彼女も一戦を切り抜けて、目が以前よりも燦然としている。彼女は
一皮剥けて逞たくましくなった。

「はいっ……！」

コイキングは何もかも吹っ切れた良い返事でソフィーの励ましを受け取った。今となっては信じられないかもしれないが、絶望
少し前のコイキングにはこの2文字しかなかったのだ。

「おかあちゃん、おとうちゃんよりかっこよかったよ！」

「んなっ……ジエクト！」

白い空間でうろたえまくった父親と、不利な状況になっても冷静に活路を見出した母親、どちらがかっこいいかと訊かれれば、その差は歴然。残酷にも、ジエクトは正直な気持ちを口にした。サルコは焦るも焦る、思わず抗議するかのようになが子の名を叫んでしまった。

「ふふ、ありがとう。でもね、お母さんをこんな風にしてくれたのは、お父さんのお陰なのよ」

「ふうん、じゃあおとうちゃんもカッコいいことにしておくね！」

「ありがとな……」

妻のフォローによって、何とか父としての面目は少し取り戻せた。サルコは、もっと息子に良いところを見せようと決意し、自分の両頬をパシンと叩いて気合いを入れた。

彼らはしばし休憩して、（その間はサルコが周りを警護した）皆ある程度回復してから、セファイドから石版を抜き取ってコイキングと別れ、次の町へと向かった。

今度はどんな出来事が彼らを待ち受けるのだろうか

45話 焦燥と嫌悪、時々戯れ

3人目までもが倒され、カイドウはもう怒る気も失せた。それよりも、小玉を持っていないポケモンの足取りがしっかりしていることを気に掛けていた。

「2匹の力が弱くなっている……装置の出力をもっと上げる！」

「カイドウ様、これ以上は無理です！ きっとポケモンが疲れているのでしょ……」

「疲れ……？」

神と言えども、生き物だ。数日にして飲まず食わずで力を垂れ流しにしているのは疲れるのも指掌である。その上、装置の動源力もある3匹のポケモン。彼らは2匹の自らの感情、記憶、意志を遮断して、カイドウの思うままになるように各々の司るものを塗り替えていたが、それもそろそろ限界にきていた。

「一度装置を止めて休ませてはどうでしょうか……？」

手下が恐る恐ると提案する。カイドウは先程から発作的に怒っているのです、反対されるかと思っただからだ。

すると、カイドウは軽く頭を片手で押さえ、1つ深い溜め息を吐いてから手下と向かい合った。

「……あの女を呼べ」

「あの女 牢屋にいる少女のことですか？」

「それ以外に何がある……。至急連れて来い！」

聞き返されるのも煩わしい。カイドウは手下を怒鳴りつけた。

「り、了解しました……。っ」

「……。！ おーい、シュウ！ 誰か来るよ！ 寝てると叱られちゃ
うよーっ！」

「ううん……。俺は寝てないぞ……。寝てな……。っ！ だから名前違う
！俺はヒイラギだったの！ 音読みするな！」

「あ、起きた。よしよし、目覚まし代ゲット」

「めっ目覚まし代っ？！」

ヒヅキとその監視員 ヒイラギという名の男はすっかりという
か、いいコンビになっていた。

四六時中付きつきりなので、そういうことも有り得ないこともない
のだが。もう付きつきり暇すぎて、ヒイラギは気をいて居眠りを
決め込んでいた。それをまあ、阿漕な少女は見過ごさ善ない。手を
鋼鉄の間から突き出しておねだりのポーズである。

「この前組織の愚痴言ったら口止め料とか言って10万請求したば
っかだろ……。っ？」

ヒイラギの言っていることからうかがうと、ついつい本音がだだもれになっていた彼は、随分とヒヅキに弱みを握られているようだ。大人しくそれを胸三寸に収めてくれる程、彼女は甘くない。

「いいのいいの！ 半分冗談だから！」

「（半分本気なんだ……）ところで、何だその装飾品…… 牢屋を明るくするなよ」

「えへへ、鉄ばっかり飽きちゃって」

彼女は本来ポケモンに付けるであろう、コンテスト用の綿だの炎だの何だのがあるだけ取り出して壁に貼り付けていた。センスは問わず、まるで幼稚園の装飾である。無味乾燥な空間に飽き飽きし、手慰み程度に始めたはずが、嵌まったらしい。

「どうせコンテストしないしさ」

ぼつりとヒヅキはそう加えた。一瞬彼女の手が止まり、自分の言ったことについて少し考えていたが、すぐに強く頷いて吹っ切れたように作業に戻った。

「だからってそんな利用法……」

「ちょっと」

ヒイラギがヒヅキの奇行(?)を咎めていると、いつの間にか先程カイドウの側にいた女性が、ヒイラギの背後に腕を組んで立っていた。髪を後ろに纏め、白衣にロングスカートという格好である。

「うわっ……ヒサギ！ 何だよいきなり」

その、ヒサギと呼ばれた女性はいかにも愉快的な二人の様子を見て、溜め息。

「ハア……あなたはいいわねー……その少女を見てればいいんだから。こっちはカイドウ様の顔色を窺ってばかりで毎日寿命縮めているのに……」

「こっちもこっちで割りと大変だよ……」

「まあ、いいわ。その少女。カイドウ様がお呼びなの。来なさい」

自分も大変だと言うヒイラギを半ば無視し、彼女はヒツキに話を切り出した。カイドウの名を聞き、ヒツキは明らかに嫌そうな顔をしている。あの空間にはいきたくない。そんな彼女の意思がひしひしと伝わってくる。

「……カイさんの所行くぐらいだったら牢屋の方がいいもん」

その拒否感の本物らしく、誰も手の届かない牢屋の奥で、ヒツキは体操座りをしている。

「事が終わったらここに帰すから。早く行かないと……ここんとこるカイドウ様も不眠不休だから苛立ってて何するか分からないの。ね、お願い」

ヒサギは切々とヒツキを説得した。相手が一触即発の状態でも、もし逆らったならば、自分もつと不利な状況に置かれるかもしれない。

い。職業（？）柄か、有利不利の関係に人より幾らか鋭い彼女は、少し目に不安を浮かべながらもやおら牢屋の入口まで歩み寄った。

「……約束だよ」

ヒサギはホツとしてから何か言いたげにヒイラギを一瞥し、やはり一言。

「うまく手懐けたわね、リコンヒイラギ」

「だっ?! ちがっ……口 コンじゃないっ!!」

「ロリ ンって何?」

「あなたが気をつけなきゃいけない人種のことよ。……そんなことはいいから、行きましょう」

ヒツキは、勝手にロリコ 扱いされて両手両膝を地に付けて頂垂れているヒイラギを気にしながらも、ヒサギに手を引かれてカイドウがいる部屋に入った。

45話 焦燥と嫌悪、時々戯れ (後書き)

伏字によってロコンじゃないという奇跡の文が。あんたがロコンでないことは、見りゃ分かる

最後のヒイラギの格好はいわゆるorzですね。直す前はそのままorz状態と書いたあばばば(どうした)

46話 不可思議な力

来るとヒツキは鳥肌が立った。まだ全然見慣れない得体の知れぬ機械に、無数のモニター……そして中央の2匹のポケモン 全てが彼女を襲った。

怖い……

「カイドウ様。少女です」

「来い」

前より不気味さを増したカイドウに腕をぐつと掴まれ、反射的に彼女は身を引いた。

「何を怖がる……俺はお前にこの2匹の様子がどうなのかを聞きただけだ」

「様子……」

2匹は感情を抜かれているが、ヒツキには分かった。2匹を見た瞬間に、筆舌を超えた、内から凝り固まって湧き上がってくるような憂鬱な塊、靄もやとも霧とも言えないような悲壮な粒子が生まれ、彼女に訴えかけた。

「凄く疲れてる……凄く怒ってる……？」

「そうか」

カイドウの返事はあまりにも素っ気なかった。自分の意思で行動するのも叶わず、想像を絶する程の量の力を強制的に流し続けられている2匹の気持ちなど完全に無視である。気持ちという概念を抜かれているとはいえ、こんな仕打ちはない。ヒヅキは彼を睨み付けた。

「そうかって……！ もうやめてよ！ こんなこと、誰も望んでいないよ！」

「ならば少し休ませる。装置を止める」

「了解しました」

「休ませるだけじゃなくて、自由にしておいてよ！ 私の意見も聞いてっ……！」

「そこ、どいて」

カイドウに声を張り上げて訴えるヒヅキを、ヒサギは小物をどけるような感覚で軽くあしらった。優しそうに諭した時とは別人のように黙々と機械の作業に取り掛かる彼女に、ヒヅキは彼女の袖口を掴んだ。

「ねえ、ヒサギさん……！！！」

「……ここではあの方が法律なの。我慢して」

ヒサギは彼女にそっと耳打ちしてその手を解いたが、合点のいかない理由で自分の言わんとしていたことが早々に撥ねられたので、彼女の頭にはまるで入っていなかった。

コントロール装置は外されたが、脚などは拘束されていた。万が一のことであろう。そして、動力源が外されたことよって記憶、感情、意志は戻った。

正確に言えば、一応、戻った。彼らはそれ程疲弊していたのだ。

「ツアイト……」

「……ひびき……か……」

声を発するのも億劫、ましてや見下ろして彼女を捉えることは重労働だろう。

「わ……私達は……何を……？」

「ううん、何も言わないで……っ……う……」

ヒヅキは彼らのあまりの様子に声を詰まらせた。

苦しんでいる彼らに何もしてやれない……そんな想いもあったが故に、彼女は耐えきれなかった。

「ヒヅキ……つつたな……泣いてないで……教えてくれ……いたく体が重てーが……俺達……どうなつてんだ？」

パルキアも同様、喋るのがやっとである。2匹共意識を失わないあたり流石であると言ってもいいが、それでもこの疲労は、途方もないこの世の歴史を見届けてきた彼らでも、経験のない程のものであった。

「……最低でも3日間……あなた達、3日間は力を使い続けて

いたのよ」

「3日も力を……これ以上だと、ヒツキとは……避らぬ……別れと……なりそうだな……」

ツアイトは覚悟を決めたように目を固く閉じ、ゆっくりとそう告げた。

「サラヌワカレ　？」

聞き慣れない単語に、ヒツキは小首を傾げる。ただ、別れという部分が彼女を不安にさせていた。

「……死に別れってことだな……勿論、俺も、あのチビ3匹も……」
アグノム、ユクシー、エムリットも地に伏せている。氣息奄々とし、今にもその活動を停止しそうであった。

「そんなっ……嫌だー!!」

少女の目にまた涙が溜まった。死に別れ　少女にはとても信じられるような言葉ではない。

「ねえ、どうにかしてよ!!　このままだと5匹共、死んじゃうよ?!　こんなことひどすぎるよ!!」

「その位想定してある。死なれてはこちらも都合が悪い。今回復用の回路を準備しているから、暫く待っている」

「あ、回復できるの……?」

すぐにカイドウの答えは返ってきた。それはヒヅキを少しは安心させるものであったが、それは単に自分の計画の頓挫を防ぐ為であり、もうそう顔に書いてあった。

回復したらまた利用されるのは明らかなので、彼女の心の中は悲喜交^{きこせ}として波乱の状態に置かれている。

数分後、回路は完成した。すぐさま5匹に回路は取り付けられ、彼らは徐々に元気になってきた。ヒヅキは一瞬その回路が欲しいと思ったが、すぐに打ち消した。

不純な動機で作られたものなど 欲しくない。

「…………どう？」

「…………悔しいが、良好だぜ。さっきの怠^{だる}さが嘘みたいだな」

「同じく…………げに、忌みじき機械だ」

2匹の、前に傾いていた姿勢は元に戻り、ものの言い方もしつかりしている。他の3匹も、体の軽さを感じたのか、元気に飛び回っている。

「良かったあ…………でも、また利用されるんだよね……………」

「あ?! つざけんなよ!! あんな腐れ野郎にまた利用なんてされてたまるか! こんなところぶっ壊して脱出してやる!! な、兄貴!」

パルキアは鼻息を荒くして既に腕に力を込めている。だが、ツアイトは俯き、何かを考えていた。

「いさ、うまくいくかどうか……これを壊すのは斜めならぬ力が必要ではないだろうか……なかなか事態が悪化してしまうのでは？」

かなり低い、ドスの利いた声で、ツアイトは重々しく陳述した。威圧感を振り撒き、普段は使わないような言葉まで飛び出ている。

「ツアイトが所々何言ってるのか分かんない……フンイキ違っし」

「変わってねえなー、兄貴……。兄貴はいつつも言ってる事は冷静なんだが、機嫌悪いと時々こうなるんだ。つまりだな、却かえって下手にいくと良くない方向にいくんじゃないかっていう事だよ」

「ツアイト、やっぱり怒ってる……？」

「当たり前だ……あのにくさげなる心持てる男に我が御身に生えし金剛を突き刺して血祭りに……許しを乞うても露許さじ……」

「あ、兄貴……怖いって」

ツアイトはそれでもかなり抑えているが、相当怒っているようだ。頭から煙が出てるのかという位。兄の様子にパルキアも少し引いている。

神のプライドか、流石に温厚な彼も、この扱いには我慢ならないのだろう。

「2匹はどうだ、小娘」

「……元気にはなったって言ってるけど、怒ってるよ！特に、デリアルガの方。パルキアも、ここを壊すって！みんな回復したからこっちにも勝機はあるんだから！！ 神様に勝てっこないよ！」

「どうかな……怒っているなら鎮めるまでだ」

「鎮めるって……どうやって？ エムリット達はあちこち飛んでとても言う事聞いてくれないよ？」

すると、彼は無言で2匹に向かって手を翳した。

「……何してるの？ ねえ、ヒサギさん分かる？」

「私も分からないわ……カイドウ様がこんなことするところを見た事ないの」

カイドウは集中しているようだった。何人たりとも、この集中力を途切れさせることはできず、彼は自分の世界に没頭している。

「カイドウ様……？」

「黙っている」

「は、はあ……」

やがてカイドウの紅い眼は光り、体の線に沿って不思議なオーラが見受けられた。

「？ ……な……急に眠気が……っ」

「兄貴、大丈夫……う、俺も何だか眠い……」

翳された手の先にいた2匹の動きがおかしい。鈍くなっているの

だ。

そして、2匹の4つの瞳は閉じられ、彼らは深い眠りに就いた。

「催眠術っ?!」

「これで、鎮まっただろう」

少女は訳が分からなかった。催眠術なんて、人間には使えない。希に使える者がいると言うが、彼女はそう言った類の話には寧ろ、寡信多疑、という感じだった。

ふといつしかヒイラギが零したことが彼女の脳裏に蘇った。

「……そんなワケ、ないよね……」

「小娘、お前はもういい。戻っている」

彼はヒツキにも手を翳す。彼女は突然猛烈な眠気に襲われ、その場で崩れるように眠ってしまった。

「持っっていけ」

「……っはい……!」

ヒサギにヒツキを牢屋に戻しに行かせると、カイドウは飛び回る3匹も眠らせ、各々タブーとされる行為、見る、触る、傷つけることなく装置に据え付けた。触らずにどうやったかは、彼自身しか知らない。

「仕切り直しだ。しっかり働け」

カイドウは一人でそう呟く。それに呼応して、覚醒された2匹は再び咆哮を上げた。こうして、混沌とした世界が再開された。

46話 不可思議な力（後書き）

どうもこの時は古典の勉強真っ最中だったみたいですが
ちゃんと勉強しろって話ですが

47話 黒獅子と桃玉 (前書き)

グラン視点です。故、中二病全開d(ry
これからのグランサイドは彼視点で行こうと思います。

47話 黒獅子と桃玉

俺は霧を切り抜けてカンナギと言う所に来た。

……今洒落だと言った奴、砕くぞ。

フン、見るからに田舎だな。中央には壁画付きの洞穴と祠ミヤが存在している。

唯一の見物なんだろうが、つまらん。入っている俺も俺だが。

少し進むと、また壁画。意味ありげな何かの3つの生命体とそれらの中央に光る物体。

あいつらに似ている。……名前など忘れたが。

いつまでもいても仕方ない、俺は表に出た。

表の壁画もあいつに似ていた。

思えば今見た絵のモチーフが全部奪われていることに気付いた。

かといって、この異変と結び付ける気概は持たん。偶然だろうと片付けておいた。

ふと俺は表の壁画に彫られている文字を見付け、何気なしに読んだ。いつ身に付けたか分からないが、俺だって人語を読める教養くらいある。

時間とは止まらないもの 過去と未来そして今……

空間とは全ての広がり そして心も空間……

時間は止まらないという当たり前のことを鬼の首を取ったように彫っている古代の人間に腹が立った。

昔、こつ何気なく刻んだものでも風化せずに残っていれば、価値の

あるものとして尊び、何かと特別な扱いをする現代人にもだ。お前達は時間が止まって見えていたのか。それとも、古代人みたいな輩でも時間の概念があつて驚いたのだと、見下しているのか。いずれにせよ、ろくな解釈しか俺にはできない。

空間の方もまた当たり前のことを彫っている。心を空間と捉えているところ、少しは時間より捻りを加えてはいるが。しかし、俺は心の空間は有限だと思う。いや、実は無限なのかもしれない。だとしたら、湧いてくる感情も無限だ。そんなものに振り回されていれば、とても自我を保つてはられないだろう。だから敢えて有限と無理矢理定義しているのかもしれない。感情なんて最小限に現れれば十分だ。

どうも読み損が否めなかった。せいぜい歴史に埋もれるがいい。俺はこんな無味乾燥の所を出ようとした。

「ふふふ……もう逃げられないぞ」

「いや！ いや！ あっちいつて！」

…… タイミングが悪い…… 人間だ。

こんな所にもいたとはな。ピンプクが狙われている。だが俺にとつてはどうでもいい事。生憎俺には惻隱ソクインの心がない。悪く思つなよ。

「ん？ レントラーか……こっちの方が捕まえ甲斐があるな！」

面倒なことに俺に気付きやがった。

…… チツ…… 下衆め。

俺は奴に電流を浴びせた。殺すものか。こんな奴を殺したら恥だ。

俺を捕まえるなら、俺が牙を剥きたくなるような強さを纏って出直してこい。こちらも本気できてやる。

そんな絵空事を言いながら、俺はこの泥人形を倒し、さっさと次へ行きたかった。なのに、何故だ。何故進めん。

振り向くと満面の笑みをしたピンプクが俺の尻尾を引っ張っていた

47話 黒獅子と桃玉 (後書き)

途中何言ってるのか分からなくなってきましたorz

48話 振り回される黒獅子

ピンプクのくせに凄い力だ。一步も前に進めない。
鬱陶しい。放せ。

と牙を剥いて威嚇しても効果無し……となれば実力行使で……

「おにちゃ、ありがと。わるいニンゲン、きらい。おにちゃ、だいちゅき！」

奴は目を輝かせて俺の尻尾に抱き付いてきた。

……惑わされるな。俺は子守をする気などさらさらしない。そもそも自分の障害になるものを除けただけであって、助けるつもりで倒した訳ではない。

俺は尻尾を揺すってこの煩わしい俗物を落そうとした。

が、落ちるところか俺の尻尾から攀よじ登り背に乗った。

心底鬱陶しい。下りる乗るな触るな引っ張るな ……っ

「ガアアッ!!！」

俺は子供だろうと容赦も酌量もしない。これ以上好き勝手すると、ただでは済まさん。

そういった意味でもう一度威嚇。だいたいこれで俺に無防備で寄ってくる餓鬼は泣くか失禁かして逃げ出していく。仲間を追う形となっている俺は、兎に角時間が惜しくてこの方法を使用した。

「……おにちゃ、おもちろいかお！」

逃げるどころか、笑顔でざっくりとそう切られた。貴様の特性は

かいらきばさみか。

俺が馬鹿みたいに見えるから、この特性は嫌いだ。だいたい、俺に威嚇されて攻撃する力を殺がれないのはどうかしている。奴らは恐怖心というものがない。そう、この俺の手を煩わせているピンプクのように。

「……………うぐっ……………」

そう思っていると、突然息が詰まった。

ぎりぎり、紐がこすれながら俺の首を絞めていく。いよいよ苦しくなり、意識すら朦朧とした。

「おにちゃ、ぶれあ とおんなちおんなち！ ひろったの？ ひろったの？」

何事かと思えば、ぶれあ、と言つらしいピンプクが俺の首に下げていた玉を手繰り寄せ、無駄に眼を光らせて興奮していた。

よく見ると奴も腹のポケットに玉を忍ばせていた。

「……………首っ……………を……………絞めるな……………！」

傍から見れば人畜無害のこのピンプクに絞め殺される前に、俺は文字通り声を絞ってその凶悪な力を俺に向けることをやめさせようとした。

幸い、ピンプクは直ぐに気づいて手を離れた。それで謝るかと思いきや

「ちれいちれいだね！」

臆面もなく、笑顔を俺に浴びせてきた。

……いい加減黙らせた。もう、奴の行動の何もかもが腹立たしい。手に掛けてやろうとも考えたが、そうしているうちに新たな人間が来るかもしれない。それに 奴のこの力は侮れない。万が一のことだが、返り討ちにされるかもしれない。

選択肢は一つ、俺は走った。こいつが口を利く暇がないくらいにな。こうなれば、奴は存在しないことにしてこのまま次へ進む事にする。

じき剥れるだろう。

俺の眩きは夕闇の風に飛ばされていった。

49話 のんきな奴ら

辺りは早々と暗くなり、気付けば夜。下手に動くとは危険なので、テンガン山を抜けたサルコ一行は207番道路の道中で休んでいた。水辺がないのでフェロロックには気の毒だが、そんなことも微塵も感じさせない位、彼は仰向けになって爆睡。

そしてサルコはまた彼に代わって余分に見張りをする羽目に。

「ふあ……今日はバトルも激しかったから仕方ないけど……こいつに見張りは無理かなあ……」

しかし、見張りと言っても夜間は人間も殆ど活動していないので、あまり意味はないのだが……

その少人数に全員捕まってはこの小説は終わってしまうので念のため。

「あいつがいたらなあ……でも、寝ないといつもより不機嫌だしな、あいつ……」

1匹だけ起きているせいなのか、独り言が多いサルコ。つつい自分が追放したポケモンにも思いを馳せてしまう。

そうこうしている内、スタールが見張りをする時間帯になった。

「おい、スタール起きろ。時間だぞ」

サルコは彼を起こした……が、無反応。揺すっても抓っても擦っても叩いても蹴っても撫でてでも押しても引いても何をしてでも無反応。スタールは少し動くだけで完全に夢結び状態である。

「…………マジで…………？」

サルコは蒼白気味にそう呟いた。

おっしやる通り、マジです。リーダー、頑張れ

例えそう声を掛けても、彼は肩を落とすだろう。

「ま、まあこいつも大分ダメージ受けてたし、頭の怪我の方がまだ心配だしな。うん、仕方ない仕方ない…………はあ…………」

いくら落ち込んで、リーダーに我慢はつきもの。仲間が不都合なことになっても自分で埋め合わせなければならぬのだ。

パーティーの古株である彼に背負わされた宿命であろう。彼は無理矢理自分を納得させ、長い長い夜を過ごすのであった。

結局完徹。お陰で彼はパーティーで一番最初に朝日を拝むことができた。

「んっ…………ふああーあ…………つとくらア…………おう、サル公。いい朝だな！」

そして、彼の次にまず起きたのはスタール。大きなあくびをして呑気に挨拶なんてしている。そりゃそつちはいい朝だろうが、リーダーはもう夜と朝の観察までしたのでいいも悪いもない。

「…………スタール、昨日見張り…………」

背景に人魂が飛んでいそうな雰囲気を纏いながら、サルコはゆらりとスタールに寄り、体言止めで訊いた。

「おおう、わりいな。ちいと昨日は無理だった。起きようとしたら頭痛くてよ、今は大丈夫だけだな。さ、今日も張り切って行こうぜ！」

スタールは彼の問いをあっさりと投げ払い、大きな翼でサルコをばしばしと叩いた。

(何で一晩でテンションがここまで戻るんだこのオヤジ……)

と、サルコがスタールのテンションに引いていた時であった。

「うわああああっ!!！」

「「?!」「」

突然、今まで怖い物無しで開きになっていたフェロックが目を覚ますなり叫び、何かに逃れようとするかの如く身を擦って暴れた。た。

「どうしたんでえ、海蛇！ 雷に打たれた夢でもみたのか！」

「フェ、フェロックどうしてそんなに暴れ……!!！」

「景色が、景色があー!!！」

目に涙を浮かべながら、彼は必死に自分に起こった異変を訴えた。このまま分かなければ、わけもわからず破壊光線を放ちそうである。

「景色……あつ！ 小玉！ またおかしくなつたんだな！ ちよつと大人しくしろよ……」

景色の言葉でサルコはぴんときた。どうやら2匹が復活したことよつて再び強力な歪んだ世界が形成されたので、小玉を無くしたフェロックはもろにその影響を受けてしまったようである。

サルコは以前に余分に取つておいた小玉を付けようとした。

「ち、近寄れない……」

しかし、いくらフェロックのような性格でも、今の事實はギヤラドスが暴れているということであり、大人しくさせるのは無理な問題である。近付くのは自殺行為で、下手すれば体ごとその巨体にさらわれてしまう。

「どうすんでい、サル公。ありやあ、近付けねえぜ？」

「うー……どうすると言われ……わああっ?!」

混乱したフェロックは、どうしようかと考えている最中のサルコに噛み付こうと襲つてきた。彼は咄嗟に横っ飛びで避けたが、その拍子に持っていた小玉が手元から離れた。

その行き着く先は

「「あ」

フェロックの口の中……もつと言えは胃の中であつた。サルコを飲む代わりに、彼は小玉を飲んだのである。

「玉を飲みやがったコイツ……」

呆然としている2匹と対照的に、フェロックはいつもの優しい(?)顔付きに戻った。

「うええん、怖かった……ありがとう」

小玉は体内でも発動するらしく。その効果は敵の物ながらアップレである。

しかし、いつになればフェロック自身の方が怖いと自覚するのか。彼がそれを知るにはまだ経験不足なのであろう。

「よかった……んだけど、いいのか、あれで？」

「いいんでねえの？ ケツから出てこねえ限りは無くさねえし」

今は無邪気に花なんか眺めているフェロックに呆れながら、スタールはさり気なく下品なことを口にした。

「おまつ……！ もうちょっとオブラートに包めよ！ いくらなんでもその言い方は……」

「本当のことだねえの。他にどうい言う言い回しがあるんでい……これでもおさえた方だぜ」

確かに事実だが、言わなくてもいい気がすると思っただ。

「ねえ、何2人でヒソヒソ話してるの？ 僕、暴れたらお腹空いちやった。早くご飯にしようよ……」

そう言ってフェロツクはポーチの中を髭で器用に漁^{あさ}った。

2匹も、事態は収束したので、ギャラドスが暴れていたのに未だ寝ていた母子を起こした。

ある意味凶太い神経の母子を起こしてから、今皆は朝食をとっている。

暫くすると、ジェクトはラブタの実を嫌そうに突っ突き始めた。

サルコが、食べ物で遊ぶなどと注意すると、彼は自分の父をじっと上目で見つめた。

「おとうちゃん、このにがいのいや……」

突っ突いていたのは、彼の嫌いな物であつたらしい。だが、それで「ハイ、ソウデスカ、タベナクテイイヨ」で済んだら教育に悪い。サルコは敢えて厳しい表情で首を横に振った。

「駄目だ。食べないと大きくなれないぞ」

「おとうちゃんだつて、にがいのきらいなこと、ぼくしってるよ！
それじゃーおおきくなれないよ！」

「うっ……」

「ははッ、こりゃ一本取られてんな、サル公！」

我が子に言いくるめられ、サルコはぐうの音も出なかった。会話の通り、この父子は2匹共苦いものが苦手である。父親として、子どもの好き嫌いを直してやりたいものだが、自分がこれなので示しつかないでいた。

「ソフィー、これ食べてやってくれ、序でに俺のも……」

サルコはすっかり戦意喪失し、ソフィーに木の実の処理を頼んだ。打たれ弱い彼女は苦いものが好きなので、今まで彼女は仕方が無いなど思いながら2匹の分も食べていた。

しかし、今日の彼女は渡された苦い系統の木の実に振り向きもせず、分けられた木の実にも全然手を付けていなかった。

「ソフィー、どうした？ さっきから食べていないじゃないか」

「……少し食欲が無くて……あ、でもよくある事なので大丈夫です……」

サルコがソフィーにそう問うと、俯き加減に何かを抑え、彼女は少し影の掛かった笑顔でそう答えた。

「そうか？ 無理するなよ」

「ソフィーさん食べないの？ じゃ、僕が食べるー！」

「手前っ！ ずりいぞー！！ 俺様にもよこせ！」

ソフィーが残した分に飛び付く2匹。幼いフェロックはともかく、いい歳したおっさんのスタールまで参戦するのはいささかみっともないのではないか。

「お前ら……」

「あ、ニンゲン！」

『！』

今まで普通に苦いのが嫌いだの、木の実よこせだの騒いでいた彼ら。人間に狙われているということを完っ全に忘れていた。もう人間も活動を始めたというのに……しかし、その呑気さが救いにもなっていると言えはそうではあるが……

ジエクトの一言で、皆に緊張が走った。

だが、人間の方はちらりとこちらを見ただけで、慌てて他の場所へと移っていった。

「あれ、いつちゃった……」

「あちこちで俺様達が暴れまくっているからな、結構有名になっているでねえの？ あの様子じゃア、恐れをなして逃げ出したんだよ」

と、木の実をむぐむぐと口一杯に頬張りながらスタール氏。

「……………どうでもいいことなんだけどさ、口一杯にして喋るなよ！ 顔変形してんじゃねえか！ ……ああもう、お前ら威嚇コンビのせいで、すっかり最近ギャグ主体じゃないか！ 初期のシリアス返せー！」

猿、吼^ほえる。しかし、それは虚しく木霊するだけだった。

「……………もういい、さっさと次行くぞ。朝の一口マだけでどんだけ長くするんだよ」

「あゝ、まだ……………」

「何も言つな！ 行くの！ 前進むの！ 命令だ！」

「ちえっ……」

巨体故にまだ食べ足りず、不満を漏らすフェロックを、リーダーが半ば強引に連れ、一行はクロガネに到着した。

50話 炎闘戦争勃発？

クロガネは炭鉱の町。少し埃っぽいが、博物館も建つ立派な町である。

やはりここにも人間がいる。それに加えて、町の中央辺りに外套を身に付けた人型の後ろ姿も。何故だか蹲うすくまっていて、その先に人間がいる。
徒ただならぬ雰囲気だ。

「どうしたんだろ、あの人間……」

「いや、あれは人間じゃ……っ！！」

しつかりと立っている人間の手にはボール、見事という表現は不適切だが、その人型は吸い込まれてしまった。

「！ やっぱり！」

中身の入ったボールを持って人間は満足そうにしていたが、こちらに気付くと顔色褪せて逃げ出そうとした。スタールの言った通り、もう皆は、有名、になっなっていた。

アイツらに下手に構うとヤバい そんな彼らなりのネットワーク
くだらうか。

「待てっ！」

サルコはあっという間に彼に追い付き、追い越し、通せんぼした。

「う……ど、どけえっ！！ お前も捕まえるぞ！」

人間はボールを突き出したが、猿は全く動じない。じっと睨み付けている。彼の炎がユラリと揺れた。

人間の方は完璧にビビってしまっている。俺達はそのまでの脅威なのかと、サルコは笑いを噛み殺しながら更に睨めていた。

少し湧いた悪戯心のままに、彼が少し口から炎を漏らすと、人間は数十センチ程飛び上がった。

そうやって遊んでいるものだから、やがて人間は自棄になって襲いかかってきた。

「やっと来たな……」

仕掛けたら、負け。

彼は人間の足を払って転ばし、ボールを奪った。

「これはオマケな」

後頭部に強烈な肘鉄。そしてゴングは鳴り、哀れな男、ノックアウト。

「おい、取ったぞー」

「やったね、おとうちゃん！ はやくなかからだしてあげなきゃ！」

サルコはボールを放り投げ、捕まった者を解放した。ボールの光に包まれ出てきたのは、長身でスラリとした、しかし逞しさのあるバシャーモだった。

「ありが……うっ……」

そのバシャーモはお礼を言おうとしたが立てずにまたしゃがみこんでしまった。サルコはさっきの人間から小玉を取ってバシャーモに渡した。

「ほら、これを掛ければ大丈夫だぞ」

バシャーモはそれを掛けると、目を見開いて立ち上がった。信じられないといった感じが、あの時のサルコ達と同じ様な表情をしている。

それにしても、完全に立ち上がると改めて立派である。盛る炎を思わせる真紅の体毛に包まれている全身は砂埃の中でも十分に映え、透き通るような象牙色アイボリーの髪(?)は紺色の外套と共に風に靡なびいて綺麗である。

その姿にサルコは同じタイプとして少し嫉妬したとか、しないとか。

「誰だか知らないけど、ありがとう……」

「いってことよ、兄ちゃん。困った時はお互エ様でい！」

「え……私、女よ。兄ちゃんって」

スタイルには悪気も他意もなかった。彼が兄ちゃん呼ばわりしたのも、理由がちゃんとある。目の前のバシャーモはV字の角が長く、髪も腰辺りの長さであり、そしてそれらの特徴はオスに見られるからである。

「お、おお、女あ?! んなら、名前は何てんだ!」

「ええ、私はジュデイス。ジュディーってみんな言うけどね」

スタイルが素頓狂な声をあげて名前を訊くも、バシャーモは澄ました顔で名乗った。

「ジュディー……何か人間みたいな名前だな」

「源氏名かもしれないねえ……その道行ってるんじゃないかねえのか？」

「そこ、聞こえてるんだけど。違うわよ」

また始まった、リーダーと副リーダーのひそひそ話。あらぬ疑いを掛けられ、その被害者のジュディーはスタイルを睨み付けた。その道とはどの道なのか、少なくとも彼女にとって良くは聞こえなかったみたいだ。

「あ……い、いや、済まねえ。俺様でつきり髪が長いから男かと思つてよ」

「それは別に気にしてないわ。ふうん……私ハウエン出身だから知らなかったわ。ここでは女の子の間ではショートで、男の子の間ではロングが流行なのね」

流行の問題ではないかと……一行は思った。

バイ・ザ・ウェイ。

「おねえちゃん、どうしてシンオウでうまれていないのに、シンオウにいるの？ なにしてたの？」

ジエクトはソフィーの背の上からジユディーを見上げる。今まで顔を合わせたことのないポケモンなので、その視線は好奇に満ちていた。

「っ！ きゃあー！ 可愛いつ！ ちっちゃいアブソルなんて初めて見るわ！」

すると、ジユディーは彼を見るなり、体に合わない甲高い声を上げ、彼の母親からひよいと持ち上げ抱き締めた。本当に締めている。それはもうメキメキという擬音語がぴつたりである。

「おねえ……ちゃん……！ くる……し……！」

彼は必死にばしばしと右前足で彼女の腕を叩き、上手く動かない口の代わりに苦しさを訴えた。

「あら、ごめんなさい。私、小さいものとか可愛いもの大好きなのよ！」

「ジエクト……」

見掛けによらないジユディーの趣味に付き合わされ、ぐったりしているジエクトに、皆は手を合わせた。

閑話休題。

「何で来たのかは言えないわ。ちょっと事情があつてね。それで来たのはいいけど、シンオウって住みにくいところね。いつも天地が

ひっくり返っているのかしら？ 人間は襲ってくるし……暫く耐えて撃退してて、ちょっといいかなと思っただら前よりまた景色が酷くなっただし……どうなっているの？」

微量の諧謔を混ぜ、分からないだろうと知りつつも、ジユディーは静かにこの異質な世界の絡繰りを訊いた。

「俺達もよくは……でも、この異変は多分俺達の仲間の1人が関与していて、それで今、説明中なんだ」

「つまりこれは貴方達の仲間の裏切り ってとればいいかしら」

裏切り サルコは彼女のその言葉に、びくりと肩を強張らせた。

「そんなんじゃない！！ あいつはそんなことする奴じゃないんだ！ 俺達を裏切るなんて……」

脊髄反応のように、すぐジユディーに激しく反論したサルコだったが、半ばは自分に対しても反論していた。裏切ったことが事実無根なら笑い飛ばせるのに、歪んだ世界を前にした以上、その可能性も否定できなくなる。その時生じてツアイトに押した裏切り者の烙印。心のどこかで仲間を信じることができなくなっていた自身を、彼は今の言葉で叱ったのだ。

俯き険しい表情をしている彼に、彼女は言い過ぎたことを謝った。サルコは彼女を許し、急に感情を露わにしてしまったことを詫びた。そうして気持ちの整理のついた頃、彼はジユディーに事情を全て話した。彼女は話を聞きながら唯頷いていた。

そうなの……

彼女はそう一言言ってからズンズンと炭鉱の方向へ歩いた。

「何処行くんだ？」

「知ってるの。ここが人間共の巣窟になってるってこと。クロガネにいたポケモン達もみんな人間共に……貴方達の話聞いたら、もう我慢できない！！ 感覚も元に戻ったし、人間共をぶっ飛ばしてやるわっ！！」

彼女は手首から烈火を噴き出して炭鉱に姿を消していった。

「ジューデーー！」

「俺様達も行くぞ！ ネエちゃんだけじゃ不安だ！ あんな別嬪、捕まっちゃったら泣くしかねえぜ！」

「ああ！ 分かってる！」

サルコ達も彼女の後を追って炭鉱へと走った。

炭鉱内は意外と広い。そして、足場が悪い。

「……きゃっ」

ソフィーが躓きそうになり、サルコはそれを支えた。生息地の関係で、足場の悪いところでも滅多に躓かないアブソルであるはずの彼女だが、今は何だか足の運び方がとても頼りない。

「大丈夫か？ さつきから足取りがおぼつかないが……ジエクトと一緒に町で待っていた方がいいんじゃないか？」

「……いいえ、少し慣れないだけですから……お願い、私にも私にも協力させて下さい」

ソフィーはそう切願したが、どうも顔色が悪く、食欲もないことから、彼女は体調を崩している。サルコはそれに気付き、そんな状態の妻を戦わせられないとすぐに結論付けた。

「言っただろ、無理するなって。ここは俺達だけで大丈夫さ……体調悪いんだろ？」

「……いえ、大丈夫です、無理はしていません。2人きりで待つているのは……どうしても怖い」

「……分かった。ごめんな、遠ざけるようなこと言っただろ。じゃあ、無理の掛からない程度でお願いできるか？」

皆といる為だったら、戦うことも厭わない。その位、異国の建物の一件以来、ソフィーは誰かと離れることに恐怖を感じていた。

彼の言葉に、彼女は安心したように微笑んだ。

進んでいくと、奥から激しい音がする。人間はそこにいて、彼女もそこで戦っている。

彼らは段差を下り、彼女のいる深部へ向かった。

「はあああっ!!！」

ジユデイーは外套を翻して人間を蹴倒していた。

鮮やかなそのフォームといい、威力といい、彼女は相当な場数を踏んでいると容易に推量できた。

所謂、彼女は百戦錬磨の女戦士である。

「やるな、ネエちゃん。サル公より蹴りが上手いでねえのか？」

「そっ、そんな訳ないだろ?! 見てろよ、俺だって……!!！」

自分も薄々気付いていたものの、スタールにズバリと指摘され、サルコはついムキになって戦場に乱入していった。

「サル公の奴、絶対張り合ってるぜ。同じタイプとして負けられねえんだろうなア……俺様は細々やる羽目になりそうだけ」

「僕もあの2人に負けないぞ!」

「……私だって、できます」

2匹も戦線へと赴き、ソフィーは覚悟して敵が来るのを待った。

「っりゃあ!!！」

サルコは人間の体を掛け上がってサマーソルトを食らわせた。

「貴方達……!! 私1人で十分よ!」

「こういうことは俺達の方が慣れてるんでね！ それに、お前見たら負けられなくなってるな！」

「宣戦布告、ね。いいわ、受けて立ちましょう！ どちらが人間を倒せるか勝負よ！」

こうして何故か3代目VS4代目、炎闘戦争が勝手に始まってしまった。

気の毒だが、巻き込まれた人間にはドンマイとしか言えない。

この戦いの行方や如何に？

51話 亭主の好きな赤烏帽子 (前書き)

お久しぶりです；

長らく消えていてすみませ (ry

今回は長めですー。

51話 亭主の好きな赤烏帽子

勝負の運びは両者共甲乙付け難い……というより区別がつかない。2匹共我武者羅に戦っているの、誰が誰を倒したのかが分からない。

それでも関係無く、拳を押し出し脚を突き刺し、終いには担いで投げ……鬼神の如く敵を撃墜していった。

気付いた時にはボールと人間の山。2匹は息を切らして顔を見合わせた。

「やるじゃない……」

「お前こそ……悪くないぜ」

そして2匹は打ち合わせか何かしたのか、スタールをがっと思た。あまりにも統一された動きに、彼は面食らった。

「うお、な、何でい……」

「どつちが勝った？」

「知るかよ！ 自分で数えとけてんだ!!」

こうして勝敗がうやむやなまま戦争は数分で終結。しかし結果としては、全てボールを取り戻せたので良かったは良かった。本来の目的はそれであるし。

「ヤレヤレ、お前さん達のせいでちつとも出番が無かったぜい……」

「でも、2人共凄かったよね！」

「まあな。そうそう見られるもんでもねえしな……つとと、嬢ちゃん大丈夫か？」

スタールはふらついたソフィーを見て声を掛けた。彼女は全ての敵を振り切ったが、やりきったという達成感よりも、体の怠さが前に出たようだ。

「はい、大丈夫です……」

「おう、ならいいけどよ……」

内心、大丈夫じゃなさそうだとスタールは思ったが、それを言う前に、彼女にふいと視線を逸らされてしまった。

一方、炎闘の2匹は、小玉を付けられ解放されたワンリキー達に囲まれて感謝されている。

「ありがとっス！ 俺っち達を助けてくれた上に、この玉まで……あんた達は俺っち達の救世主っス！」

1匹のワンリキーがジューデイーの手を握ってブンブンと振っている。途中で身長が足りなくなってもおかまいなし、吊りそうなほど爪先で立ち、しまいには地から足を浮かせてまで感謝の気持ちを一瞬懸命伝えている。

「当然のことをしたまでよ。お礼なんていらわないわ」

「な、何て奥ゆかしい！ 俺っち感動したっスー！！」

「あ、あはは……（はあく、何だかなあ……）」

「サル殿済まねえ！ あっしがいたというのに、こんな苦勞を掛けてしまつて……！ あっしは自分の力不足を痛感した！ こんなあつしを許してくれ！」

「ゆ、許してつて……あ、いや土下座されても俺が困るつて……誰だつてこんな状況では打破できないさ。気にしたつて仕方ないぞ。気にするなつて」

「サ……いや、兄貴イッツ！！」

一方のサルコはと言うと、ゴーリキーに土下座された拳句、彼の厚い胸板と隆々とした上腕二頭筋に挟まれている。向こう側が見えたと本人談。そしてジェクトが同情的な視線を向けているのが分かった。

「……すっかりヒーロー、ヒロインだな。ちえつ、俺様達も頑張つただけだよあ。なあ？ 海蛇」

「そうだね。でも一番頑張つてたのはあの2人だもん」

「おとうちゃんとおねえちゃん、カッコいい！」

母親の背の上で、ジェクトは興奮気味に体を乗り出した。そんな彼を、ソフィーは危ないわよと注意しながらも、その声はどこか宙に浮いていた。

「救世主様、恐れながらいいツスか？」

少々激しい感激の嵐も過ぎ去り、収束しつつあるころ、先程自分の腕が千切れんばかりにジュディーと握手していたワンリキーが、台詞通り恐れ入りながら彼女に声を掛けた。

「その呼び方止めてって……何？」

「俺たち達、じっくりとお2人の技を見て見たいツス！ 今一度、お2人同士で手合わせ宜しくお願いしたいツス！」

彼らの活躍を見て、格闘家としての血がたぎったのだろう、ワンリキーは両拳を血管が浮き出る程握り、2匹同士のバトルを見たいと申し出た。その燃えている真つ赤な瞳から見るに、実力十分な2匹から動きを盗む気満々である。

「え？ 私とその……えつとあなた、名前何だっけ」

「サルコだ。俺とジュディーで戦えばいいんだな？」

「是非！」

「サル公、そんなに無駄に体力使つなよ。止めとけ！」

スタールはちらちらとソフィーを見遣りながら、サルコにエキシビジョンマツチを止めるよう指示する。だが、彼の頭の炎は既に盛っていた。舐めるような熱気が辺りを包む。

「……いいぜ。俺もそう思ったところだ」

「で?! お、おいサル公ッ!」

「……あら、偶然。私とあなたって気が合うのね」

ジユデイーもサルコに負けなくらいに輝く炎を手首から出した。口調は静か。だがしかし、焰の勢いは誤魔化しきれず、彼女自身の腕の羽根が数枚燃えた。

「ネエちゃんもヤル気満々かよ?! いい加減にしろよ手前ら!」

スタールの怒号を華麗にスルーし、炎闘コンビ、既に構えている。もう誰にも止められない。

彼と彼女のライバル心、闘争本能は今、タイプ一致で燃えている。勿論どこかの誰かの制止に耳も貸さず、第二次炎闘戦争が勃発した。

炭鉱に響く、何かがぶつかりあう音。

2匹の格闘ポケモンは組んず解れつ、時には炎を繰り出し、鎬ツノを削っている。その辺に転がっていた石炭も、火花を散らして、いる。漢衆も2匹が何かすることに歓声を上げている。

「くっ……予想以上だな……っ！」

ジュディーの機関銃のような蹴りを腕でガードしながら、サルコ。受ける度に彼の頭の炎の火の粉がチツ、チツ、と零れ落ちる。

「口利く暇があつたらもつと防いだら……どう?! 燕返し!」

「うわっ……! っ……」

彼女の目にも止まらぬ手刀は彼の肩を裂き、彼のガードを崩した。そして無防備になった鳩尾みそおちに強力な膝蹴り。

「……ッゴホゴホッ!」

サルコは余りの衝撃に堪らず蹲り、涙目になって咳き込んだ。切られた肩の血が点々と地面に模様を付けた。

「女だからって、ナメないでくれるかしら?」

「……甘いな」

「えっ?!」

サルコが口角を上げたと思えば、彼の周りに砂埃が巻き上がった。思わずジュディーは外套に顔を当てて彼から目を逸らした。

暫くして視界が開けると、巨大な穴を残してサルコが忽然と消えていた。

「穴を掘る……まずは落ち着きましょう」

ジューデューは目を閉じ、神経を研ぎ澄ました。どんな物音でも、震動でも感知できるように視覚を敢えて遮断したのだ。すると、もこりと彼女の足元が盛り上がった。

(来る　！)

ジューデューはその場から飛び退く。しかし、サルコは出てこなかった。

その代わり、彼は彼女の着地点の一步手前に飛び出した。

「な　くっ……！」

ジューデューは、攻撃より防御を優先させた。関節をやられないように膝を曲げて中腰になり、顔の前で腕をクロスした。しかし、彼はお構いなしに突進、彼女の折れ曲がっている膝に片足を掛け、もう片足の膝で彼女の蟀谷こめかみを抉えくるように激させた。その素早さは、彼女の防御を嘲笑うかのようである。

また沸く歓声。何か知らんが、漢泣おときしてる奴もいる。

「……つつう……！」

「膝には膝、だよな？」

着地を成功させ、土に塗れた顔で、サルコは悪戯小僧のような無邪気な笑みを零した。

「……ちよつと効いたかな……でも、まだこれからよっ！」

ジューデューはまだ揺れている頭を振って回路を正常に戻してから、勢い良くそこらの大岩を上空に投げた。そして、彼女自身も、すぐ

に自慢の長い足を曲げて上空に飛んだ。

何をするかと思えば、彼女は空中で1回転しながら、そのはずみのかかと落として大岩を砕いた。

ばらばらと彼の頭上に何かが降ってくる。砂であった。

次いで小石、そして塊

「岩雪崩っ?!」

「御名答!」

しかし小回りの利く彼にはどうってこと無かった。敏捷性をフル活用して全ての岩を避けきった。

「私の事、無視しないでよね!」

岩の対応に追われていたサルコは、いつの間にかジューデーに後ろを取られて、炎で包まれた回し蹴りを打たれた。彼女は避けられることを前提に岩を落としたのだ。岩雪崩というより、岩石封じに近いかもしれない。

サルコは蹴られた拍子に岩の鋭い縁で頬を切った。始まった時点で流血沙汰、今もほんの一舐めであるが血が流れた。

それでも彼らは戦っている。手合わせを越えて、自分のプライドの為に戦っているようなものだった。

漢衆も、もう歓声を上げているというより、固唾かたすを飲んで見守っている。

サルコの妻であるソフィーは閉塞感のある洞窟と、むんとくる熱気、目まぐるしいバトルのせいか、眩暈を覚えた。

足元はふらつき、彼女は伏せの体勢になる。

「おかあちゃん、どうしたの？」

「嬢ちゃんどうした？ さっきから気になってたんだがよ、体の具合でも悪いのか？」

「……いえ……いつもの貧血です。気になさらなくても大丈夫ですから……」

「ねえ、サルコ達にもう止めるように言った方がいいんじゃないの？」

蒼い顔で気にするなといわれても無理な話である。フェロックは目を閉じ耐えている彼女を、不安そうな目で見おろしながらバトル中断を提案した。無論、スタールもそれには賛成であった。

「だな。俺様が言ってるよ」

「っ私なら慣れてるので大丈夫です……私の為にあの人の戦いを中断させては……！」

先程から変わらない蒼白な顔色で、ソフィーはスタールを止めた。すると彼は困惑して自慢のトサカをいじくった。セツトに時間がかかるものらしいが、この時は無意識だったそう。

「しかしよ、嬢ちゃん。言っちゃ悪いが、嬢ちゃん見ると、こっちも具合悪くなってるさうだぜ？」

「……最後までやらせてあげてください。あの人のお邪魔はこれ以上できません……彼の好きな事、今は手合わせを最後まで見守るのが

妻である私の役目でもありますので……」

スタールは彼女の考えを聞き、なんて健気なんだと、上を向いた。それから鋭い目でサルコを一睨みして舌打ち。今にも取って食いそうな気迫であった。

「……そこまで言うんなら嬢ちゃんの信念に免じて無理にとは言わねえが、どうしてもと俺様が感じた時は何と言おうと止めさせるからな！」

外野でそんなやり取りがされているとは露知らず、馬鹿亭sy……いやいや、サルコはジュディーの猛ラッシュに押されている。

攻撃に隙のない彼女に苦戦を強いられている彼、必死に血路を開こうとしていた。

(そうだ、体に触れさせなければ……!!)

そう思ったサルコは全身に力を入れ、炎の鎧を纏った。それは彼の身を包み、その熱さにジュディーは脚を引かせた。

彼はその一寸の隙を付いた。そのまま身に纏いつ体当たり、彼女は押されて、めり込むように岩場に激突した。

フレアドライブがその技の名。相性こそは今一つだが、高威力に助けられ、彼女に多いダメージを与えることができた。

「……くうっ！」

外套で直接背中への衝撃は避けることはできたが、それを差し引いても彼女の体に負荷が掛かる。

また一方で、この技は反動を受ける為、彼にも与えたダメージのい

くらかが跳ね返ってきた。

人間撃退直後のぶっ続け勝負、2匹はそろそろ疲れが顕著になってきた。

呼吸が荒く乱れ、重心が下へ下へと移っていく。

己の憊れ^{つか}を悟った2匹、一気に勝負を決めようと、技を掛けに互いの相手に向かって走った。

ジュディーはブレイズキック、サルコはインファイト　それらの技は同時に繰り出されたのだった。

鈍い音が響いた。

51話 亭主の好きな赤烏帽子 (後書き)

サルが駄目亭主に……orz

タイトルはだいたいあっていると思います。思いついたのだから仕方ない。

52話 響きあつ心

相打ちか、はたまた

2匹はそのまま技を出した状態で止まっていた。

戦いの庭は張り詰めた。その糸を切ったのは、何かが落ちた音。

「……っ勝った……！」

立っていたのは、サルコ。彼の渾身のインファイトはジユディーの腹部をしつかと捉えていたのだ。

逆に彼女はリーチの長さでは明らかに勝っているブレイズキックを放ったものの、彼の身長が予想以上に低かった為、彼の頭をほんの掠めただけで済み、その隙に懐に入られてしまったのだ。

2匹の身長差は70cm以上。塞翁が馬 ということだろう。

「……もうっ！ 悔しいわっ！ 女性に普通、お腹を攻撃するかしら！ それに、貴方にもう少し背があったら……私が勝っていたのよ！」

ジユディーは相当負けず嫌いらしい。倒された直後にも関わらず、負腹の業煮やし。腹を狙われるのは分かっているにも、腑に落ちないみたいだ。

「ネエちゃん、残念だったなア。サル公、100cmも無えんだぜ？」

スタールはここで、まさかのリーダーの秘密を暴露。その瞬間にサルコの白毛が逆立った。かなりの動揺である。

「ば、ばばっ、馬鹿言っなっ！ ……この前伸びたんだぞ！ 100cm位もうある……」

必死に弁明するも、段々と声が小さくなる。サルコは自分の身長がゴウカザルの平均より低いのをどうやら気にしていたようで、彼の炎の色がちよつとばかり、くすんだ。

こうなれば、短所は長所だと肩を叩いて笑い掛けてやるしかない。

「ま、気にしないで！ 身長なんかなくても、あんなにいい動きが出来るんだもの。足の遅い私には羨ましい限りよ。貴方とのバトル、楽しかったわ！ 私もまだまだね……」

「ジユディーは攻撃が鋭くて凄かったぞ。俺も楽しかったぜ！」

直接一戦を交え、2匹は笑った。

「あなた、流石でした」

「ソフィー」

坑内ではあれだけ調子が悪そうであったのに、まるで何事もないかのように、ソフィーはサルコに勝利を称える言葉を掛けた。

朝と、坑内に入った時の彼女の様子を思い出した彼は、申し訳なさそうにすつと肩を竦めた。

成り行きで引くに引けなかったとはいえ、血気に逸ってしまったことは言い逃れできない。

「ソフィー、ごめんな。そういえばお前体調悪かったっけ……」

「てめっ今更」

スタールは気付くのが遅いサルコに食ってかかりそうだったが、何かを制するような目をしたソフィーと視線が合った瞬間にその気持を引っ込めた。彼女はそれを確認すると恭しく彼に礼をする。

勿体無え…… そうスタールは呟いた。

「私は大丈夫ですよ。あなたの喜びは私の喜びでもあります。私も、生き生きしたあなたが見られて楽しかったです」

サルコの、戦闘をしている姿が一番好きなソフィーにその台詞の偽りはなかった。しかし、言い方にどうも無理があるのに周囲の一部は気付いていた。そして、一番気付くべき相手は彼女の言葉を真に受けて照れたりなんかしている。

「そ、そうか。それなら良かった」「アツニツキィー！！！」

突如でかい声と厚い肉体がサルコとその仲間を遮った。その張本人のゴリキィーはそのままサルコに抱き付いた。彼はまたもや脂っこい筋肉のサンドイッチに遭ってしまったようだ。

「つつぎゃああーっ！！！」

燕返しの傷も筋肉に押し当てられたので、世に無くサルコは悲鳴を上げた。

これは正直塩責めより辛い。精神的にも来るものがある。

「あらら、負けてよかったかしら？」

勝者の断末魔（？）を聞き、ジュディーは苦笑し、負けるが勝ちというパラドックスが成立したことを実感した。

「姐御も立派やした！」

「ありがとう、お言葉だけ貰っておくわね」

サルコを丁重に安置し（？）、ゴリキーはジュディーにも抱き付こうとしたが、彼女はさりげなく健かに腕を払った。下手すればセクハラである。

それはともかく、周りは漢衆の拍手喝采に、彼彼女を称える声。何とか立ち直った彼と、彼女もお互いの健闘を称え合い、握手を交した。

第二次炎闘戦争、これにて終結。

終戦を迎え、人間も退治したので、一行は炭鉱を出た。

「ん、はあ〜っ…！やっぱり戦った後って気持ちいいわね！」

「全くですなあ、姐御！」

隙あらば触ろうとするゴリキー。辟易ヘキエキしつつもジュディーはペルソナの笑顔で振り払った。時がたつのは早く、もう空は頬紅をあしらっている。

「もうこんな時間か……早いな」

「手前らが時間忘れて闘いすぎなんだっつもの！」

「いいじゃないの、貴方達も楽しめたでしょ？」

「……まあ……だけだよ……」

ジュディーが顔を彼に寄せて目を合わせたので、スタールは目を逸らした。

ほんのり色付いた頬は夕日の照り返しだろうか。

それとも、何であろう、男鰹おしぼの心でも揺らいだのか。

「あら、何？ 見つめられて照れているの？ 可愛いわ〜！」

「?! と、とと、年上をかつ……からかうでねえっ!!！」

もごもごと嘴を違わせ、スタールはジュディーの大腿をはたいた。動揺すると手癖の悪くなる彼。凶星きゆうせいといったところか。

「別嬪とか言ってたしね〜？」

ここぞとばかりに、フェロックは嫌らしげな顔で、髭を使つてつんつんとスタールを突っ突いた。

「海蛇手前言いやがったな!! 今度その事言ってみやがれ、その長え胴体ぶつちぎつてやらア!!！」

「あははははっ！ スタールがジュディーさんに恥ずかしくてさっさと去る！」

「手ん前ええエエーっ！！ 待ちやがれエ！」

今度は特性威嚇戦争か、フェロックとスタールは追い掛けっこを繰り広げ始めた。

「あいつら……」

その時、その追い掛けっこに参加するかのようについに冷たい冷たい風が吹いた。

「……くしゅんっ……！」

風に乗せられ、気付かれないように押し殺したようなくしゃみが1つ。

「、大丈夫？ 貴女、寒いのか？」

「……あ、その……はい……」

結局気付かれてしまい、ソフィーはふるりと震え、少し下を向いて頷く。

立派な自前の襟巻きがあるとはいえ、彼女の体は不安定。すっかり冷えきってしまったようだ。

すると、ジュディーは徐じゆに外套まもを外してソフィーに付けた。

「あっあの、これは？」

「あげるわ。運動したら暑くなっちゃって。大分ここの寒さにも慣れてきたしね！ 貴女四つ足だから歩きにくいかもしれないけど……」

…寒いよりはまし、でしょ？」

「……………！ありがとうございます……………！」

首と体の温かさとジューデイーの気遣いに、反射的にソフィーは礼を言っていた。彼女ならば、遠慮をワンクッションとしていれるのだが、この時は温もりに体を委ねたらしい。

「よかったね！ おかあちゃん！」

「姐御優しいっすね〜！ おまけに強いし、言う事無しっすよ！」

「ん、おまけとはちょっと違うかな？ 優しさも含まれて初めて強さって言えるのよ。」

どれか一つが欠けても駄目なの。ああ、自分でこう言うのも気が引けるわね……………私、この事をいつも自分に言い聞かせているの。受け売りだけどね」

ジューデイーは頬を掻き、照れ臭そうに肩を竦めた。

「姐御、勉強になりやした！ 流石ですなあ！」

「ふふ、ありがとう。役に立たせて頂戴ね」

この事はサルコも勉強になったと同時に彼女に対して、ライバル心から尊敬の念へと変わっていった。

彼の心を反映させるかのように夕日は彼女にスポットを当てた。

サルコ達はこの後先へ行こうとしたが、漢衆にまだいて欲しいと

せがまれ、折角という事でここで一夜明かすことにした。

そして何故か博物館で泊まっているサルコ達。ポケモンセンターが改修工事中で放置されてしまっていたので、仕方がなかったらしい。

日中の熱気とは打って変わり、静寂が席卷している夜中に、ふとサルコは目を覚ました。

闘いの興奮がまだ冷めやらないのか、起きていることに慣れてしまったのか、隣のデカブツに無意識的に恐怖したのか、兎に角目が覚めた。

彼は外の空気でも吸おうと外へ出た。

今宵は満月で、硝子細工のような空気は透き通って冷たく、その望月をいっそうひき立たせていた。

ふと前を見たサルコはその月影のシルエットに映し出された、ある人物を見つけた。

シルエットは激しく動き回り、幻想的という訳でもないが、象牙色の髪が銀色の光に反射され、綺麗だった。

「ジューデュー」

彼はシルエットの名を呼ぶ。それは動きを止め、こちらに寄ってきた。

その正体はほんの前に鎬つを削った相手であった。

「サルコ！ 寝なくていいの？」

相当運動したのか、まだ息が弾んでいるジュディーは、まだまだ冴えている碧眼を見開いて彼に焦点を合わせた。流れる汗もそのま
まに、少し気まずそうである。

「お前こそ、夜更かしは女の敵だぞ？」

ちょっと気障っぽく、サルコはそんなセリフを言ってみると、ジュディーは彼に固定していた視線を一旦外して頬を緩め、そしてくすりと笑った。まさか彼からそんな台詞が出るとは思わなかったのだ。

「ふふ、お生憎様。夜更かしは日常茶飯事なの。それに、貴方に負けちゃったことが本当に悔しくて！ 寝てなんかいられないのよ。お陰で、下段攻撃も上手くなったのよ！」

ほんの前に気まずかったのは人知れず練習をしていたからだろう。しかし、彼の先程の台詞でどうでもよくなり、彼女は素直に打ち明けた。

すると、今度はサルコがジュディーから視線を外さなくなった。どことなく不機嫌そうに。

「下段……悪かったな、チビで！」

自分の低身長を暗に示す下段攻撃という言葉が少し気に触れ、サルコは乱暴に柵に腰掛けた。

折角の勝利の余韻も、コンプレックスを蒸し返されて消えたのではたまらない。

「あ、そんなつもりで言った訳じゃないんだけど……」

ぶすつとしているサルコを気にしつつも、ジュディーも ちよつと休憩 と、サルコの隣りの柵もたに凭れた。

「……………」

「……………」

こうすると、話題が出てこない。何も言わずに戻るのも何だし、ただ2匹の間に沈黙が流れる。

あれだけ拳を交えても、聞きたいこともあるであろうに、その一言が言えない。

「ねえ……………」 「あのさ……………」

「「あ」「」

勇気を出したら出したで、言うタイミングが重なる。これも気まずい。

「いいわよ、どうぞ」

「、いいのか？ 大した話じゃないけどさ、ジュディーって野生じゃないだろ？ パーティーとかトレーナーってどんな感じなんだ？ 厳しいのか？ やっぱりちよつと気になってさ」

時間の計らいで不機嫌が薄れたサルコは、大したことないと言いつつも、自分が今一番訊きたいことを口にした。あの強さは、後ろに誰かの支えがある 自分もトレーナーのポケモンだけあって、

分かるところがあつたのだ。

「それ言っちゃうと切なくなるんだけど……ま、いいか。楽しいわよ。トレーナーはちよつとだけ厳しいけどね。ジムリーダーの息子だから力が入るみたい。あと、パーティーのメンバーも賑やかなのよ！ まあ、ちよつとおバカな奴もいたり、頼りなくて守りたくない子もいるけど、みんな強いの！ この前なんて」

ジュディーは次々と仲間の事諸々を話し始めた。目は生き生きとして、身振りを加えて。とても自主練習の休憩中だとは思えない。

「それでね、そのメンバー2匹と私とで、バトルフロンティアっていう、バトル界の権威ある所を制覇したのよ！」

彼女の話は暫く続いた。しかし、サルコには退屈に感じなかった。シンオウ地方とは違う、暖かいホウエン地方の話は、彼にとって新鮮で、ところどころの相槌にも力が入っていた。

「そうか、凄いな！ ……でもこう聞いているとジュディーってパーティーの事大好きなんだな。何で1人だけシンオウに？」

サルコがそう言うと、ジュディーはぴたりと喋るのを止めて物憂げに目を細めた。

「……そうなのよね……私、皆の事が大好きなの。でも、ある事があってね……自分の力に限界感じてつい……皆に合わせる顔も無くて飛び出しちゃった。それもなるべく遠くについて……自分で馬鹿だつてこと分かつて……悲しいわね、負けず嫌いはトレーナー譲りみたい」

陰った微笑を繕う彼女。強そうに見えても内面は色々なものを抱えている。サルコにもそれは十二分に分かった。それを解放し合い、ぶつけるのがバトル。彼らにとって、それは一種の慰め合いなのかもしれない。

「なら、生まれ故郷には暫くは帰らない……てことか？」

「そういうことになるわね。当分この場所、シンオウの地で戦うわ。一度決めた事だもの、倒れたって、何度でも立ち上がって、相手を見返してやるまで！」

彼女の凜とした声はサルコの心に反響した。この2匹は共感できるものが多いみたいである。

「ジュディーなら、できるさ！ 誰にも負けない、強さ」があるし、その意志があれば……仲間もジュディーのこと、きっと待ってるぞ」

「そうね……何か話してスッキリしたわ、ありがとう！ よーしっ、もう一息頑張るわよ〜！」

柵から離れ、ジュディーは伸びをして早速屈伸をした。相手が動いているところを見れば、格闘タイプとしては体が疼く。サルコはそわそわしていた。

「なら俺も付き合っぜ、ジュディーー！」

矢も盾もたまらず、気づけばそう、彼の口が言っていた。

「本当?! ……じゃあ前みたいには行かないわよ！」

炎と格闘、妥協を許さない心同士が共鳴した瞬間だった。

夜中の第三次目は夜明けまで続いたという

53話 ダブルエイチ結成

「ヒイラギ、あの子は起きた？」

牢屋。昏々と眠る少女を不安そうに見ていたヒイラギは、ヒサギのその声で顔を上げた。

「、ヒサギ。それがな、未だ起きてないんだ。本当にカイドウ様が眠らせたのか？」

「この目ではつきり見たわ。見間違いつて証明する方が難しい位……」

カイドウのさいみんじゅつ(?)を食らってからというもの、ヒツキは数十時間経っても意識を取り戻さない。生身の人間には強過ぎたようである。

「ところで、ヒサギ。カイドウ様の所に戻らなくていいのか？」

「カイドウ様は自室で仮眠をとられているわ。連日ずっと休まず起きていたのだから、応えてきたのよ……だから今の私はフリー。見張りも他の人がやってるわ」

カイドウもどうやら眠りに就いているらしい。ヒサギによると、彼はあれからすぐに、休むことを彼女に伝え、自室に戻ったという。ワザをかけた本人にも負担が掛かるのであろう。

「そっか……」

眩き彼はヒツキを再び見た。彼女は時々魔まされるように苦しそうな声を洩らし、身を二転三転させている。

「手を出しちゃ駄目よ」

ヒサギにはもうそのテのイメージが彼に付いてしまい、無意味な釘さしを行った。ヒツキを憐れみ、気遣う彼の視線でさえ、彼女の怪しい解釈の下では全然違うものになる。

「出・す・か 馬鹿っ！ ……魔まされてるなと思ってさ、こいつ」

「……本当ね。大事なポケモン達がああなんだもの。しかも、私達みたいな大人の身勝手にこんな目に遭って……私達は一体何をしてるのかしらね。こんな無垢な少女の未来を潰すようなこととして正直辛いわ」

ヒサギは目を閉じ牢に背を向けてしゃがんだ。カイドウにつきつきりで、彼の一拳一動に慄かなければならない彼女のその表情は疲れきっている。

「お前も同じか。俺もな、こいつの夢の話聞いたらここにいるのが虚しくなっただ、良かった、仲間がいて」

その瞬間、ヒサギは苦虫でも噛み潰した表情に。

「何だよ、その嫌っそーな顔！俺と同じ感性なのがそんなにアレか?!」

「大きい声出さないの!」

「……………ん」

ヒイラギの大声で、ヒツキはすっかりした正体のないまま、光を失いかけた目見を徐々に開いた。

そして彼女はゆっくりと体を起こしたが、視線は宙を見ていた。心ここに在らず、上の空。

彼女は感情のコントロールがあまり上手くないようで、落ち込むところなる。寝起きということもあるかもしれないが、それをも凌駕してシヨックだったのだ。苦しむポケモン達を見ることができず、何もできないまま意識を奪われ　阿漕な面があるとはいえ、正体は幼気な少女なのだ。その痛みを背負うのには若すぎた。

「……………あ、ここ牢屋か……………ヒイラギもいる……………」

「すっかりしろ！　暇だ暇だつて喚わめいてたお前はどこに行ったんだよー！」

「そんなことも……………あつたねえ……………」

未だ眠いのか、挫けているのが全く見当のつかない、へらりとした笑顔を零す彼女は、まるで花咲く往事を回顧する老婆のようであつた。

「……………諦めさえしなければ、事は変えられるわ。あのポケモン達、あなたのでしょうか？　トレーナーのあなたがそんなのでどうするの！ー！」

「おい、ヒサギ……………」

こんな調子の彼女を見ていられず、ヒサギはヒツキを叱った。急

なことで思わずヒイラギが彼女を止めようとしたが、ヒサギは彼を歯牙にもかけず、大きく息を吸って続ける。

「夢があるんでしょう?! なのに、私達なんかにいっつまでも捕まったままで、悔しくないの?! 私なんて、夢が無くてこんなことしてるのに……あなたには有るくせに、贅沢よ!!」

ヒツキは黙ったままだった。しかし、眼はこよない輝きを取り戻しつつあった。

「……っ……私、用事思い出したから……」

叱るというより、八つ当たりになってしまったと感じ、ヒサギはその場にい辛くなったのか、つかつかと牢屋を去った。

(言いたい事言っとして、俺だけにするなよヒサギっ!)

沈む少女と二人きり。気のきく男性ならばよい慰めの言葉くらい出てくるのだろうが、生憎彼は唐変木^{トウケンボク}。手持ち無沙汰にそのへんをうろろろするしかなかった。

「ヒイラギ……」

やがて、ヒツキが口を開いた。少し小さな声ではあったが、静かな牢屋では伝わるのに十分な大きさであった。

「ん、何……」

「私、あの子達を助ける!!」

突然、ヒツキが目見をかつと見開いて2本の足でしっかと立ち上がった。そしてヒイラギに驚く余裕も与えず、そう言った。

その語勢に迷いは皆無、書き換え不可能の決意だった。

先程の老婆の面影は微塵もない。

「なっ……！ 駄目だっ！ 何言い出すかと思えば……下手に動いたら何されるか分からないんだぞ？！ お前はあの方の本当の恐ろしさを知らないからそんなこと言えると思っけどな……」

「知らないから言えるの！ そりゃ確かにちよつとは怖かったけど今は平気だし……いちいち待ってたら手遅れだもん！ ヒサギさんの言う通り、悔しいの！ 何もできずにこのままずっと捕まってるなんて……だから……！」

「……！」

あの方は恐い、あの方は絶対 彼の権力を盲信していたヒイラギ。劇場のイドラ、演ずるのはワンマン・シヨウ。

生憎彼女は演劇には興味ないそうだ。

彼は彼女のその言葉に吹っ切れた。

自分は彼女の為に何かをしてやらなければならない 咄嗟に出た答えがそれであった。

「……俺も協力する……後悔しないな？」

「え、ヒイラギこそ、いいの？ 大丈夫？」

「ああ、いざとなったら組織から逃げ出してやる！ ……だ、ただ、念押しだ。本当にやるのか？」

「もーっ、しつこいなあつ！ やるつたらやるの！ 伊達にトレーナーしてないもん、決めたら進むのみっ！」

二重人格かと間違っ位のこの変わり様……差詰め、単純、ということだろう。

しかし今はプラスに働いているのでよしとしよう。

ヒツキ・ヒイラギの、ポケモン救出作戦 始動

54話 キクとナデシコ (前書き)

フォックさんのところのシルム君からオボンジュースとオレンジパイの差し入れを貰いましたー

サル「作者……分かってるよな？」

みんなで山分けでしょ？ 分かってるって

サル「よろしい」

o r z

54話 キクとナデシコ

「……で、どうするんだ？」

「何いつちゃってんの？　まずは私を外に出さなきゃ始まらないじゃない！」

ヒツキと手を組んだのはいいが、誰かに依存するのが当たり前になつていたヒイラギは、いつもの癖で指示を仰いでしまった。それも、自分よりも10歳以上年下の少女に。

したつぱ根性丸出しの彼に先行きの不安を覚えつつ、ヒツキは取り敢えず自分を牢屋から出すように強く指示した。

「そうか、出さなきゃいけないのか……」

ヒイラギは牢屋の鍵をいじくつた。チャラチャラチャラとやたらうるさい金属音がし、それはまるで彼の煮え切らない態度であった。継続される程、いらいらが募ってくる。この男は今更何を躊躇うのか。

「早くーっ！」

焦れたヒツキは、急かすように鉄格子を蹴飛ばした。しかし、鉄格子は誰がなんとおつと固い。蹴った瞬間、彼女の足に電流が走った。

「いつ……いつたいいいー！」

「お、おい……分かった、今出してやるから！」

猛獣が暴れて己の体を傷つけるので、ヒイラギは牢屋の鍵を開けた。

だというのに、ヒツキはまだ足を押さえて丸まっている。履き物はブーツだったが、薄いのか深くまで響いたらしい。

「大丈夫か？ ちょっと見せてみるよ。右足だな？」

彼は開いた牢屋に入り、彼女の痛がる足を見ようと、ピンク色のブーツに手を伸ばす。彼女は抵抗こそしないものの、少し嫌そうではあった。脱がしにくいブーツを取り、黒のハイソックスが露わになった時点で、彼女は靴下くらい自分で脱げると、ヒイラギの手を遮った。奇異な少女だが一応お年頃だし、異性に肌を触られるのは嫌なのかという考えに彼は至らなかつたが、無理矢理にひっぺがす道理などないので、黙って彼は彼女に従った。

やがて、明らかに日に当たってない白い足が現れた。

「ん、痣あざになってるな」

ヒツキの右足首には赤紫色の痣がくつきりとあつた。しかし、その痣が奇妙なのだ。数分前にぶつけたにしては、くつきりし過ぎている。それに、形。まるで花びらのように5つに分かれ、そして細かく裂いたビニールのように散り散りになっていた。

「ナデシコみたいだな……」

ヒイラギは昔見た植物図鑑にあつた花の名前を口にした。

「ナデシコ？ よく言われたけど……これは今のせいじゃないよ。生まれつきなの」

「色は違っけど、蒙古斑みたいなものか？」

「むう、そんなにコドモじゃないもん！」

生まれつきの痣を子供の証扱いされ、剥れるヒツキ。しかし、それは蒙古斑と言うには違っ、不思議な雰囲気を放ち、何かが宿っているような感じがヒイラギにはしていた。気付けば彼はそこに触れようとしていた。

「あ！そこに触っちゃダメ……！」

「うおぎゃああっ！！！」

一足遅かった。ヒツキがそう発したときには既にヒイラギはそこに触れていた。途端彼の手には激痛が襲っ。思い切り五寸釘で貫かれたような鋭い痛み。響き渡るおかしな悲鳴を上げ、ヒイラギは手を押さえて蹲った。釘をぶっ刺され、さぞ出血が酷いのだろうと、恐る恐る自分の手を見たが、出血なんてどこにも見当たらなかった。代わりに見えるのが、ヒツキの不機嫌そうな顔。

「だから言ったのに……なんかね、私以外の人在那里に触るとそうなるんだ」

「言うのが遅い！　っというか、何だその痣？！」

あまりの痛さで涙までが出てきた彼。同じ相手に2回も涙を見せてしまった悔しさを内包しながらそう抗議した。

「私だっけ知らないよ！　んもー！　それより、早くどうするか考

えなきゃ！」

「考えてなかったのか?!」

勢いよく立ち上がったわりに、ヒツキは何も考えていなかったらしい。目の前の敵に立ち向かうことばかりで頭はてんで回っていない。それこそ猛獣である。

「かつ、考えてるよ！　いくつか候補あるし！」

「ふーん、じゃあなんだよ。言ってみろ」

「え……えっと、ツアイト達がいるのは、さっき連れていかれた大広間だよな？　あそこってカードキーがなきゃ入れないって聞いたから、ヒイラギのカードキーで」

「ちよいと待て。……もしかして正面突破するつもりなのか？」

「もしかしなくても、そうだよ？　だって、あそこの部屋は入り口が1つしかないみたいだし、だからといって別の入り口を探して下手に動き回ったらまた捕まっちゃいそうだもん」

作戦もへつたくれもない。少女は特攻でも仕掛けるのであるろうか。

「……他の候補は？」

「ヒイラギがカイさんを部屋の外におびき寄せて、入れ替わりで私が中に入って機械をぼーん」

「俺はどうなるんだ?!」

「偉大な救出劇にはギセイがつきものだよ」

いかにも達観した風に、ヒヅキはヒイラギの肩を神妙な表情でぽんと叩いた。

「……あとは？」

先程から痛む頭を押さえつつ、彼は残る候補を訊いた。

「ヒイラギがカイさんに直談判」

「もう作戦でもなんでもないよ!!」

ヒイラギはヒヅキの案を悉く却下していく。トレーナーはもつと頭が切れると思いついていた彼は少し失望した。しかし、少女に全部を任せきる彼自身を失望すべきではいかとも思える。

とにかく、随分と短絡的な作戦にヒイラギは叫んだ。しかしその直後、作戦だのと悠長なことを言っていられなくなってしまう。

「おい、さつきからうるさいぞ! 一体何をしている!？」

そんな男性の怒声とともに、荒々しい靴音が奥から聞こえてきた。

54話 キクとナデシコ (後書き)

とりあえずヒツキについての伏線をば。

55話 ゲッド・ラック (前書き)

フォックさんからまた差し入れいただきましたー

激辛マトマパイとモモンカルピスだそうで、夏にはぴったりですね

V

サル「……………」

分かってるよ、そんなに睨まなくてもorz

55話 グッド・ラック

ここには監視カメラがない。本来、この牢屋は反省室みたいなところであり、重大なミスをやらかしたり、裏切ろうと企てた者が入るところである。しばらくすれば監視員に解放してもらえるので脱獄しようとする者は皆無に等しいのだ。

今は監視員であるヒイラギだが、この常連である。しかし、もしヒツキを逃がしていることが知れたら反省室どころではない。ヒツキはあくまでも外部の人間。みすみす逃がしてしまえば後々厄介なことになる。

下手をすれば組織全体を潰されかねない。そうなれば、ヒイラギの命も総帥によって潰されてしまう。

ヒイラギは焦った。しかし、無情にも靴音は近づいてくる。やばいやばいと頭の中で警鐘を鳴らすも、かしましいだけでなんの役にも立たない。追い詰められた彼がとった行動は実に原始的なものだった。

急に彼は牢屋の戸を閉めた。これで自分も牢屋に入っている形になる。

「どしたの、ヒイラ……きゃ?!」

ブーツを履き履き、ヒイラギの異変に気付いたヒツキだったが、訳もわからずヒイラギの背に覆い被せられた。

彼はパニックのあまり、今彼の中にある問題の中心人物を隠したのだ。こいつを隠していなかったことにすれば万事解決という、ヒツキに負けず劣らずの短絡的な発想を叩き出した。

勿論、何にも解決しない。

そしてとうとう靴音は止み、その主はヒイラギに影を被せた。彼は決死の覚悟で顔を上げた。

「またワタナベか……」

ヒイラギと目を合わせた大柄の中年男性は怒りを通り越して呆れていた。そして無精髭で周りが茂っている口を歪ませ、これまた大きな溜め息をついた。

ワタナベ、とはヒイラギの名字らしい。

「あ、アオサさん……どもっす」

ヒイラギもその男性の名前を呼び、もっとヒツキを隠す為に壁際に詰めた。

「……………ところで、お前は牢屋で何しとる」

「え?! あ……………また失敗をやらかしてしまっ……………」

ヒイラギはばれまいと必死に弁明をしているが、泳ぐ目はそれが嘘であるということを入れて語っていた。

ヒイラギの指導役のアオサという男は彼の目を見なくとも分かっていた。それよりか、彼の背後で何やら蠢うごめいていることの方が気にかかった。

「それと、後ろに何隠しとるか。ちろちろとピンクい布がはみ出てるが、お前の趣味じゃあるまい……………それに、この無秩序な装飾もおるんだろ、そこに少女が」

「げっ……………」

詰めが甘すぎるともいうか、元々直情的になったが故のことなの

で、彼の行動は手抜かりの塊だった。

ヒツキがしているかわいひピンクのマフラーが密かに自己主張していた。

更に、ふわふわと浮かぶ雲やめらめらと燃える炎、ぱちぱちと輝く火花があちらこちらに散りばめられて、牢内はすっかりファンシーと化している。

これをヒイラギ1人でやったというのなら、黙って見守るしかない。

「もー、いきなり何なのさ！ さつきから誰と話してるの？！」

窮地に立たされたヒイラギに、更に追い討ちをかけるように、ヒツキは体勢の崩れたヒイラギの上から頭を出した。

「ばっ……出てくるな！」

ヒイラギはとうとう言い逃れができなくなってきた。にもかかわらず、アオサは容赦なく推理を続けた。

「この牢屋の鍵を持っているのはワタナベだけ……そして、勿論内側から鍵は開けられない。ならば お前が自分の意思でこの鍵を開けたことになる。さあて、そろそろ何のためにこの鍵を開けたのか吐いてもらおうじゃあないか」

アオサは指の骨をバキバキと鳴らしてヒイラギを見下ろした。袋の鼠である。ヒイラギは正座をしてがくがくと震えていた。流石にヒツキもただ事ではないと思ひ、後ろを向いて目頭に唾をつけて振り返り、おもむろに彼にすりよった。

「あのね、この人は悪くないの！ 私、みんなと離れて寂しくてい

つも泣いているの。そんな時、ヒイラギが鍵を開けて慰めてくれるの……今も泣いていて……ただこの人はこうして抱きしめてくれたのに、そんな責めるなんて酷い！」

「な……お前そんなタマじゃ……ぐええっ」

自ら突破の芽を摘むなど戒めるように、ヒヅキは抱きつく力を強め、そして、ここはノってと囁いた。

「そ、そうそう、こいつつたらあまりにもピーピーと泣いてうるさかったんで……」

「泣いてたのはどっちだか」

「っ……」

ちくりとヒヅキの一言に心を刺されながらも、ヒイラギは彼女に合わせた。

アオサはしばらく身を寄せあっている彼らを見、腕を組んだ。その間、2人は真剣に彼の細く切れた目をじっと見ている。

「嘘だな」

「?! 何で私のこと信じてくれないの?!」

「別にあんたのことを信じないって訳じゃあない。ワタナベだ。その野郎、嘘つく時は目を合わせたがらないんだよ」

アオサはがたいが良いが、頭が切れる。相手をよく観察する力にも長けているみたいである。

ヒイラギは全身から嫌な汗が出ている。万事休すか。

「外部の者の脱獄、及び内部の者がそれを幫助ホウジュか腕一本で足りるといいがな」

「そんなご無体なあ！ だって本当に……」

「気の毒だが」

アオサは首を横に振った。この様子だと、脅しでもないみたいだ。ヒツキの目に不安の色が濃くなってきた時、不意に目の前の視界が開けた。

彼女が目線を少し下げると、ヒイラギが地に手と足を付け、頭を低くしていた。いわゆる土下座である。

「……させてください……こ、こいつを助けさせてください！」

彼の予想外の行動に、アオサもヒツキも目を丸くした。

「！」

「俺、耐えられないんです！ まだ俺の半分くらいしか生きていないのに、俺らの都合でこんな狭くて暗いところに閉じ込められたり、大事なポケモン達とまで離れ離れになって寂しそうにしているこいつを見るのが……こいつには夢があるんです。いつかに生き別れた父を待ちながらジムを経営するっていう夢が！」

「情で落とすって寸法か。少女にどんな事情があるうと、こっちにも事情が」

「ならば、アオサさんはカイドウ様の真意を知ってるんですか？」

「何だつて　？」

「あなたは以前ぼやいていましたね。自分の実力を汲み取らないで、自分に雑用ばかりやらせているって……俺の知っているアオサさんはもっと人間味があった！　いつからそんなカイドウ様の言うことを鵜呑みにするようになったんですか！　もしカイドウ様の真意がおそろしいものであったら止めなきゃならないって息巻いて……でも結局分からなくて仕方なく従っているんじゃないんですか？！」

「がたがたがたがためかすな！！　俺たちはな、所詮下の下の雑用地位だ！　……情けない話だが、カイドウ様の計画が実行された今、あの方が恐ろしいものに見えてきたんだ。逆らえばどうなったもんか……不満は山のようにある……が、押さえられていて身動きなぞとれん」

指導を仰がれるはずのヒイラギに凶星をさされたのか、アオサは顔色を変えた。しかし、自分の弱さに気づき、それからは静かに己の不甲斐なさを嘆いた。

「……俺は組織を辞めるつもりです。もし、命に関わることがあっても、こいつだけは守り抜くつもりでもいます！　嘘をついたことは謝りますから、ここはどうか見逃してください！」

「……………」

アオサは黙ってしまった。ドジを踏んで自分に迷惑ばかり掛けていたヒイラギが、今まで見たことのないような真っ直ぐな目でこちらを見ている。ふるふると震える脆い彼の体躯を視線でなめ回し、

やがてアオサは彼らに背を向けた。

「出な」

閉ざされた剛健な鉄格子を開け、アオサはくいと親指で檻の外へ出るよう促した。

「え、それ……って……見逃してくれるんですか?!」

「いや、牢屋（こゝろ）は俺達の憩いの場だ。勝手に荒らされては困るからな」

カメラの目がないここは、確かに落ち着ける。檻が物騒だが、静かで心地よい。監視員がいるといってもほとんど身内なので、ここでサボっていることは黙視されている。気難しい、あんな総帥をずっと相手にしていると、胃に穴が空きかねないので、息のつけるところが欲しいと思うのが人情というもの。

アオサは外っ面では、そこをヒヅキに荒らしてほしくないが為に外へ追い出そうとしたのだろうが、彼女は何かを分かりきったように笑みを溢した。ヒイラギも、何度も礼を言っていた。

「なんだお前達その態度……」

「えっへへー、おじさんつては分かりやすい！ でもありがと！ みんなが落ち着けるように、今すぐ片付けてどくからね！」

ヒヅキは目を輝かせて装飾を乱暴に剥がしていった。コーディネーターにとって大事な装飾品だが、彼女にとっては何ら特別なものでもないらしい。

「アオサさん……」

「監視カメラだ」

「え……？」

「まずはアジト内の監視カメラのスイッチを切れ。中の奴にはメンテナンスだと言えればいいだろう。カメラの管理は俺が教えたよな？ 操作は誰でもできて、管理できるのは俺とお前だけだ」

「……はいっ！」

アオサの助言に、ヒイラギは強く頷いた。

監視カメラのモニター室は幸い、この部屋の近くにある。カメラを封じれば、こちらも自由に動けるといふもの。

「ねー、ヒイラギっ！ 行こっ！」

「あ……お、おう。じゃあアオサさん、俺頑張ってきます！」

アオサは彼の言葉に黙っていたが、意気揚々と外へ去り行く彼らの背に向かって人差し指と中指を交差させた。

55話 ゲッド・ラック (後書き)

ヒジキの嘘泣き(?)はポケスペのブルーの手口です

始動と書いておいて始動していないといu)ry)

56話 黒獅子、しくじる (前書き)

場面転換失礼します。

尚、グランサイドには必ずサブタイに黒獅子とつけるようにしまし
た

56話 黒獅子、しくじる

「おにちゃ、はやーい！おもちゃーい！」

クソツ、忌々しい……！ 走っても走っても走っても落ちないこのピンク色の物体。

当然身を振っても落ちない。それで落ちていたらここまで苦労はしない。

人間達をはね飛ばし、岩をも粉碎しながら走った俺は、気がつけば山を抜けて211番道路にいた。

「もう、おちまい？」

「……ツハアハア……黙れ……ゼエ……」

望まずしてくつついたこのピンク。

幸せの象徴でもあるらしいし、そんなに懐いているなら連れてもいいのではないかと大抵の奴は思うだろうが、冗談じゃない。俺は他人も嫌いだし、ましてや子供はもつと嫌いだ。

自身の嫌う物が自分に触れてきたら、振り払おうとするのもごく自然の理だろ。嫌いな食い物を口の前に持ってこられるのを拒絶するのと同じだ。

食い物……ずっと走って、懲れつかと共に俺は些ちひか空腹を覚えた。タツキのところであつたとはいえ、半端ない運動量と、無為に経つ時間が俺の腹を減らしていた。全く　こんなに頻繁に飢えるのはいつ以来だったか。

考えたって獲物が口に飛び込んで来るわけではない。俺は眼を金色に光らせて、隠れている獲物を見つけた。

異変のせいでヨタヨタと叢くさくの中を這っていたビツパ。俺はこれに

目をつけた。脂ののってそうな、オスの成体だ。

「おにちゃ、なにしゅゆの?」

背中にはりつく物体の問い掛けにも答えずに、俺は奴に駆け寄って首筋に噛み付き、牙から電気を流して気絶させた。

殺さなかったのは、気絶させたままで食った方が美味しいからだ。牙を刺した途端の、苦痛で歪む顔を見ながら食うのも一興だ。俺なりの拘りだ。分からん奴は酷だと言っただろう。

食物連鎖に酷も慈悲もあるか。捕食者がどう獲物を食おうとも勝手だし、食われる方が悪い。

俺はビツパをズルズル引き摺って岩の陰に隠れた。

「おにちゃ、しよのビツパをどうしゅゆの?」

「……………食うんだ」

「! らめえっ! かわいしようらよ!」

餓鬼は目一杯俺の小玉の紐を引っ張った。

俺は再び息が詰まる。

この時、俺の頭の中の何かが切れた。

俺は奴に何万ボルトもの電圧を浴びせた。

奴は漫画であるように、目を渦巻きにして、あれだけくつついていた俺の体から落下。ザマミロ。

「最初からこうすれば良かった……………」

何だか無駄に疲れた。本当に伸びているのか、俺は奴を見てみた。

……………見ていたら何故か余計に腹が減った。ピンプクなぞ、捕食対象にしたことはないが、小さいながらも丸々としていて身が詰まってそうだな。

正直ビツパでは物足りない。一度味見をしてみるか

そう思った矢先、俺は尾に激しい痛みを感じた。

反射的に振り向くと、自慢の尾の先の手裏剣状の器官に歯形がついていた。

気絶していたと思ったんだかな……………混乱していた筈のビツパが力を振り絞って必殺前歯を俺の尾に行使した。

この時点で生け捕りはキャンセル、俺はビツパの喉笛を急に噛み付いて息の根を止めようとした。

だが、ビツパは目の焦点が合わないまま俺の牙をかわし、頬に体当たりをした。

瞬間、ぐわんぐわんと頭にダメージが響いた。ビツパごときの体当たりなぞ、痒いくらいなのに、何故こんなにも体の芯から痛みが染みってくる。

ビツパはそのまま調子に乗ってめちやくちやに逃げ出した。

逃がすか

俺は勿論奴を追った……………のだが、距離がなかなか縮まない。速度が出ないのは空腹のせいだ。決して……………決して俺が奴より鈍足であるからではない。

自分の中で全速力を出した。それでも肉を食らうまでにいかない。

とは言いつつ、あともう少しで追い付くところまで来た。

するとビツパは急に直角に曲がった。

俺は奴の動きの変化についていけず、そのまま直進した。その

先は……川……っ！！

刹那、水面^{みなも}が俺を映し出し、次に水しぶきが俺を包み込む。

お前は川に落ちた　冷たさで少し遅れた認識が、まぬけにも俺にそう伝えていた。

57話 黒獅子、桃玉、一蓮托生 (前書き)

合宿で死んでました

うう、あつという間に一ヶ月放置……

57話 黒獅子、桃玉、一蓮托生

寒い。何で俺がこんな目に……

俺は川から這い出て体を揺すって水気を払い、崖を登った。

水は嫌という程飲まされた。水分を吸って体が重い。耳にも水が入った。首を傾けてもまだゴポゴポ言っている。

これは報復か。今まで倒してきた水ポケモン達の怨念か、ルサンチマンか。どうなんだ。

……どいつもこいつも巫山戯るな。

「あ……おにちゃ、どうちたの？」

ピンク玉はすでに起き上がって間抜けな問いかけを俺にした。

……間抜けなど、今の俺に言えたこともないが。

それより……だ。こいつに気をとられていなければ今頃俺はあのビツパを仕留めていただろうのに

本当にどうかしている。こんなものに腹を立てるとは。

だが、腹は立ったことは立ったから俺は又奴に電気を浴びせた。

俗に言うだろう。食い物の恨みは恐いと。

食えないとなると、益々腹が来た。

仕方なしに別の獲物を探そうとしたところ、嘶いななきが聞こえた。

それに振り返った時分には俺の体は飛ばされていた。

何があったのか分かったのは地面に落下した後。

どうも混乱したポニータが何処からともなく突進してきたらしい。

ポニータは俺を轢いたら折り返して又去って行った。

明らかにおかしい。まるで俺に追突する為だけに来たみたいではないか。

どうなっているんだ。

自身の名誉の為に言っておく。俺は勢い余って水に落ちる愚行をしでかす男ではない。

ビツパの豹変ぶりも、ポニータも不自然だ。

まさか

俺はピンプクを起こし、3度めの気絶をさせた。

結果、俺はゴローンに押し掛かれた。

随分と体を張った帰納法だったが、これで分かったと同時に恐ろしくなった。

このピンプクに故意に危害を加えると災難に遭う。

放っておいても恐らく同じ事になるだろう。懐かれた分、裏切られた恨みも受けるというのか。

飛んだ貧乏籤だ……っ

「おい、起きろ」

「……おにちゃ……」

「……乗れ」

「え、のせてくれゆの?!」

救いは奴が餓鬼で単純ということ。そして幸い、奴はこの特異体質に気付いていないみたいだ。

先ほどのような滅多なことをしない限り、大丈夫だろう。早速奴は小さな目を輝かせた。

その目が俺のトレーナーを想起させ、迷惑をかける奴は皆こんな目障りな光を持っているのだと無駄に納得した。

「おにちゃ、おみずでベタベタ……」

「文句言うな」

俺だって災難に遭うのは嫌だ。回数ごとにエスカレートしているし、それで死んだら地獄でどう言い訳しろと。

こうなれば自棄だ。奴の気の済むまで、とことん奴を連れて行くことにした。

途中で他の輩にくつつくことを願って

58話 振り回され続ける黒獅子 (前書き)

黒天使さんのところのアスカからはオボンの実を、フォックさんのところのドルク君からは世界樹の実をもらいました！

ありがたいことですv

58話 振り回され続ける黒獅子

振り返ることに、見たくもないピンク色が目に飛び込んでくる。奴は他の輩にくつつかないどころか、寧ろ俺にずっとしがみついて巡る景色を楽しんでいた。

下手な鼻歌なんかも披露している。

俺は 乗り物ではない。迷惑なお前の能力が厄介だから一緒にいるだけの存在だ。……くそっ……そう言っても何割理解してもらえるか分かん。

そう思っている間も腹は減っていき、ぐうぐうと耳障りな音を立てている。

「おにちゃ、おなかちゅいたの？」

……聞かれたか。一体誰のせいだと思っているんだ。俺は立ち止まり、奴を振り落とした。

「いたた……しょういえば、ぶれあもおなかちゅいたな」

何を思い出したように……俺にとっては切実な問題だ。荷物を背負い、獲物もろくに取れず……何もかもこいつのせいだ。

「あ！きのみのなるき！」

俺が奴を恨んでいる間に、奴は勝手に走っていった。それで別れられるなら、この俺でも諸手を上げて喜ぶだろうに どうやらそうさせてはくれないようだ。

ピンブクの前に立ちはだかる物が　人間か……見飽きたな。
人間がボールを投げる前に、俺は奴を押し倒し、唸っておいた。
簡単な仕事だ、人間は一目散に逃げていった。小物にワザを使う余裕なんて今の俺にはない。

「おにちゃ、ありがと！」

ピンブクは礼だけ言っただけで木の実を目指して走った。俺も追いかけたが、途中足が纏もつれて転んだ。先程振り落とした時の仕返しがかきたみたいだった。……俺としたことが、失態ばかりだ。

砂を払い、ピンブクの元へ行こうとすると、何やら凄く鈍い音がした。何事かと足を速め、奴に追い付くと同時に、俺は目を疑った。

何せ木の実の山しか見えなかったからだ。これはモモンの実……そしてその山の一部分が何やら蠢めりいている。

「ぶは！　あー、くるちかった！」

「っ！」

俺が蠢めりいている部分をよく見るためにそこに顔を近づけていたら、奴が急にそこから飛び出てきた。判断力の鈍っていた俺は、奴の頭突きを思い切り額に食らってしまった。やはり空腹は百害あって一利なしだ。普段ならば……普段ならば今のはよけていた。

俺の苦悩も知らないで、奴は頭突きのことも謝らず、凄い勢いで木の実を頬張り始めた。魔神でも乗り移ったかのように、木の実の数を減らしていく。それも、にこにここと笑いながら。食べ方とはかく汚なく、汁が飛び散って俺にも掛かった。

あれよあれよの間にモモンの山は崩れ、数分後には平地に元通

りになった。

「おいちかったー！ さ、おにちゃ、いこー！」

自分だけ食べておいて、俺のことはお構いなしか。

「あ……おにちゃもおなかちゅいてたんらよね？ ちょっとまってー！」

心の声が聞こえたのだろうか。奴は些か申し訳なさそうにしてから、別の木に頭突きをぶちかました。奴の頭突きは凄まじい。何せこの小ささで、自分の何十倍もの木を振動させるのだから。こんな力をこんなチビに持たせておくのは勿体無いと俺は思った。

そう思っている間に大量の実が降ってきたが、それは俺にとって歓迎できるものでもなかった。

「ナナシの実……」

きつい酸味が特徴の木の実が1つ2つ3つ……食べるか。俺は酸い物が大嫌いだ誰だこんなもの植えた馬鹿はふざけるな。

「どっぞー！」

「いらん」

即答するや否や、奴はみるみるうちに涙目になっていった。これはまずいな……何が起るか分かったものじゃない。俺はナナシを一かじりした。

「っ……！……！」

ナナシの欠片を舌に転がした途端、口内が締め付けられる。びりびりと舌が痺れ、針のような鋭い一閃が喉の奥を貫いた。

もう噎せずにはいられない。

噎せると同時に、ナナシの野郎も追い出した。

「らいじょうぶ？　ないてるの？　かなちいの？」

俺が泣いているように見えるのは、噎せすぎて本能的に涙が出ているだけだ。やはり酸いものは無理だ。

俺は忌々しいナナシ共を尻尾で尻ぎ払い、踵を返した。

「あ！　まってー！」

「さっさとついてこい」

尾を下ろす。すると、奴は最初に出会ったときのようにそれによじ登り、背に乗った。少し重かった。……結局、奴だけが腹拵えを済ませ、肝腎な俺の腹拵えは先伸ばしとなった。

このままで大丈夫なのか　確証は持てないが、とりあえずここにいても仕方がない。もたもたしていたら捕まる。それか、飯にありつけずに死ぬ。どっちもごめんだ。

噎やかましく喚く腹を宥めつつ、次に見えてくる町を目指した。

58話 振り回され続ける黒獅子 (後書き)

今思えば、この話はなくても良かった気がする(r y

59話 妻の異変

2匹の第二次炎闘戦争は群青の絵の具を塗りつぶしたような色の空から蒼穹ソウキョウへと変化する頃に漸よっやく終わった。

「……………結局明けたな……………夜……………」

「ええ……………は、早いわね……………」

お互いボロボロの擦り傷だらけで仰向けに寝転がり、切れに切れた息を飲み込みながら短く会話した。よくもまあ、ここまでやれたものだ、呆れを通り越して最早2匹は称賛の域に達している。

「今日出発……………なんでしょ？ 眠らなくて大丈夫なの……………？」

「大丈夫だよ。歩いている内に……………忘れるって……………」

歩いている内に眠気や疲れをを忘れるなんて大したことだが、サルコはそのセリフを吐いた直後に大あくびをした。本当に大丈夫なの？ と、からかうように訊くジュディーを決まりが悪そうに見てから、彼は息を整え立ち上がり、伸びで答えをごまかした。

「ところで、なあ、ジュディー。さっきから思っていたんだけど、一緒に俺達と行かないか？ お前みたいな仲間がいると心強いんだけどな」

答えの代わりに、彼は勧誘をした。彼の急な提案に彼女は一瞬キョトンとしたが、すぐに緑色の眼を薄く閉じて寂しそうに笑った。

「有り難う。気持ちは嬉しいんだけど、やめておくわ。誰かがいると甘えちゃうし、また仲間を傷つけてしまうし……あ、今は聞かなかったことにしてね。私は一人で旅するわ。ごめんなさいね」

「そうか……残念だけど仕方ないな」

彼女の様子から見るに、仲間間で何かあったのは確か。しかし、強めの口調と一瞬のはりつめた表情に、サルコは深追いすることなく、そんな台詞を吐いてただ空を見上げたただけだった。

「おいコラ!! どサル……!!」

2匹が本格的に、戻ろうかという雰囲気になってきた頃、半径何処にいても届くような怒声が響いた。あの声あの口調は彼しかない。

「何だよスツール、朝から……いてっ!!」

「手前は真夜中だったつづつのに闘ってただろうが！ 生意気言うでねえっ!!」

怒声の主のスツールはサルコの顔を見るなり、彼の頭をばちこんと一発、器用にグーにした翼で叩いた。

「ネエちゃんもこの馬鹿猿をその気にさせるない!!」

怒りの矛先はジュディーにも向けられた。しかし、彼女は特に気にする素振りを見せることなく、少しだけ肩を竦めた。

「ごめんなさい、でもこればかりは格闘タイプの血が許さないの

よねえ……」

「そうそう、俺もそんな感じ！ メラメラと燃え上がるようだよね？」

「炎タイプだけにね。確かに、戦っていると燃えてくるわね！」

同タイプしか分からない感覚というものがあるのだろう。お互い、2タイプともマッチする異種族と会ったことがなく、この暑苦しい闘争心も中々理解してもらえなかった。

それぞれ良き理解者ができたのが嬉しかったのか、片言隻語にも同意と歓喜が混ざり込んでくる。

「血だろつが肉だろつがんな事は関係ねえ！ とつとと出発の支度しやがれい！」

スタールは仲間はずれ感が否めない。彼は、話してばかりで歩みの鈍い2匹の尻を叱咤で叩き上げた。

「はいはい、分かったから。今から戻ろうとしてたんだって！」

3匹はそんなやりとりを繰り返しながら博物館へ戻った。

「サルコ！ 何処行ってたのさ！」

博物館に入るとすぐ、フェロックが巨体をくねらせやってきた。少々ご立腹のようである。

「おお、悪い悪い。ちょっとジユディーとな……」

「え、また闘ったの?! よくやるねえ……」

フェロツクは呆れて体を縮めた。彼らの闘争本能は、ギヤラドスでも呆れ返るくらいなのである。

「はは、まあな……あれ、ソフィーはまだ寝てるのか?」

サルコは妻の姿が見えないのを不審がった。ジエクトがまだ寝ているのは分かるのだが、ソフィーがこの時間に姿を現さないのは珍しい。

「、ウン。起こしても少し声を出すだけで……具合悪そうだったよ」

「……おはよう……」ぞいます」

噂をすれば、ソフィーは起きて来た。

だが、何か様子がおかしい。ふらふらと足元が定まらず、顔も上気して真っ赤である。そしてサルコのもとに行き着く手前、急に彼女の体は傾いた。

「ッソフィー!」

床への激突は何としてでも防ごうと、サルコは本能的に彼女を抱いて支える。支えると同時に彼女の体温が伝わってきた。

(熱い?!)

彼女の額と自分の額を合わせると、明らかに彼女の方が温かい。

「ソフィーさん、どうしたの?!」

「熱だ……ソフィーが発熱した……」

「えっ?!」

「何イ、熱う?」

「大変……! どうにかしなきゃいけないわね!」

「言わんこつちゃねえ! おい、サル公!! 嬢ちゃんを看病できるところをさっさと探してこい!! ここじゃあ満足にできやしねえ!」

「あ、ああ! スタール、フェロック、その間、ジエクトとソフィーを頼む!」

「うん、分かったよ!」

「んなこと言わなくても分かっている!! そんなこと言っている暇がありゃあ、とつと探しやがれ!!!」

先程の呼ぶ声よりも大きいと思えばかりの声を張り上げたスタール。その大きさは、博物館全体をその余韻で痺れさせる程であった。

「……ポケモンセンターは封鎖されてるし……サルコ、私も一緒に探すわ!」

入り口までいたサルコをジュディーが引き止め、彼女自身も一緒に行くと言い出した。彼は拒むことなく、ただ脱力したままに頷いた。

生来体が弱く、誰よりも体調管理が必要だったソフィー。しかし、無理が重なりこのようなことになってしまった。

己を押し殺し、皆に合わせてしまう彼女の性格を一番分かってきた筈の自分が、目先の戦いに気を取られて彼女のことを気遣えなかった。そんな大きな過ちが、サルコを責め立てた。あの時こうしていれば、ああしていれば、こんなことにはならなかったと、彼は頭を抱えた。

「サルコー!!」

その時、彼の背中に衝撃が走った。

「はい、シャキッとする！ 早く行くわよ!!」

彼の背中をばしりと叩いたジュディーはずっと俯いている彼に一歩進むよう促した。

サルコははっと我に返り、自分でも片頬をはたいて自動ドアの絨毯に足を踏み入れた。

「やっぱり閉まってるわよねえ……あー！ もうっ、こんな時に限って封鎖してるんだから!!」

ジュディーは頑なに閉じているポケモンセンターの扉を乱暴に蹴った。サルコも苛立ちを隠せず、壁を殴り付ける。

「姉貴、兄貴、おはようっス！ どうなされたんスか？ ポケモンセンターに何か……」

2匹の元へ、1匹のワンリキーが、鶴嘴つるはし片手に元気よく挨拶をしに来た。そして、焦燥の色を彼らの顔から感じとり、何があったのかと首を傾げた。

「あのね、実は」

「おかあちゃん、ビヨウキなの……?!」

「まあ……見たところ、ただの風邪だからそんな大えしたことは」

「しんじょうの……?」

博物館内。ジエクトは起きるなり母の異変を聞かされ、顔を強張らせた。紅い瞳もきゅつと縮み、渴いた喉から一番恐るべき言葉が出てくる。

「そんな訳ないよ! 絶対大丈夫だから……ね、ジエクト……」

「そうだ。まだ頼りないお前さんを残して、嬢ちゃんは死ねるかっ
てんだ! なあ?」

スタールの言葉に、外套を毛布代わりにくるまっているソフィ
ーは小さく頷いた。

「……大丈夫よ……だから心配……しないで……」

「だよ」

「……………うん。わかった。ぼく、おかあちゃんをしんじる」

「よっし、いい子だ」

スタールはジェクトの頭を優しく撫でた。いつもの厳つい彼の顔が、心なしか和らいでいた。

「ふーん、スタールってジェクトに甘いんだー……………」

ジェクトを励ましていた時とは一転し、フェロックはジト目でスタールを見下ろした。

「別に甘かねえ。普通だろが」

「だって、僕がへこんでも、スタール見向きもしないじゃん！」

ぶすつとして、フェロックはそっぽを向いた。ジェクトとあまり大きく年が開いていない彼は、どうやら待遇の違いに不満なようだ。

「鏡見てみろい。その差だ。手前が女々しかったら鬱陶しくてしようかねえ」

「ひ、ひびこー」

とうとうフェロックは涙目になり、地に顔を付けてしまった。すると、今度はジェクトが慰めた。爪も充分に生えていない、ちっちゃな前足で、彼の三ツ又部分を優しく撫でている。

「やれやれ……どっちが年下だかなあ……」

「……あの、スतालルさん……あなたも少し元気が……」

溜め息と共にゆっくりと首を振るスतालル。そこに“枯れ”を感じたソフィーは、思わず声を掛けた。確かにさっきまで怒声を飛ばしていた彼とは違う。今の彼は、ジエクトを見遣っては、目を細めて尾を統べている。

「いんや、腹減ったなと思ってよ」

スतालルはそれだけ言い、いつまでも悄気ているフェロックに喝をいれに行った。

「……………」

彼から感じるものは色々あるが、体の怠^{たる}さには抗えず、ソフィーは何も言わずにそのまま瞳を閉じた。

「兄貴の奥さんがお倒れに……それは一大事っスね……」

事情を聞いたワンリキーは、神妙な顔付きで腕組みをした。

「ポケモンセンターが封鎖されてるの。他に看病できるところはないかしら？」

「……よし！俺っちの家に来るといっス！命の恩人である姉

貴と兄貴がお困りとあらば、家くらいいつまでも貸すつスよ！」

どんと胸を付き、ワンリキーは意気揚々とそういい放つ。勢いだけだと、家をも渡しそうである。

「本当?! 助かるー! 早速移動ね！」

「あつ……でも散らかっているつスから、少し片付ける時間が欲しいつス」

思い出し、ワンリキーは申し訳なさそうに頭を掻いた。散らかったままでは治るものも治らない。2匹は首を縦に振り、彼の願いを承諾した。

「オツケー、それなら私も手伝うわ。その方が早いでしょ？」

「そそそそそんなつ、恐れ多いつスよ！」

突然、自分が救世主と崇める人物が、自分と共に埃を被って掃除をすると言い出すものだから、ワンリキーは飛び上がった。目を白黒させ、言動がしどろもどろとしていて正体を掴めなくなっている。幼い頃から上下関係を叩き込まれている彼にとっては、これだけ慌てても、まだ拳骨1個か2個が降ってくるオマケがつくと信じてならない。彼はキョロキョロと忙しなく周りを窺った。

「心配しないで。私達はただのしがない旅人ですから。宿を借りる身、これくらいはして当然よ！」

ジユディーは軽くウインクして、地面に放置してあるワンリキーの鶴嘴を担いだ。

「それに、今はその場所を必要としているポケモンがいるのよ?」

ワンリキーは暫くもごもごと口を噤んでいたが、やがてジューデイーの目を見てはつきりと頷いた。

「……分かったっス! では姉貴、俺うちと一緒に掃除をお願いするっス!」

「そうこなくっちゃ! 任せといて、掃除は得意なの!」

「ジューデイー、俺も……」

張り切っているジューデイーの傍ら、サルコは彼女の意気に乗っかるようにその名を呼んだ。次に出る言葉は大方予想がつく。

「サルコはだめ。ソフィーさんの所にいてあげなさい。仲間が一緒でも、やっぱり夫の貴方がいないと心細いでしょ?」

ジューデイーも予想がとつくについていたのか、彼が最後まで言わない内に彼をはじいた。少々言い方はきつかったが、その目は暖かみを帯び、本当に夫婦を気遣っているようであった。

「兄貴、準備ができたら呼ぶっスよ! こちらはなーんも心配ないっス!」

「……っ」

2匹から爪弾きにされたサルコは、ありがたさと申し訳なさに声を詰まらせ、踵を返して博物館へと走った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6740j/>

MYTH

2011年11月27日01時53分発行